福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集

比恵遺跡

第9・10次調査報告

1986

福岡市教育委員会

正誤表

第145集　－比恵遺跡 第9・10次調査報告－

No.13283

頁	行	誤	正
插図目次	図113		縮尺 1:1500
図1			※ 別図に示す
1	7	小河川により、解析され	小河川により、解析され
6	図5		アミ：17号溝，数字：井戸
11	図10		164：17号溝
12	18	162・164は	162は
13	25	コンテナにして10箇程で	コンテナにして10箱程で
14	18	素縁り1の(140)と2字状に	素縁のもの(147)と くの字状に
18	図19	工器	土器
19	図20	139	137
20	図22		189：外面丹塗り
21	1	瓢形土器	瓢形土器
30	9	褒とするのは8.1919である	褒とするのは8・19である
33	22	木は三又鍬	34は三叉鍬
38	21	(図	(図51)
	26	、後期中葉と	、弥生時代後期中葉と
46	20	(図	(図62)
47	9	刃幅17㎝	刃幅1.7㎝
50	2	21号溝口近い	21号溝に近い
	15	(図　)	(図71)
51	3	同一体体と	同一個体と
55	図80		右上：252
58	11	(図　)	(図83)
	21	(図　)	(図83)
61	8	(図　)	(図88)
63	3	(図　)	(図94)
73	2	5・25と、	5と、
	3	24・8とがある	26・8とがある
75	8	曲げ物(32・33)	曲げ物(1・2)
	18	幅　mを	幅0.1mを

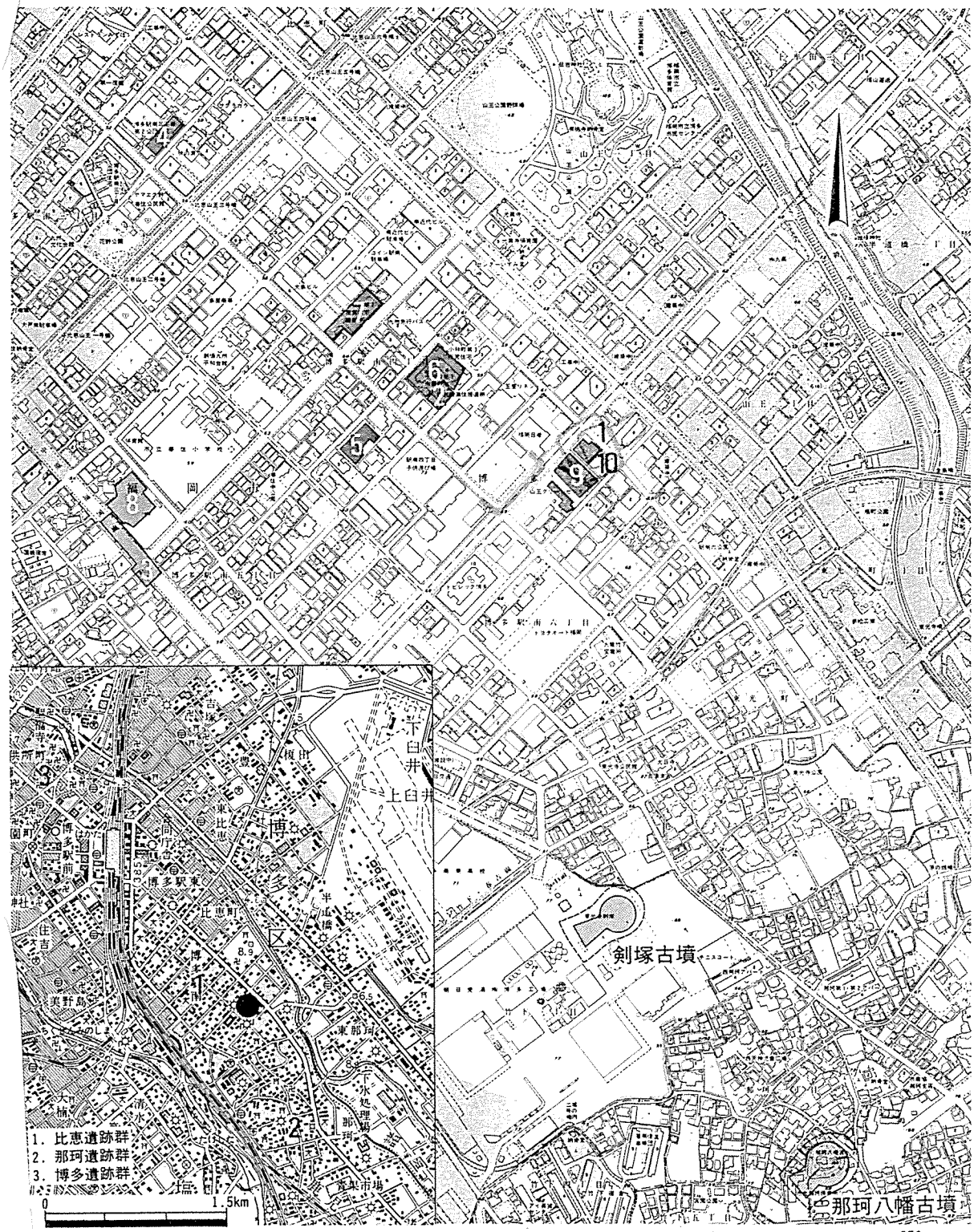


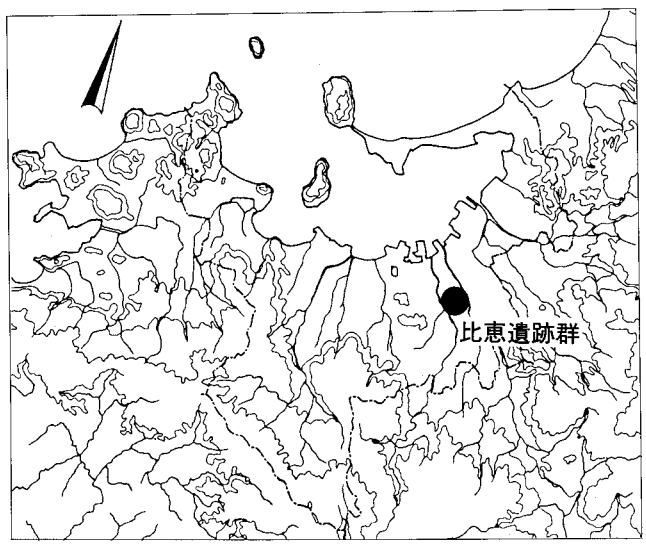
図1　比恵遺跡の位置と各次調査地点の位置（1：50000・1：7500）

NO.1328

福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集

比恵遺跡

第9・10次調査報告



	遺跡略号	遺跡調査番号
比恵9次地点	HIE9	8503
比恵10次地点	HIE10	8504

1986

福岡市教育委員会

序

本書でその一部を報告する比恵遺跡は、市内でも古い時期に調査の手が入れられた遺跡であります。また、急速な市街地化、再開発等の波の中で、埋蔵文化財保護の為のより実効的な取り組みを必要としている地域にあります。そして何よりも、あるときは「奴国」とも称された一地域の、歴史の実相を知るためには、欠かすことの出来ない遺跡でもあります。

今回報告する2地点における調査は、記録保存という、最後の手段に依るものではありましたが、それぞれ、福岡放送㈱、学習研究社㈱の埋蔵文化財に対する御理解と御協力を頂いたことで、発掘調査を実施し、その成果を本書というかたちで市民の方々に公けにすることが出来ました。ここに至るまでにお世話になりました関係者の方々に御礼申し上げます。

本書が、「国民的財産」としての文化財の活用の一端として、より多くの方々の目に触れ、利用されることを願うものです。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　言

1．本書は、民間事業に係る工事予定地内における埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は、各予定地の事業者の依託を受けて、福岡市教育委員会が実施した。

2．調査依託者

比恵第9次調査　福岡放送㈱

比恵第10次調査　学習研究社㈱

3．調査組織（比恵第9次・10次調査）

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝

埋蔵文化財第2係長　飛高憲雄

調査庶務　埋蔵文化財第1係　松延好文

調査担当　埋蔵文化財第2係　杉山富雄・吉留秀敏

調査に当っては、当該事業関係者の方々には様々御協力を頂いた。感謝申し上げます。また、現場での作業、整理に携わって頂いた方々の御協力に対しても感謝申し上げます。

4．本書は、杉山と吉留が分担執筆した。

5．本書に掲載した遺物実測図、遺構実測図の作成・トレースは、担当者のほかに山口譲治、野村俊之、太田睦、李弘鍾、松田訓祀、平川裕介、角浩之が行なった。

6．本書の編集は、吉留と協議のうえ杉山が行なった。

7．遺跡・遺構・遺物の記載その他について、市域内での標準化が計画されているが、今回報告分においては、そこまでには至らなかった。

遺跡については、前次調査までの記号**HIE**を使用し、これを注記記号とし、9次調査を**HIE 9**、10次調査を**HIE 10**と表記した。

遺構については、各次地点毎の順番号を付し、注記時には、遺構を表わす記号としてMを用いて**M遺構番号**と表記した。

遺物については、各次地点毎の順番号を付し、注記時には遺物を表わす記号としてRを用いて**R遺物番号**と表記した。

8．本書に使用する基準方位は磁北である。真北との偏差は、西偏6度40分である。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　比恵第９次調査……3

Ⅲ　比恵第10次調査……68

Ⅳ　おわりに……76

挿 図 目 次

図1　比恵遺跡の位置と各次調査地点の位置(1：50000・1：7500)…… 1
図2　比恵9・10次地点全体図(1：500) …… 2
図3　比恵9・10次地点…… 3
図4　比恵9次地点東区(1)(1：300)…… 5
図5　比恵9次地点東区(2)(1：300) …… 6
図6　比恵9次地点西区(1：200) …… 7
図7　比恵9次地点東区…… 8
図8　1号溝・17号溝…… 9
図9　1号溝・17号溝土層断面(1：40)…… 10
図10　1号溝・17号溝出土遺物(1：4)…… 11
図11　2号井戸(1：30)…… 13
図12　3号井戸(1：30)…… 13
図13　3号井戸出土遺物(1)(1：4)…… 14
図14　井戸(2号・3号)…… 14
図15　3号井戸出土遺物(2)(1：4)…… 15
図16　3号井戸出土遺物(3)(1：4)…… 16
図17　3号井戸出土遺物(4)(1：4)…… 17
図18　3号井戸…… 18
図19　4号井戸(1：40)…… 18
図20　4号井戸出土遺物(1)(1：8)…… 19
図21　4号井戸 …… 19
図22　4号井戸出土遺物(2)(1：4)…… 20
図23　4号井戸出土遺物(3)(1：4)…… 21
図24　5号井戸(1：30)…… 22
図25　5号井戸…… 22
図26　5号井戸出土遺物(1：4)…… 23
図27　6号井戸…… 23
図28　井戸 (6号・7号)(1：30)…… 24
図29　6号井戸出土遺物(1：4)…… 25
図30　井戸 (7号・8号・9号)…… 26

図31　8号井戸(1：30)……27
図32　8号井戸出土遺物(1)(1：4)……27
図33　8号井戸出土遺物(2)(1：8)……27
図34　9号井戸(1：30)……28
図35　9号井戸出土遺物(1：4)……28
図36　10号井戸(1：30)……29
図37　10号井戸(全景・遺物出土状況)……30
図38　10号井戸出土遺物(1)(1：4)……30
図39　10号井戸出土遺物(2)(1：4)……31
図40　10号井戸出土遺物(3)(1：4)……32
図41　11号井戸(1：30)……33
図42　11号井戸出土遺物(1：8)……33
図43　12号井戸(1：30)……34
図44　井戸(11号・12号)……34
図45　12号井戸出土遺物(1：4)……35
図46　13号井戸(1：30)……36
図47　13号井戸出土遺物(1)(1：8)……36
図48　13号井戸出土遺物(2)(1：4)……37
図49　井戸(13号・14号・15号・15号下部)……37
図50　14号井戸(1：30)……38
図51　14号井戸出土遺物(1：8・1：4)……39
図52　15号井戸(1：30)……40
図53　15号井戸出土遺物(1)(1：4)……41
図54　15号井戸出土遺物(2)(1：4)……42
図55　16号井戸(1：30)……43
図56　16号井戸……43
図57　16号井戸出土遺物(1：4)……44
図58　18号土坑(1：40)……45
図59　18号土坑……45
図60　19号井戸……45
図61　19号井戸出土遺物(1：4)……45
図62　井戸(19号・20号)(1：30)……46
図63　20号井戸出土遺物(1)(1：4)……46

図64　20号井戸出土遺物(2)(１：８)……46
図65　21号溝土層断面(１：60)……47
図66　21号溝・23号溝……47
図67　21号溝出土遺物(１：４)……48
図68　22号土坑……49
図69　22号土坑(１：60)……49
図70　22号土坑出土遺物(１：４)……49
図71　24号井戸(１：30)……50
図72　24号井戸出土遺物(１：４・１：８)……50
図73　25号井戸(１：30)……51
図74　25号井戸出土遺物(１：４)……51
図75　26号井戸(１：30)……52
図76　26号井戸……52
図77　26号井戸出土遺物(１：４)……53
図78　井戸(27号・28号)(１：30)……54
図79　井戸(27号・28号)……54
図80　28号井戸出土遺物(1)(１：４)……55
図81　28号井戸出土遺物(2)(１：４)……56
図82　29号井戸出土遺物(１：４)……56
図83　井戸(29号・30号・32号)(１：30)……57
図84　29号井戸……58
図85　井戸(30号・32号)……58
図86　30号井戸出土遺物(1)(１：４)……59
図87　30号井戸出土遺物(2)(１：４)……60
図88　31号井戸(１：30)……61
図89　31号井戸出土遺物(１：４)……61
図90　井戸 (30号・31号)……61
図91　33号掘立柱建物(１：80)……62
図92　33号掘立柱建物……62
図93　34号井戸出土遺物(1)(１：８)……63
図94　34号井戸(１：60)……63
図95　34号井戸……63
図96　34号井戸出土遺物(2)(１：４)……64

図97　35号井戸(１：60)……65
図98　35号井戸出土遺物(１：４)……65
図99　35号井戸……65
図100 37号竪穴住居跡(１：40)……66
図101 39号掘立柱建物(１：80)……66
図102 比恵９次地点西区……67
図103 比恵10次地点南半部・北半部……68
図104 比恵10次地点全体図(１：200)……69
図105 井戸(１号・２号)(１：30)……70
図106 １号井戸出土遺物(1)(１：４)……71
図107 １号井戸出土遺物(2)(１：４)……72
図108 １号井戸出土遺物(3)(１：４)……73
図109 １号井戸出土遺物(4)(１：８)……73
図110 ２号井戸出土遺物(1)(１：４)……74
図111 ２号井戸出土遺物(2)(１：８)……75
図112 井戸(１号・２号)……75
図113 比恵９・10地点の変遷……76

表目次

表１　比恵９次地点遺構一覧表……４

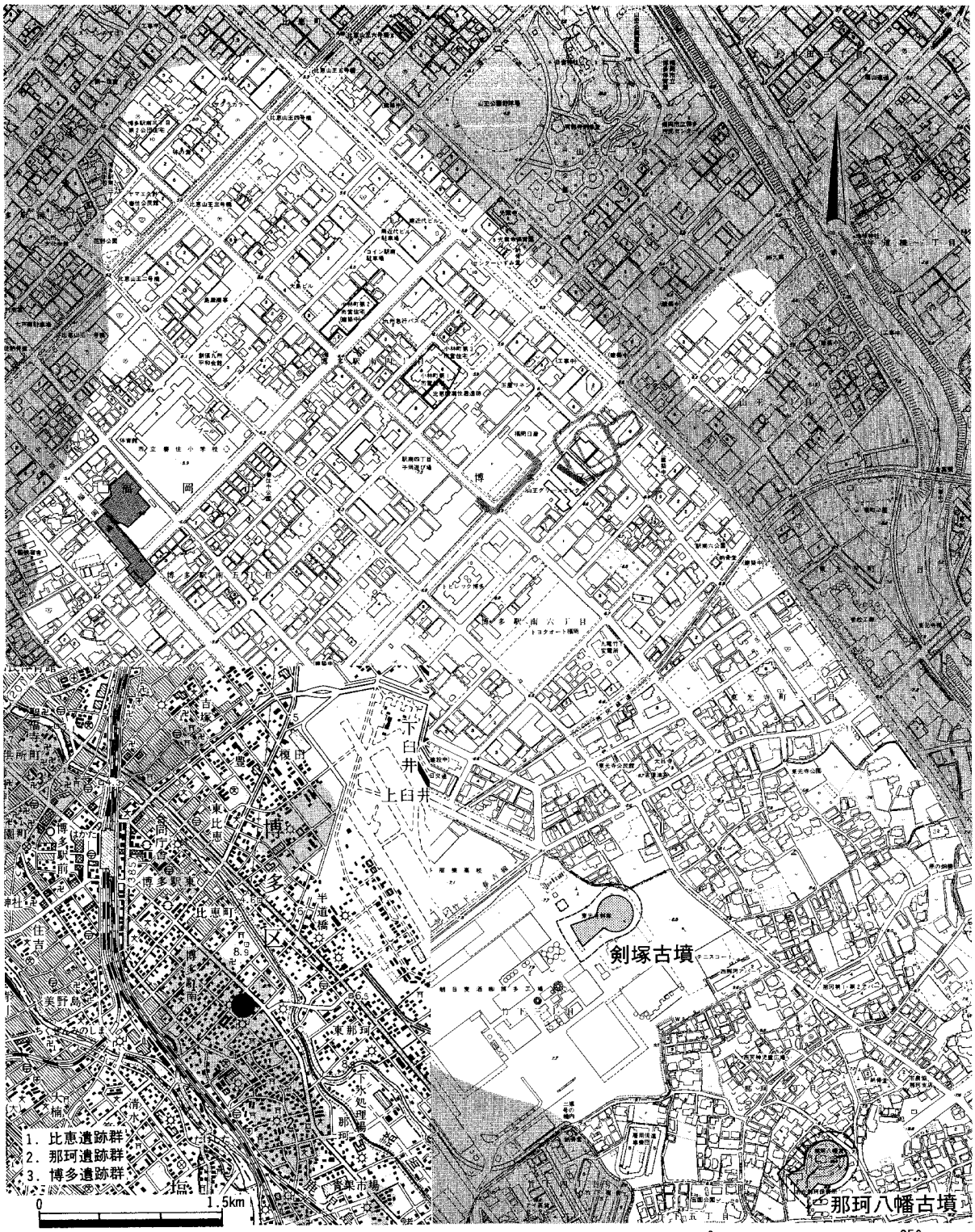


図1　比恵遺跡の位置と各次調査地点の位置（1：50000・1：7500）

Ⅰ．はじめに

比恵遺跡群（図１）

福岡平野を北流する那珂川と御笠川とに挟まれた中位段丘上に立地する遺跡である。この段丘は、阿蘇起源とされるAso-Ⅳ火砕流により形成されたものである。火砕流は、現状では鳥栖ローム と八女粘土とに分けることができる。

ただ、現在みる平坦な地形は、昭和10年代に一帯に対して行なわれた区画整理の結果である。本来は、北の博多湾に向い流れる小河川により、開折され、入り組んだ谷と台地という景観を成していたのであり、遺跡は、そのような地形上の条件下に形成されたものである。

比恵遺跡群の調査

比恵遺跡群の調査は、現在までに８次を数えている。

第１次調査　比恵遺跡群の発掘調査は、上述の、現在の景観を形造った区画整理に際して、1938年鏡山猛、森貞次郎らにより行なわれた調査を嚆矢とする。この調査によって、今回報告する地点を含めた地域に、４条の「環溝」の他弥生時代の集落、弥生時代中期から後期の甕棺墓地等が確認された。[注1]

第２次調査(1952年)　市営住宅の建設に伴う調査である。弥生時代の甕棺墓地の他に小竪穴等が調査された。環溝遺構１も調査されている。[注2]

第３次調査(1964―66年)　道路工事に際して、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての袋状竪穴、弥生時代中期の甕棺墓地が調査された。[注3]

第４次調査(1979～80年)　丘陵末端部で、弥生時代前期～中期の袋状竪穴、中期の甕棺墓等が調査された。低地部で杭列が確認されている。[注4]

第５次調査(1981)　弥生時代から古墳時代中期に亘る集落で、住居址の他、井戸等が調査された。

第６次調査(1982年)　２次調査地点と一部重複する。弥生時代から古墳時代に亘る集落、弥生時代中期の墓地を調査した。特に、井戸が地点的に集中して50基検出されている。[注5]

第７次調査(1983年)　弥生時代中期から古墳時代前期・後期に亘る集落及び弥生時代後期の墓地を調査した。

第８次調査(1984年)　第３次地点に隣接し、弥生時代前期から古墳時代前期に亘る集落、弥生時代中期の墓地の他に、古墳時代後期の大規模な建物の調査を行なった。[注6]

今回報告する第９次・10次調査は、以上に続いて1985年に実施した。

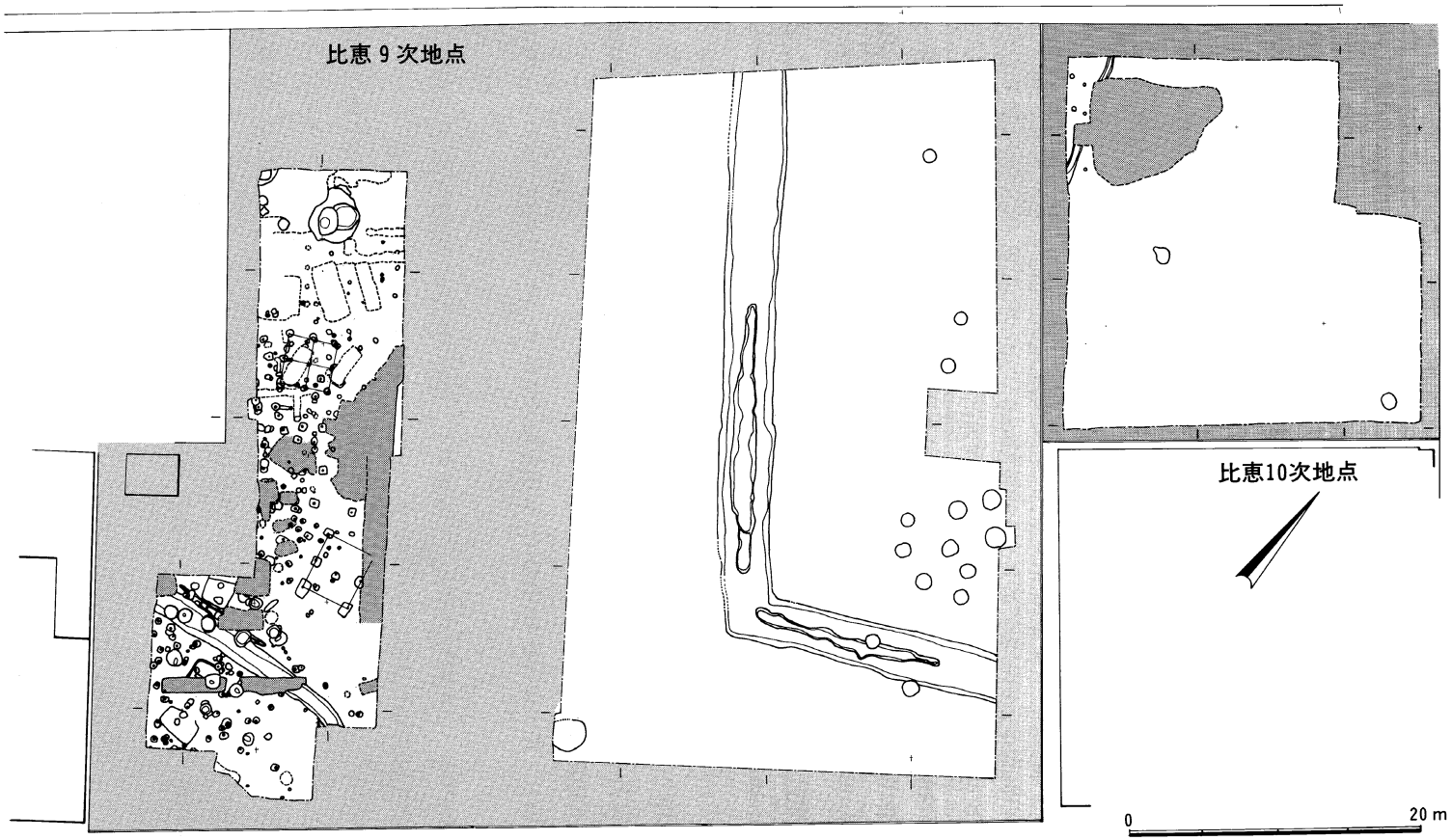


図 2　比恵 9 ・10次地点全体図（1 ：500）

II. 比恵第9次調査

比恵第9次調査

比恵第9次調査地点遺跡（以下比恵9次地点と記す）調査の要目は以下の通りである。

所在地　福岡市博多区博多駅南6丁目6番5号地内

調査面積　工事予定面積 3,322㎡のうち、結果として削平の著しい中央部及び四周部分を除く1,863㎡について調査を行なった。

調査期間　1985年7月19日着手、3ケ月を要し10月22日に終了した。

比恵9次地点の立地と周辺調査地点

比恵9次地点は、比恵遺跡群推定範囲の東南部に位置する。比恵1次調査時確認されていた「2号環溝」の一部を含む範囲である（図1）。

旧状の判る戦前の地形図による（福岡市教育委員会1985）と、比恵9次及び10次地点は、四周を水田に囲まれ、それからの比高がわずかの微高地となっており、西半調査区西端で認められた水田が、その西縁部を示すものと考えられる。比恵9次地点の東は、比高2m程の小山状の高まりとなっており、等高線からして調査地点は、極く緩やかな西向きの斜面であったものとみえる。

いま、図中にみる水田部を谷部の残存としての低地とみなすと、比恵6次地点は、低地を隔て向いの尾根上、比恵7次地点は、更に低地を越えた位置となる。いずれも弥生時代中期から後期、古墳時代にかけての集落、及び弥生時代中期あるいは後期の墓地が立地する。

図3　比恵9・10次地点（東から）

No.	種別	平面形	規模（m） 短辺	長辺	深さ	時期	備考
M1	溝		幅3.5～4.0		0.5～0.6	弥生時代 後期後葉	
2	井戸	不整円形	φ 0.8		0.4	〃	
3	〃	〃	φ 0.8		2.1	〃 中期後半	土器多量に出土
4	〃	〃	φ 1.0		2.5	〃 〃	土器多量に出土
5	〃	不整円形	φ 1.3		2.0	弥生時代 後期中葉	
6	〃	〃	φ 1.4		2.8	〃 後期後葉	
7	〃	卵形	0.9	1.0	3.0	〃	10号に先行
8	〃	円形	φ 1.0		1.3	〃 後期中葉	
9	〃	不整円形	φ 1.2		1.9	〃 後期中葉	
10	〃	不整円形	φ 1.1		2.2	〃 後期中葉	
11	〃	不整円形	φ 1.0		2.0	〃 後期	土器多量に出土
12	〃	円形	φ 0.9		2.5	〃 後期前葉	
13	〃	不整円形	φ 1.1		1.7	〃 後期中葉	
14	〃	不整円形	φ 1.2		3.0	〃 後期中葉	
15	〃	略円形	2.6	2.9	1.8	古墳時代 前葉	土器多量に出土
16	〃	円形	φ 1.0		1.4	弥生時代 後期中葉	
17	溝		幅1.6～2.5		0.6～0.8	古墳時代 初頭	
18	土壙	隅丸長方形	1.6	2.6	0.2	弥生時代 中期	
19	井戸	略円形	1.0	1.1	2.7	〃 後期後葉	
20	〃	円形	φ 0.8		2.5	〃 後期中葉	
21	溝		幅1.3～2.0		0.5～0.8	古墳時代 後葉	
22	土壙	隅丸長方形	2.0	2.5＋α	0.3	弥生時代 中期後葉	
23	溝		幅0.3		0.3	古墳時代 後葉	
24	井戸	円形	φ 1.0		1.6	弥生時代 後期後葉	
25	〃	〃	φ 1.0		1.4	〃 〃	
26	〃	楕円形	0.9	1.2	2.9	〃 後期前葉	
27	〃	不整円形	φ 0.8		1.5	—	
28	〃	不整楕円形	0.7	0.9	1.6	〃 中期後葉	土器多量に出土
29	〃	隅丸方形	一辺0.9		2.5	〃 後期後葉	
30	〃	楕円形	1.0	1.1	2.9	〃 後期前葉	土器多量に出土
31	〃	卵形	0.9	1.0	0.8	古墳時代 前葉	
32	〃	〃	0.8	0.9	1.3～1.4	弥生時代 後期後葉	
33	掘立柱建物	長方形	3.5	4.1	—	〃 後期後葉	
34	井戸	不整円形 楕円形	φ 1.9 1.4	 2.0	1.6 2.6	古墳時代 後葉	土器多量に出土
35	〃	不明	—	—		〃	
36	—						
37	縦穴式住居	隅丸方形	1.2＋α	1.5＋α	0.1		
38	—						
39	掘立柱建物	正方形	一辺3.4		—	古墳時代 後葉	

表1 比恵9次地点遺構一覧表

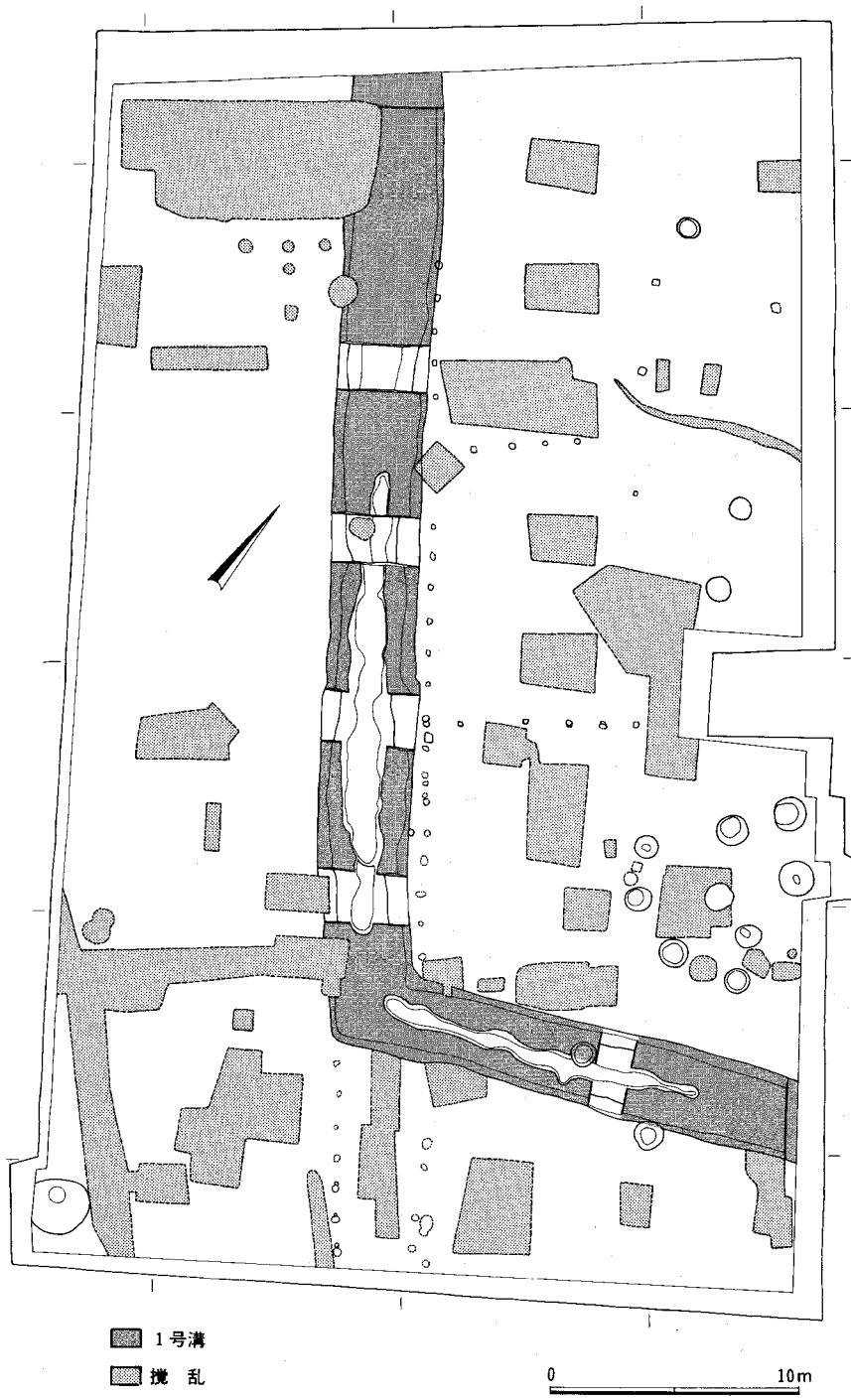


図4　比恵9次地点東区(1)(1：300)

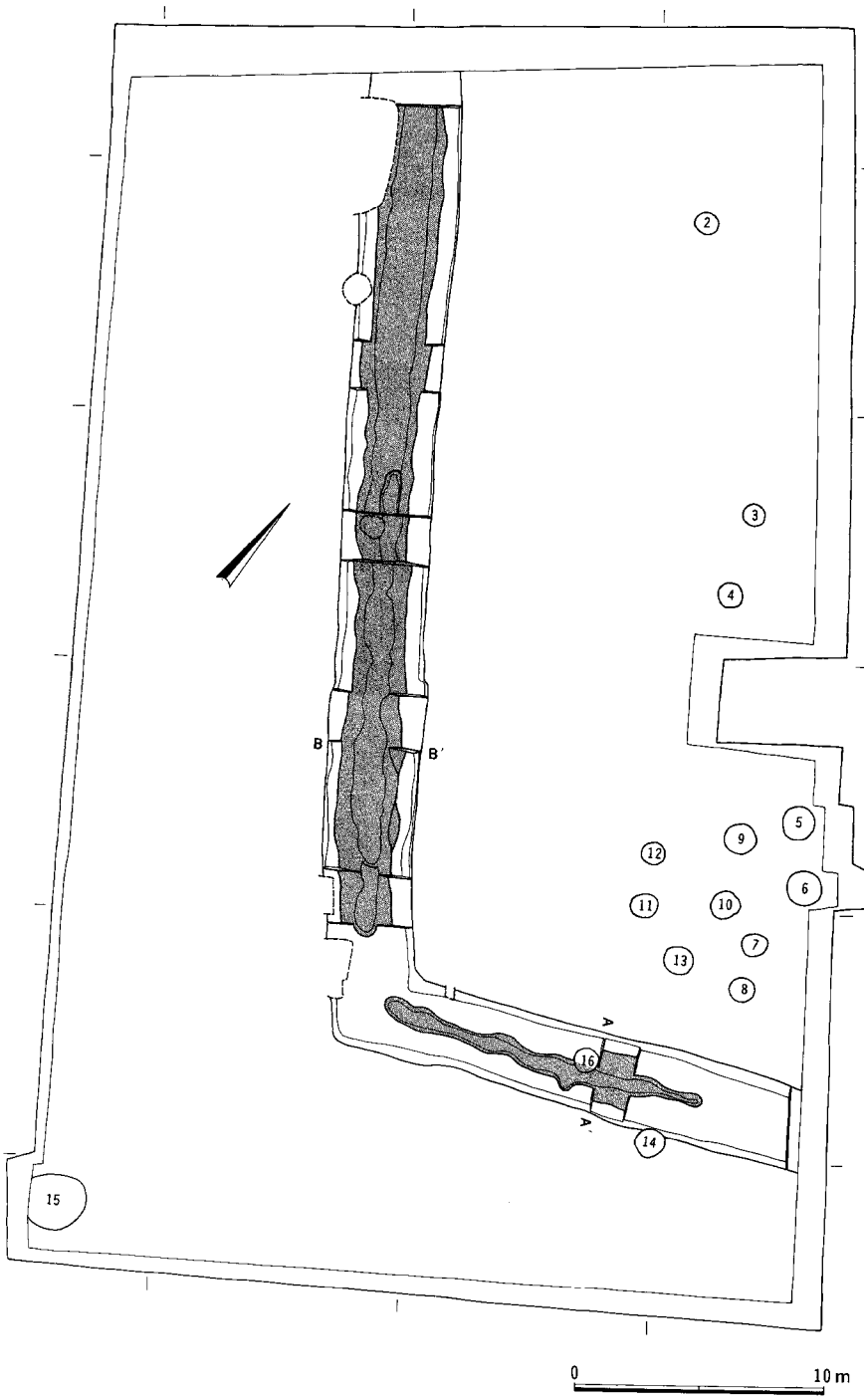


図5　比恵9次地点東区(2)(1：300)

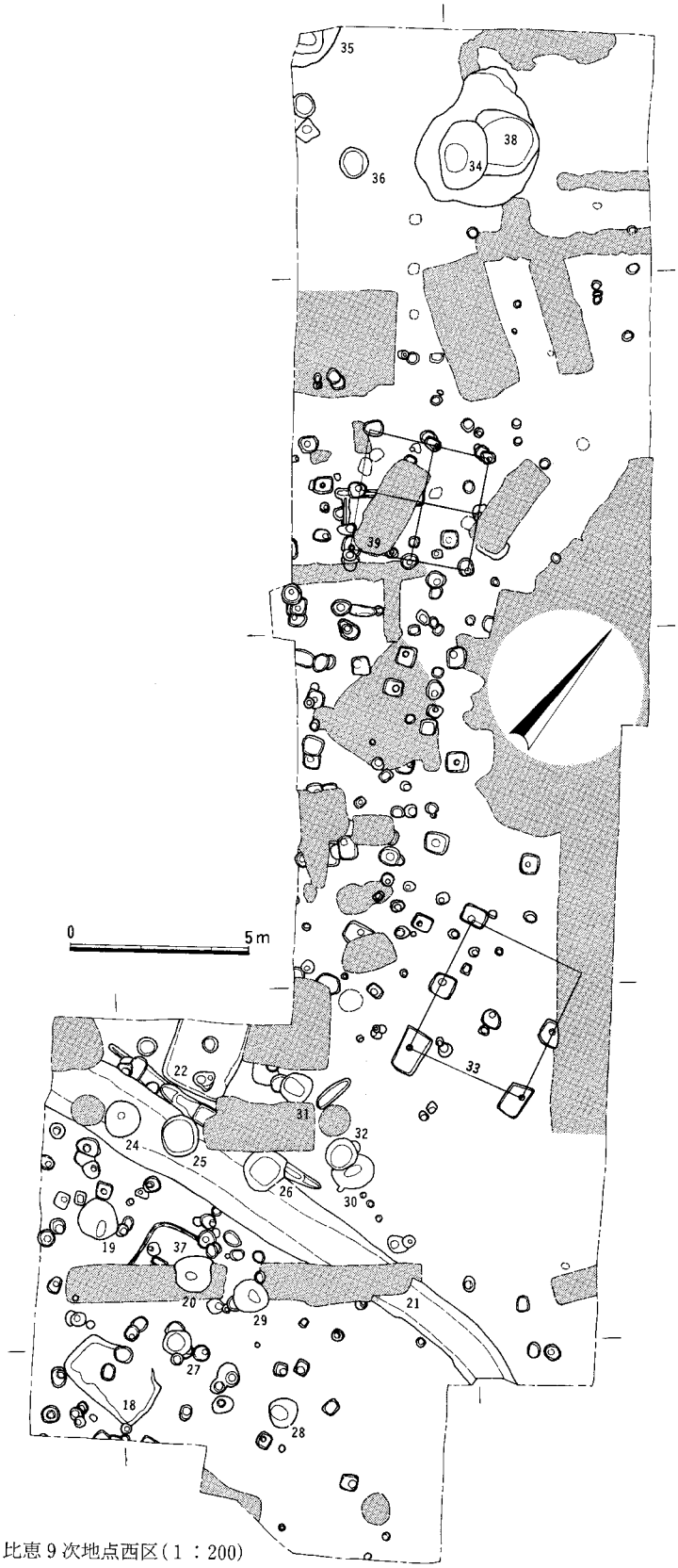
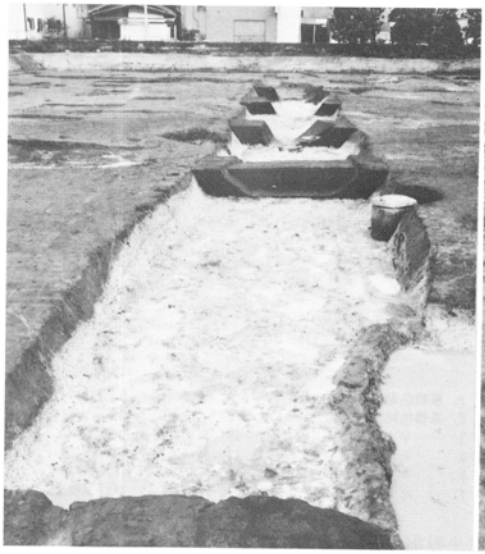


図 6　比恵 9 次地点西区（1 ：200）

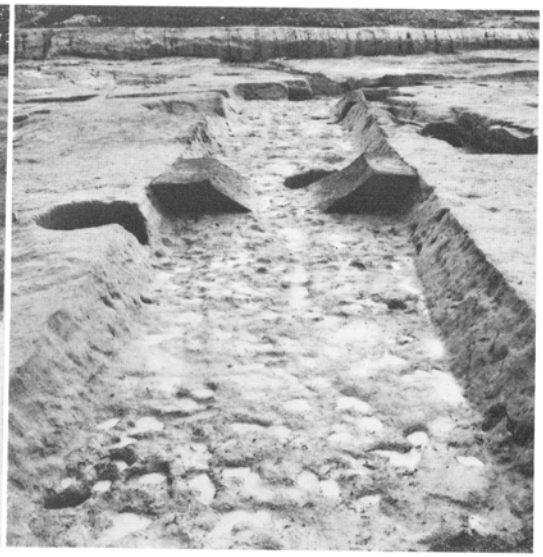
（南から）

図7　比恵9次地点東区　（西から）

17号溝（西辺部、南から）



1号溝（西辺部、南から）



1号溝（南辺部、車から）

図8　1号溝・17号溝

比恵9次地点の調査経過　調査は、東半区から着手し、それの終了後西半区を行なった。

東半区は、1.5m程の地下げが行なわれているともいわれ、深い遺構のみが遺存している状態であった。西半区も西側になると、谷寄りの斜面となるのか、小穴あるいは住居址といった遺構も遺存している。

検出遺構は、「環溝」の他に古墳時代の溝1、弥生時代から古墳時代・奈良時代にかけての井戸27基、竪穴住居址1、掘立柱建物2などである（表1）。

以下の項において、各々の遺構について遺構番号順に報告する。

1号溝・17号溝（図8・9）

第1次調査時第2号環溝とされた環溝の西辺部及び南辺部を検出した。1次調査時の所見に従えば、1辺の長さが70m程で、上縁の幅6m、狭い所で4.5及至5m程のところもある。深さは2mに達するものであったが、区割整理時の地下げの結果、現状の幅4m及至3.5m、深さ0.5及至0.6mの部分のみが遺存している。

今回当初、1号溝として調査を始めたが、底面が2段となっているのに気づき再検討を行なったところ、1号溝の覆土に掘り込まれ、部分的に1号溝の底面より深くなる溝のあることが判り、これを17号溝とした（図5）。1号溝と17号溝の関係を断面図で示すと図9のようになる。底面隅の明瞭な、逆台形状の断面形を呈す1号溝の埋没後、略中央部にそれよりも深い、U字形の断面形を呈す17号溝が掘削される。ともに、覆土は黒褐色の粘土であるが、混り込んだロームブロック等の切られる部分があることで、それとわかる。17号溝の幅は、1号溝よりせまい。又、平面形状はかなり不整なものとなり、確認面での幅1.6mあるいは2.5mという値となる。

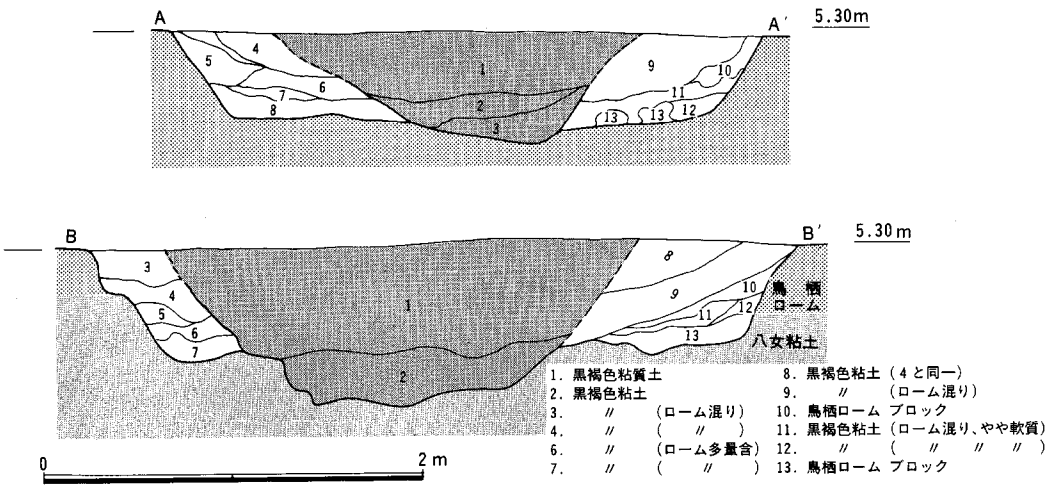


図9　1号溝・17号溝土層断面（1：40）

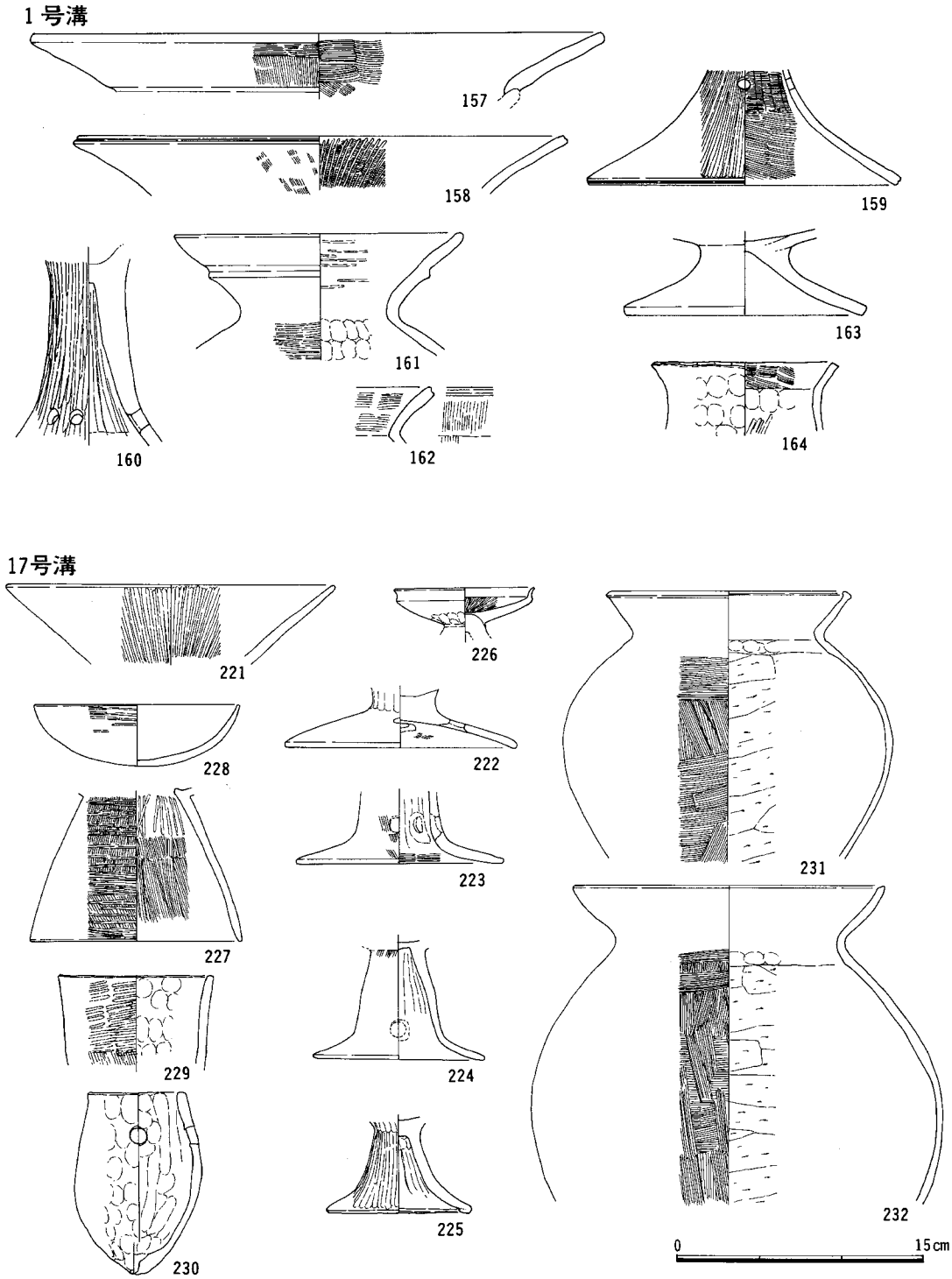


図10　1号溝・17号溝出土遺物（1：4）

第1次調査の所見にいう2段になった溝というのは、以上のような関係を反映したものなのかも知れない。

1号溝の平面形については、直線的で、隅部も角を成し曲がっている。但し、その角度は鈍角に開いている。溝全体の方向は、第1次調査の所見から復元されるものと、異なる(図1)。

1号溝西辺部の東縁と沿うようにして、小穴が並ぶが、覆土が異なること、周辺に井戸より浅い遺構が残らないこと等から考えて、あるいは地下げ後のものと考えるが、その性格は不明である。1号溝を超え、溝の幅で2条、南へ延びることから、1号溝を起源とする地形上の何らかの変換点が、かなり新しい時期まで残っていたことも考えられよう。

1号溝出土遺物（図10）

1号溝では、覆土中から遺物が散慢に出土した。総量は、26ℓ入りのコンテナにして、20箱程である。その殆どは弥生土器破片である。他は少数の石製品である。青銅製鋤先破片も含まれる。弥生土器は、中期のそれと後期のそれとが相半ばしている。1号溝埋没の上限を示す資料を掲げる。

高坏(157～160)は各部の破片がある。坏部は接合部内外面に段を残し、大きく外方に広がる。裾部はなだらかな曲線で外方に広がる。

壺(161)は、口縁外面が段を成し、二重口縁となる。

台付の碗かと思われる資料(163)がある。脚部のみ遺存する。

162・164は甕破片である。

17号溝出土遺物（図10）

総量はコンテナ2箱程の出土である。遺物は覆土中から散慢に出土した。埋没時期の上限を知る資料としては、以下のものがある。

壺(221)は、大きく開く口縁部の破片である。

高坏(222・223・224・225)は、いずれも脚部破片で、裾部で屈曲して外方に開く。

甕(231・232)は、大きく外屈、内湾気味に立ち上る口縁をもっている。外面刷毛目調整、内面篦削調整によっている。

小形器台(226)、全形は判らないが脚部のみの資料(227)、小形深鉢形の土器(229)、蛸壺(230)がある。

以上の遺物により、1号溝については、弥生時代後期後葉を、17号溝については、古墳時代初頭を埋没の上限とできる。

2号井戸（図11）

東区、他の井戸と北に離れた位置にある。平面形不整な円形状で径0.8mを測る。断面形逆台形状を呈し、深さ0.4mを測る。井戸とするには他と比べ浅く、湧水の痕跡はない。底面は、八女粘土面まで達している(標高5.5m)。遺物は、弥生土器小破片が覆土中から散慢に少量出土した。覆土は黒褐色粘土である。

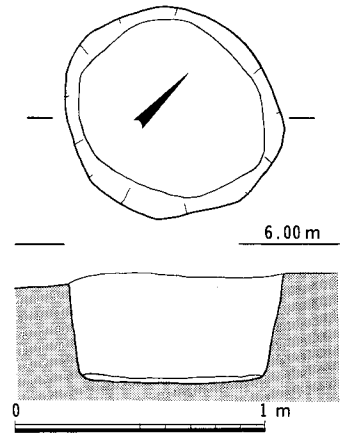
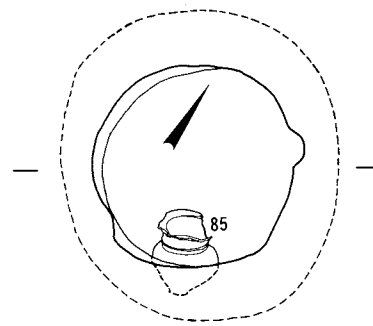


図11　2号井戸(1：30)

3号井戸（図12）

1号溝の内側、東区の井戸の一群をA群、西区のそれをB群とすると、A群の最北端やや離れた位置にある。平面形が不整な円形状を呈する井戸である。その径0.8m。深さは、底面の確認が湧水とそれに伴う崩落により難しかったが、2.1mを測る。検出面下0.4m程から八女粘土部の流出、鳥栖ローム部の崩落により大きく抉れ、最大径2.2mを測る。抉れ部は鳥栖ロームと八女粘土との境界部から始まり、鉢状を呈している。鳥栖ロームと八女粘土の境界は、標高5mを前後する。



覆土は、確認面では、ローム粒を含んだ粘土混り黒褐色土であるが、下位になるに従い鳥栖ローム・八女粘土のブロックの層を挟んだ黒色粘土の層となり、最下部は崩落した八女粘土で埋まっている。

遺物は、コンテナにして10箇程である抉れの上端の高さの面で、弥生土器片が敷き詰められたような状態で出土した他に、それより下位、抉れの最大となるあたりで広口壺、無頸壺が完形で出土している。

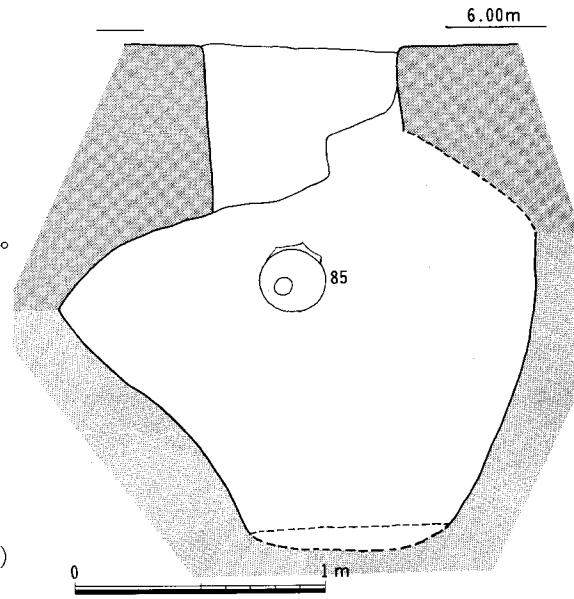


図12　3号井戸(1：30)

3号井戸出土遺物（図13・15・16・17）

図13・15に壺を示す。広口の壺（85・

143・165・166・167）には、鋤先状の口縁となるものと、外向外反して、口縁端面を成すものとがある。短頸壺(144・168・84・109)には、比較上、大小2者あるようにみえる。いずれも、口縁に2孔1対の穿孔がされている。無頸の壺(90)は、口縁近く単孔1対の焼成前の穿孔がなされる。穿孔部には紐ずれ等の痕跡は、みられない。表面に赤色顔料が塗布される。それの一部が、土器にかけられていたと思われる紐状のものと擦れあったものか、剝落している。その痕跡からすると、もとは口縁と底部に回された紐の間をジグザグに渡された、いわば籠状のもので包まれていたことが知られる。瓢形土器（図15－170）は、上半部の資料である。

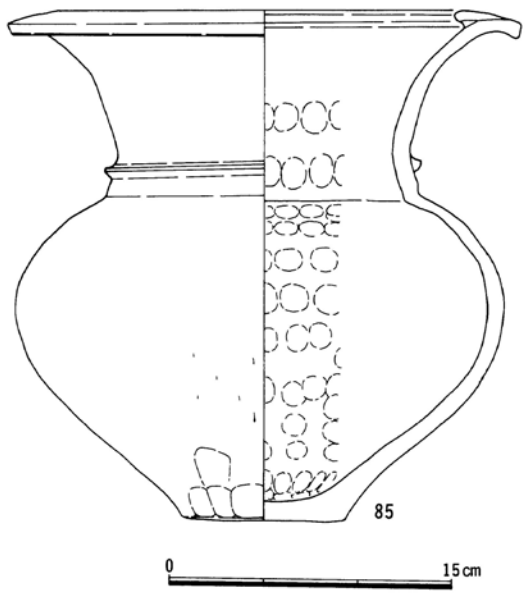


図13　3号井戸出土遺物(1)(1：4)

蓋（図16－171）は、無頸壺のうち大形の方と対応する規模である。

高坏（図16－172・173・145）は、鋤先状の口縁と、細く長い脚部とを有している。

鉢（図16）には、素縁り1の（140）と2字状に外屈する口縁を有すもの（174）がある。

器台（図16－175）は、全体に指押さえ痕が残される。中央部の器壁が厚くかつ、少し､縊れている。

甕を図16・17に示す。口縁の形状の2者がある。一方は口縁が逆L字形に屈曲し、ために口縁上端面を形づくるもの、他方は、やや屈曲の程度が弱く、短く外向外反するものである。

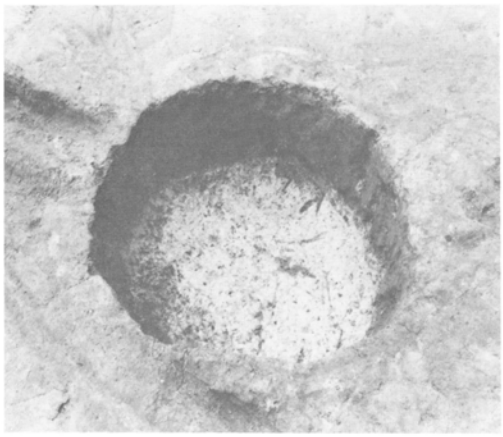
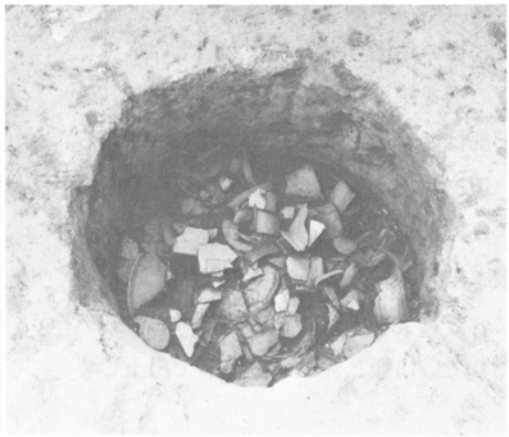


図14　井戸　2号井戸(南から)


3号井戸(南から)

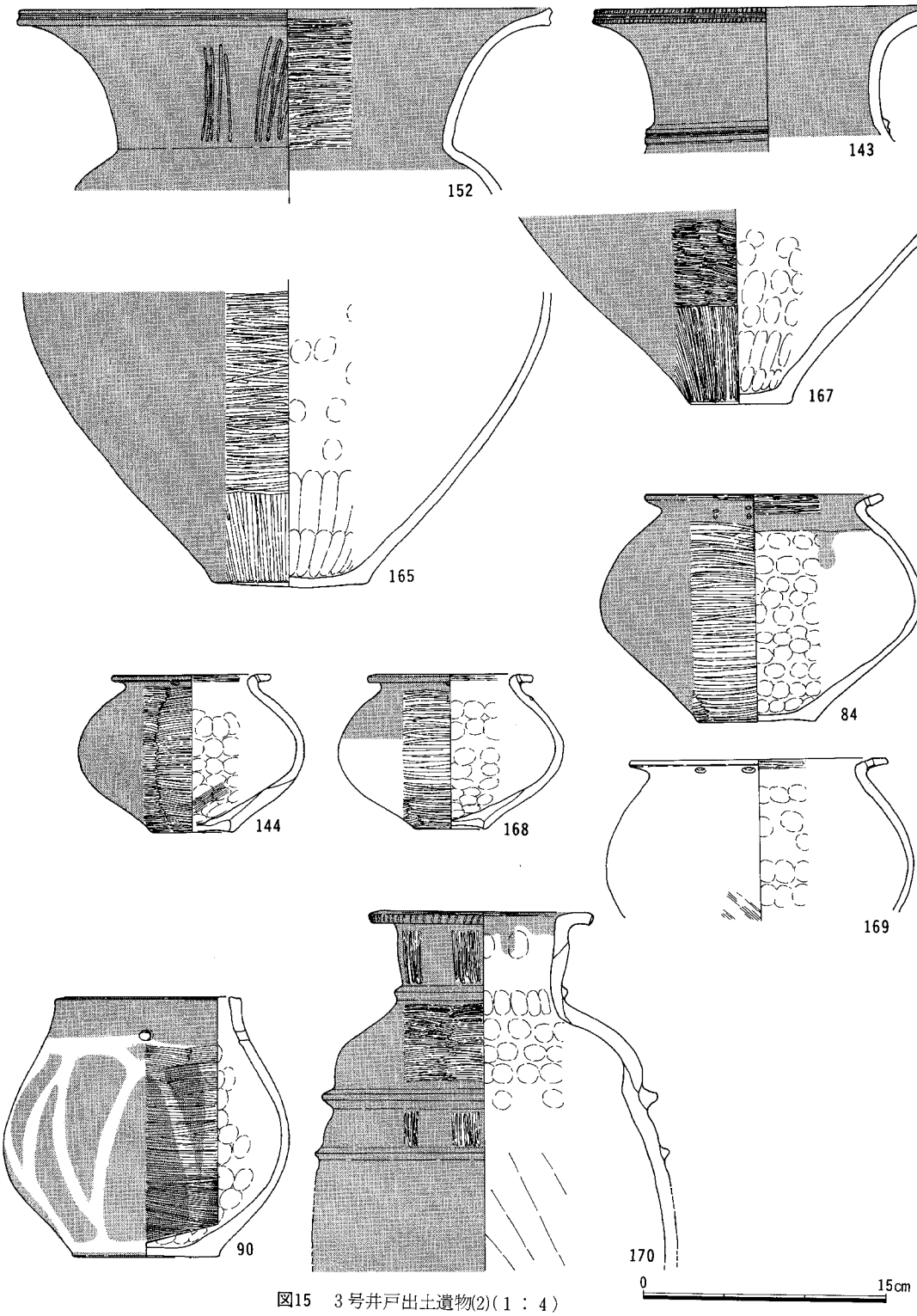


図15　3号井戸出土遺物(2)(1：4)

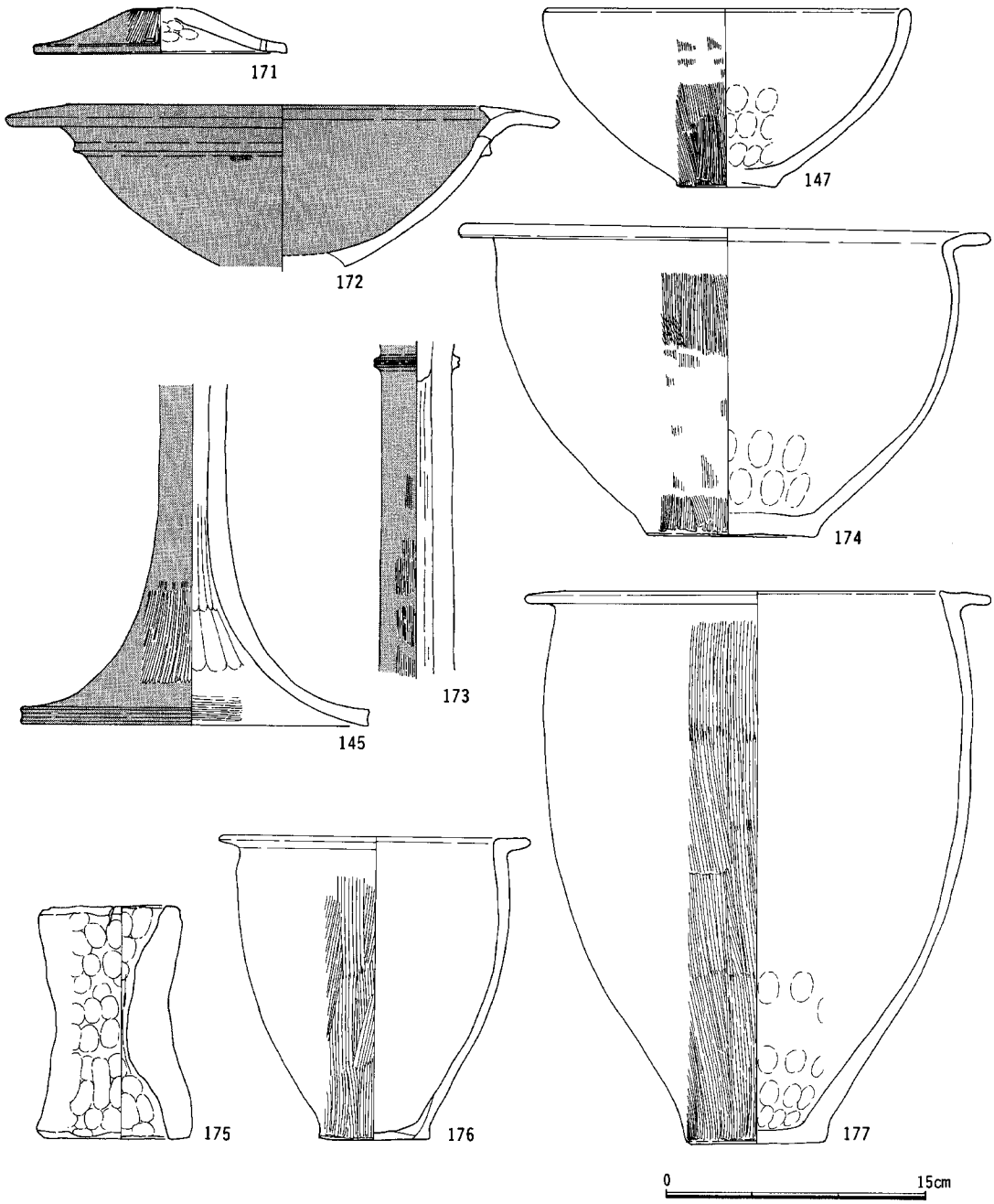


図16　3号井戸出土遺物(3)(1 : 4)

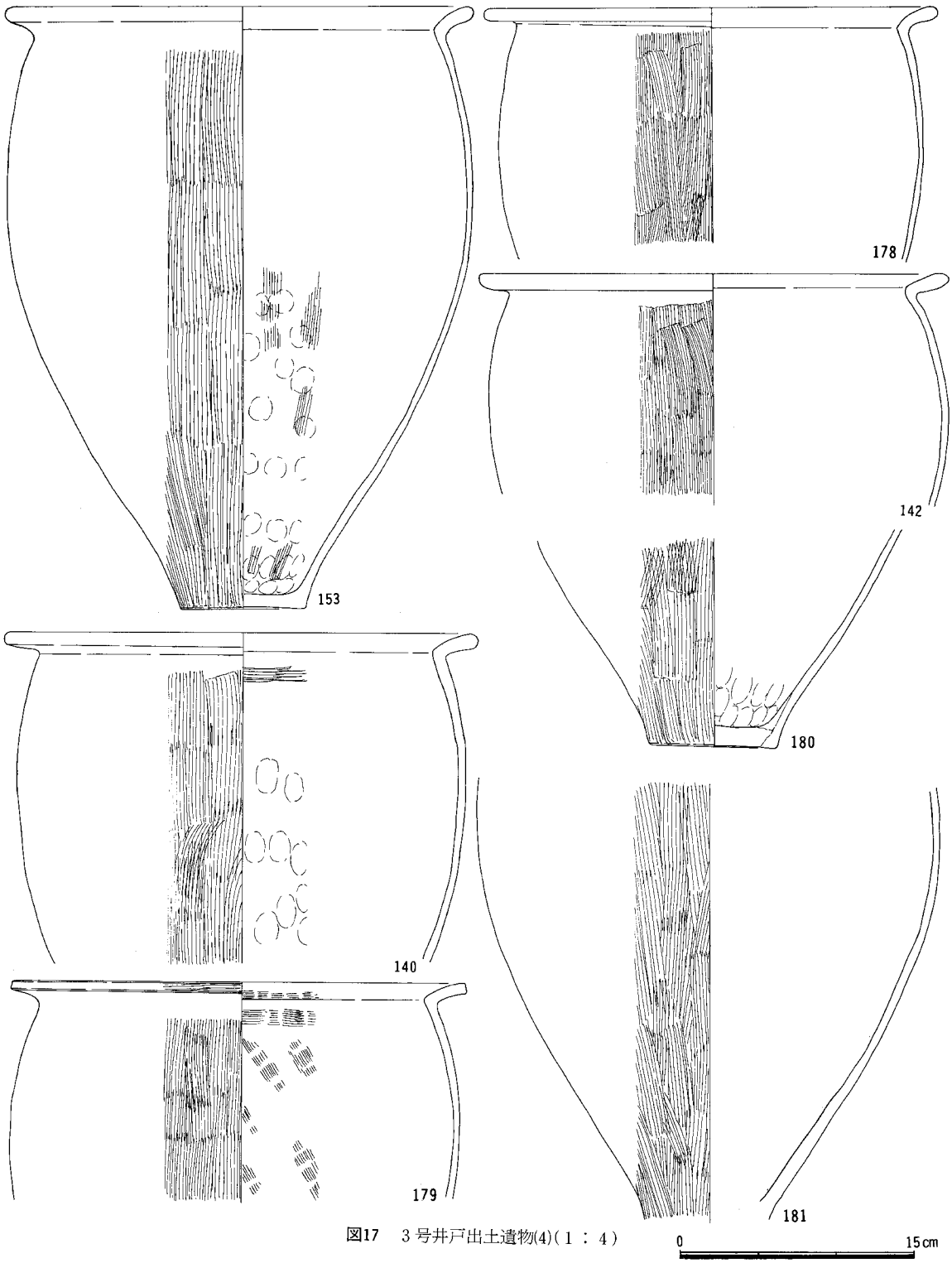


図17　3号井戸出土遺物(4)(1：4)

前者には、比較上大小の2者がある。後者には、口縁端部が丸く収まるものと外向きに端面を成すものとがある。大きさからいえば、前者のうちの大の方に相当する。底部は、壺あるいは鉢と同様、平底かわずかの上げ底となる。

以上のうち、84・85・90は、完形のまま投棄されたような状態で、他より低い位置から出土している。

3号井戸の土器群は、大きく広がる口縁をもった広口の壺などから、弥生時代中期後半を考えることができよう。

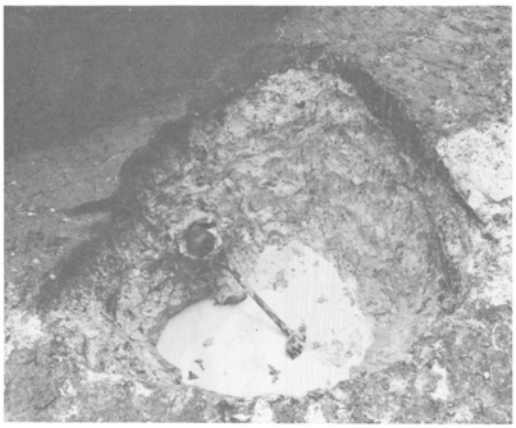


図18　3号井戸(下部，南から)

4号井戸（図19・21）

3号井戸の南に隣接し、他の一群とは、やや離れた位置にある。

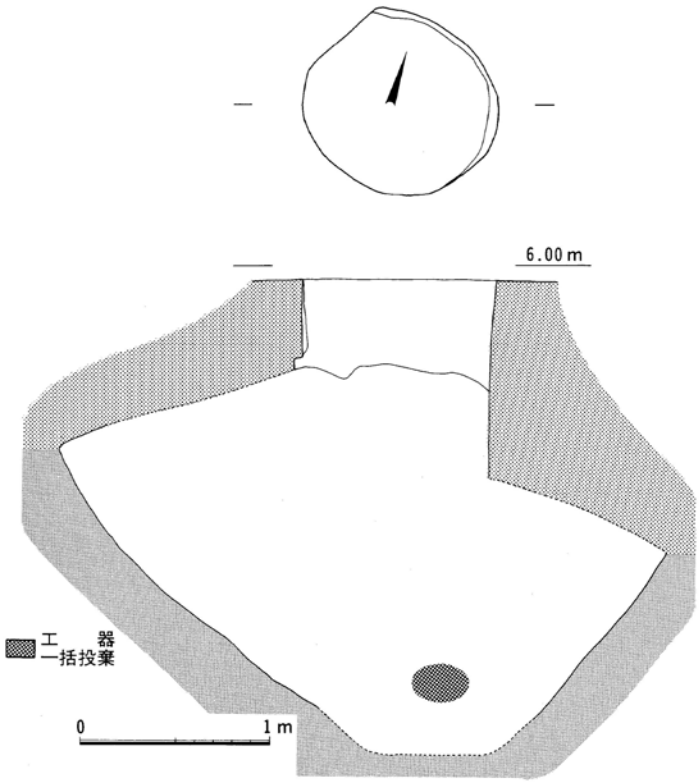


図19　4号井戸(1：40)

平面形は不整な円形状を呈し、径1.0mを測る。検出面下0.4～1.0mのところから大きく抉れ、その平面形は不整な楕円形状を呈し、長径 3.6mを測る。抉れの最大の部分は、鳥栖ロームと八女粘土の境界部であり、それは標高4.5～5.0m程の位置にある。安全上の理由で、機力による掘り下げを行なったため、底部は、推定する他はないが、確認面下2.5m、標高3.5mの位置にあったものと思われる。

覆土は、検出面では黒褐色粘土だが検出面下 0.4mで八女粘土のブロックの層が現われ、そこから土器片

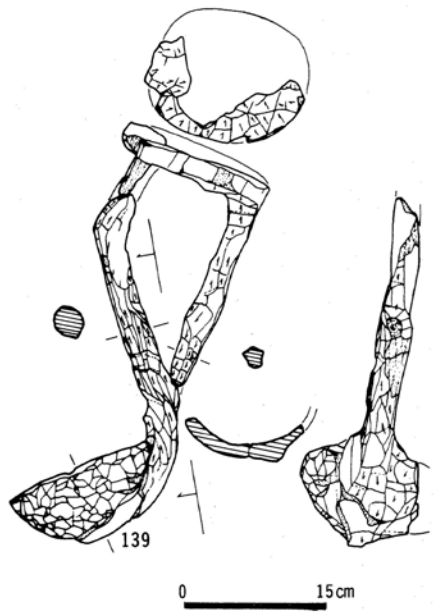


図20　4号井戸出土遺物(1)(1：8)

を主とする遺物が多量に出土した。その示す状況は3号井戸とよく似ている。以下、覆土は黒色粘土となり、下部付近では崩落した八女粘土で埋まっている。底面より 0.5m上の位置で丹塗り土器が一括投棄されているのを確認した(86・89)。

4号井戸出土遺物（図20・22・23）

86・89以外の遺物は、上部の集中投棄部の他、覆土中から散慢に出土した。コンテナで2箱程である。木器1点を中位の黒色粘土中から検出した。

壺には、丹塗りのもの（182・183・146・185・88・87))とそうでないもの（87・186・86・188）とがある。両者間の大まかな差として、全体に篦磨きが行なわれ、頸部と胴部がなめらかにつながり、胴部最大径位置が中位にある前者と、頸部と胴部の境界が屈曲部となり、胴部最大径位置が上位にある後者ということができよう。いずれにも、鋤先状の口縁をもつものが含まれている。

187は、直口壺である。口縁は、端面を成す。やや下がった位置に、単孔一対の焼成前穿孔が行なわれている。

小形手捏ねの土器は、壺形のもの（189）と鉢形のもの（190）とがある。前者は外面丹塗りで、頸部には縦方向の暗文も施される。口縁は内向内湾する。胎土は通常の丹塗り土器と同様精良な粘土を使用している。後者の器壁は厚く、胎土は砂粒を含んでいる。

甕(89・191・193・151) 193の他は、形状は甕であるが、精良な胎土をもち、外面丹塗り磨研される土器である。口縁はいずれも、強く外屈し、水平あるいはわずかに内外に傾斜する平面あるいは曲面となる。

図21　4号井戸　（上部、南から）　（下部、西から）

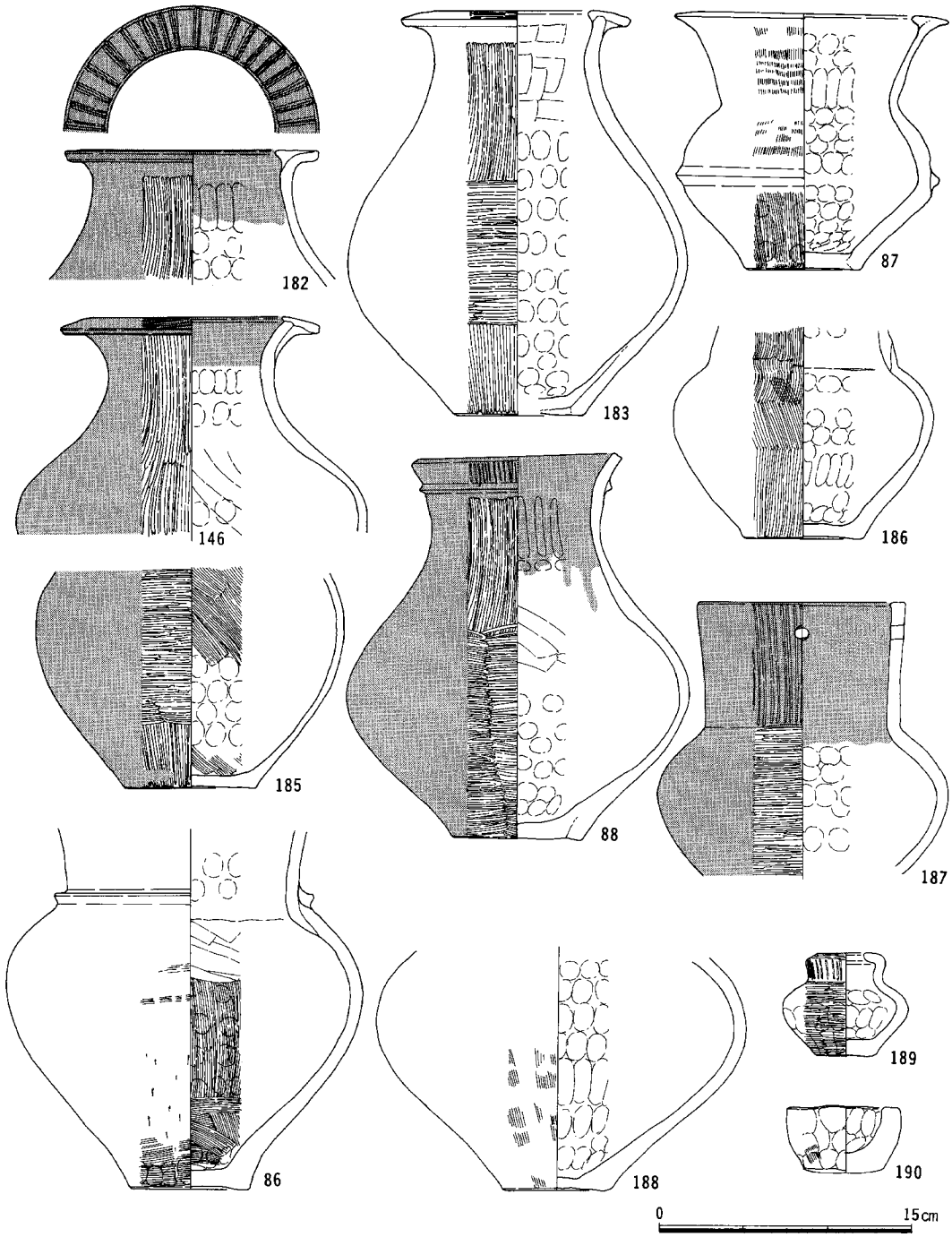


図22　4号井戸出土遺物(2)(1：4)

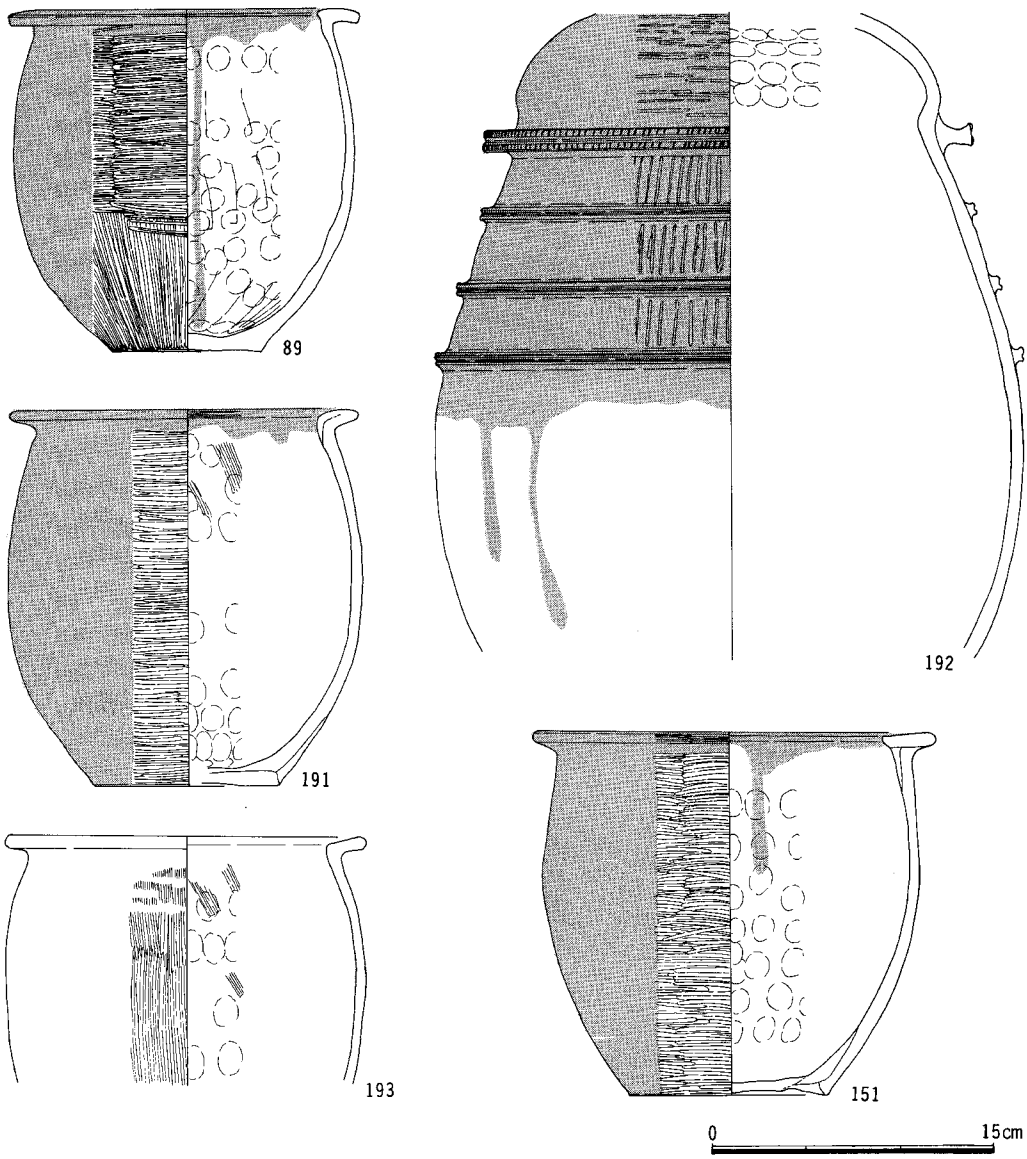


図23　4号井戸出土遺物(3)(1：4)

瓢形土器(192)口縁部、口底部を欠く資料である。4条の凸帯が付されるが、最下位の突帯の直下までの上半部に丹塗りが行なわれている。

以上の資料には、丹塗り土器が顕著で、甕の構成、壺の形状について、同様中期後半と考えられる3号井戸とは相違する。

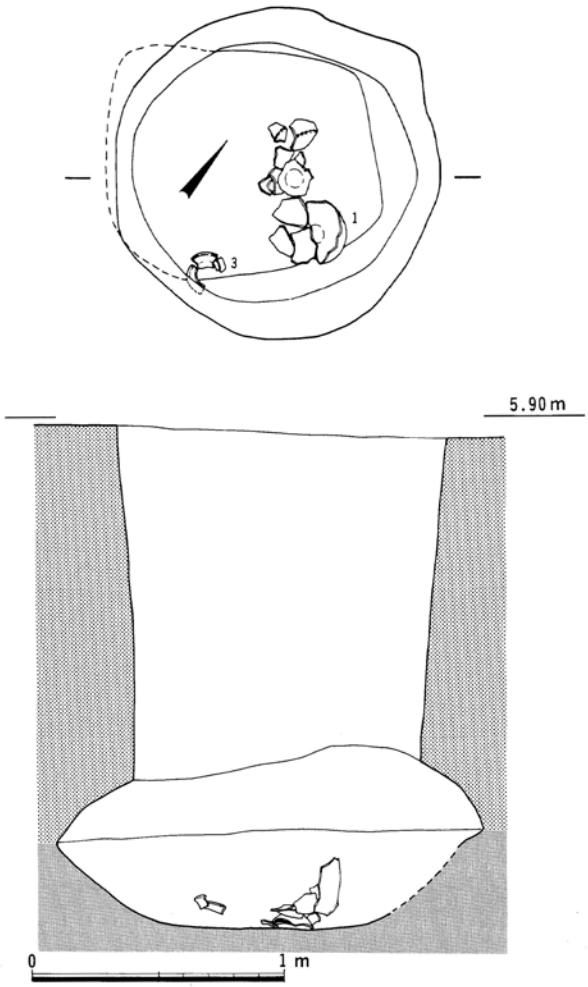


図24　5号井戸(1：30)

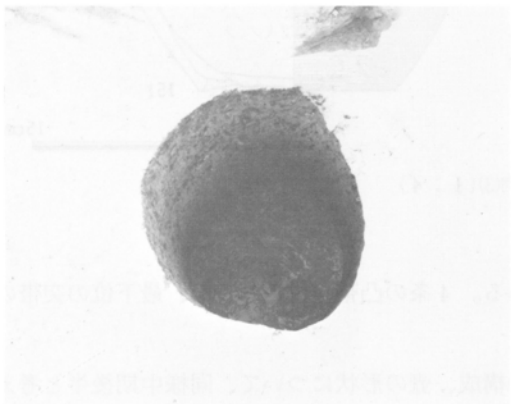


図25　5号井戸(南から)

5号井戸（図24・25）

東区A群の井戸のうち1号溝内側にあり、井戸の密集する部分の北辺に位置する。

平面形は不整な円形状を呈し、径1.3mを測る。深くなるに従いやや狭くなる。確認面下1.3m、標高4.5m程の位置から径 1.7mの範囲が抉れている。その最大径部分は鳥栖ロームと八女粘土の境界部で、標高 4.2mを前後する。

遺構上部では、覆土は鳥栖ロームのブロックを暗褐色粘土が埋め、間に八女粘土ブロックの層がみられる。これらは人為的な埋立てを示すものであろう。層全体は南方向に傾き、埋め立てが北から行なわれたことが考えられる。遺構中位以下は覆土は水分を含み軟かい黒褐色粘土になる。

遺物は、ごく少量の土器が覆土中から出土した他に、図に示すように底部で投棄されたかのような状態で甕及び壺が検出された。

5号井戸出土遺物（図26）

図示する 141・2は、ともに壺である。口縁部は鋭く内屈し、やや内湾気味に立ち上がる。底部は縁部がやや丸味をもち若干不安定な平底である。最大径位置は、胴部中央にある。2も底部の縁部がやや丸味をもった平底となっている。

弥生時代後期中葉が考えられよう。

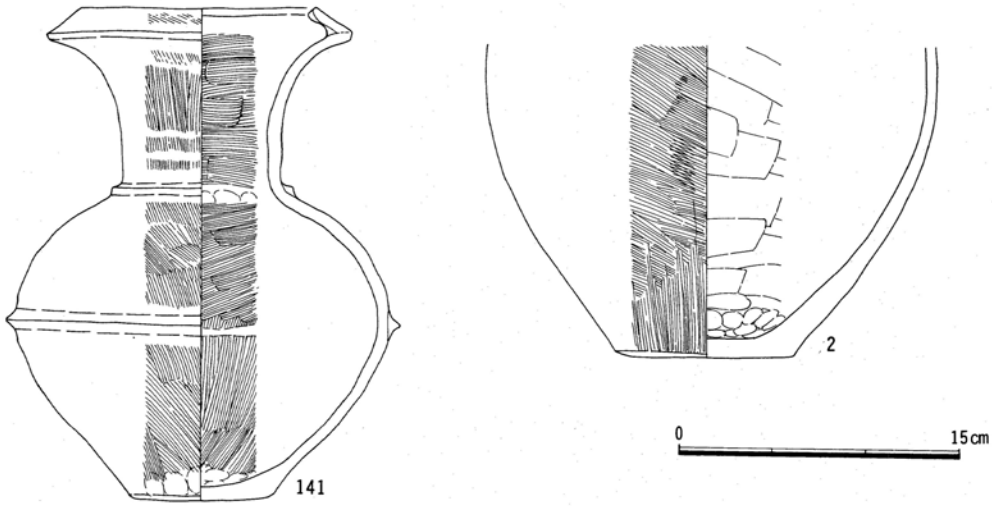


図26　5号井戸出土遺物(1：4)

6号井戸(図27・28)

東区A群の井戸で5号井戸の南に位置する。

平面形は不整な円形状を呈し、その径は、比恵9次地点中最大の 1.4mを測る。断面形は底に近づくに従い次第にすぼまり、底面は台形状を呈する。底面の平面形は楕円形状を呈する。

検出面下1.7m、標高4.2m付近から抉れているが、その程度は小さい。抉れの最大の部分は、やはり、鳥栖ロームと八女粘土の境界部で、その標高 4.0mを測る。

図27　6号井戸(西から)

覆土は、3号井戸によく似ており、上部では暗黄褐色粘土が、鳥栖ローム・八女粘土のブロックを埋めている。以下検出面下 1.1mで黒色粘土になる。抉れ部の部分で、投棄されたかのような状況で、土器及び木器が出土した。それ以下は、周囲から崩落した八女粘土で埋まる。

6号井戸出土遺物(図29)

遺物総量は土器がコンテナにして⅓箱程、加えて木器出土した。木製品は図示するものの他に板状に加工したものを検出している。

壺は、胴部と頸部の境界が明確に屈曲するもの(27・25)と、胴部から頸部へなだらかな曲線

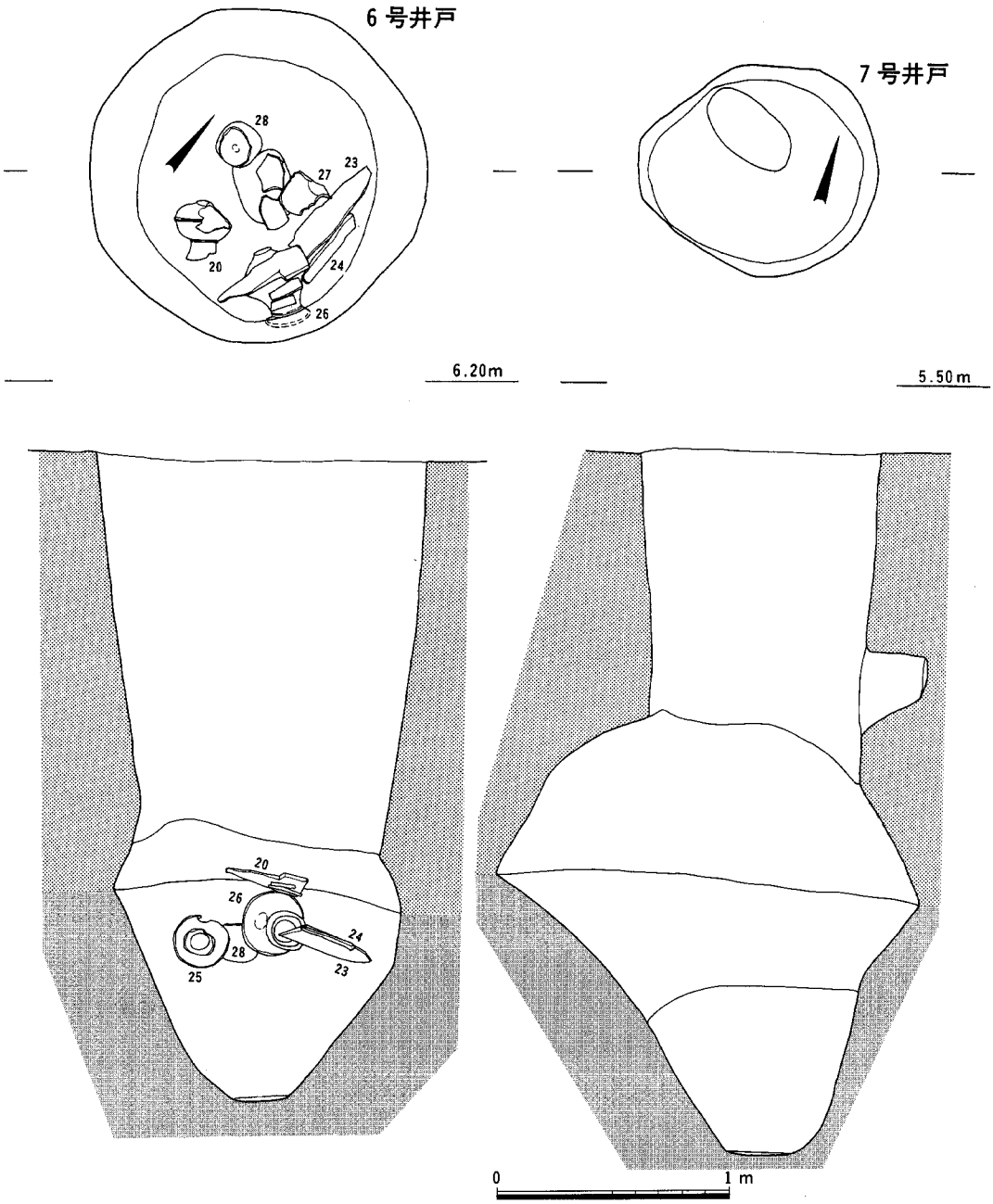


図28　井戸(1：30)

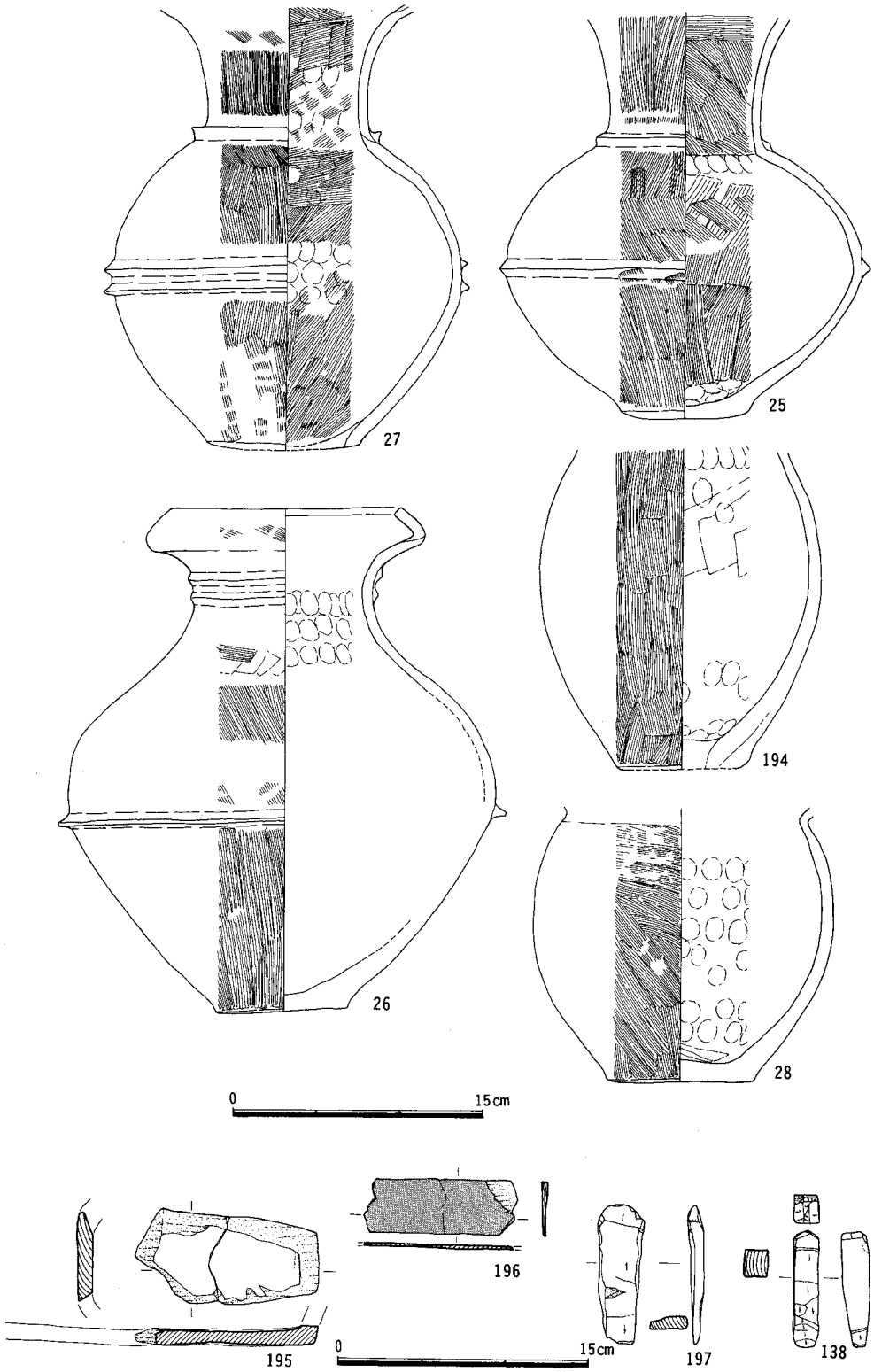


図29　6号井戸出土遺物(1：4)

でつながるもの（194・26）とがある。前者はその屈曲部及び胴部中央部に断面三角形の凸帯をもつ。頸は比較上長くのびて朝顔形に開く。口縁の形状は、欠損の為不明である。底部の縁部は丸味を帯びかつ底面全体もやや丸味をもっている。後者は、短い胴部の26と長い胴部の 194とに分けられる。26は短い頸部が大きく開いたのち内湾する低い口縁部がつく。内外面とも稜はない。平底である。 194は頸部の半ば以上を欠くが、全体の形状から、10号井戸７と同類と伺われる。底部縁辺部は丸味をもち、底面は平底である。以上の組合せは弥生時代後期前葉を示すものであろうか。

甕とする28も口縁部の一部を欠いている。短い胴部に、屈曲外反する口縁部がつく。径の大きい平底となっている。

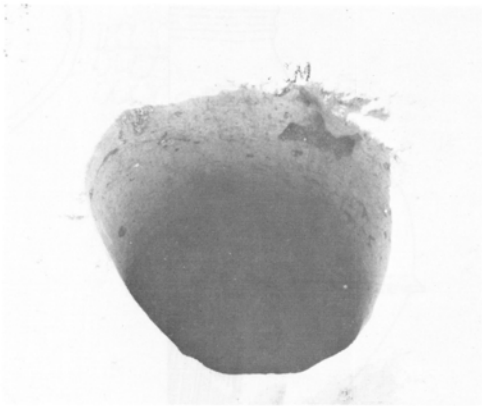
木器は４点を示すことができる（図29)。195は、刳り貫きによる容器状のもので、あるいは舟状のものかとも思われる。 196は、現状板状を呈するが一面に漆と思われる黒色の物質が付着している。197・138は、楔状を呈する木器である。

７号井戸（図28・30）

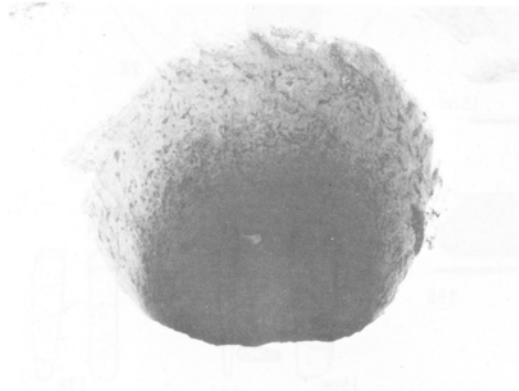
東区井戸Ａ群中の１基である。

平面形卵形状で、その長さ1.0m、幅0.9mを測る。確認面下1.2m、標高4.7m程のところから抉れている。抉れ部の範囲は径 1.9m程である。鳥栖ロームと八女粘土の境界部に当たるその部分の標高は、４mを前後する。

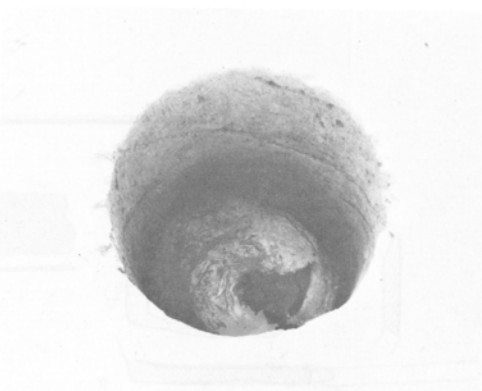
井戸の径は下方に向かってやや細くなってゆき、底部は擂鉢状になっている。底面の平面形は、長楕円形状を呈す。その深さは検出面から3.0m、標高2.9mを測る。



７号井戸（南から）



８号井戸（北から）



７号井戸（南から）

図30　井戸

覆土は、黒褐色粘土で、なかに鳥栖ロームの風化粘土化した部分のブロックを含むことが注意される。

遺物は、覆土中から散慢に少量の土器小破片が出土したのみである。

7号井戸は、10号井戸と抉れ部で重複しており、10号井戸に一括投棄された土器のひろがりが、7号井戸の抉れ部の範囲にまでひろがることから、7号井戸が10号井戸に先んじるものであった考えられる。

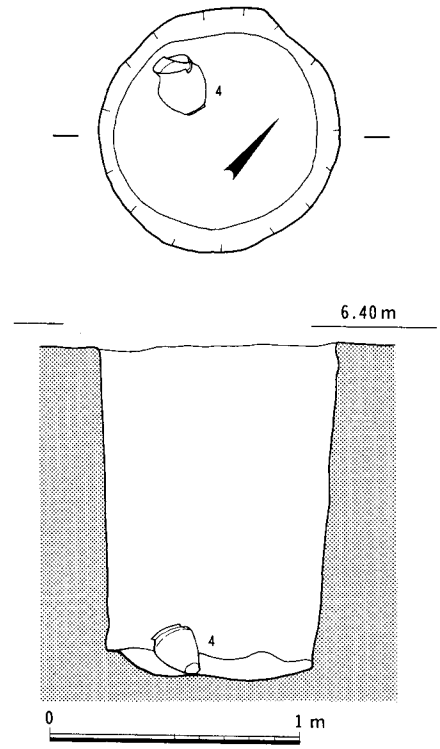


図31　8号井戸(1：30)

8号井戸（図30・31）

東区A群井戸のうち、密集部の南端に位置する。

平面形はほぼ円形を呈し、その径 1.0mを測る。下方にやや細くなりながら、確認面から 1.3m、標高 4.8mの位置で底面に至る。底面の平面形も円形で、凹凸はあるが、壁に抉れ等はない。壁面には、又、工具痕が残っている。幅0.06mで縦方向に打ちおろされたものによるものとみえる。

8号井戸では、他の多くの井戸にみられるように鳥栖ロームを掘り抜き八女粘土にまで至るような掘削は行なわれていない。

覆土は、全体に黒褐色粘土で、ロームブロックを挟んでいる。

遺物は、覆土中から散慢に出土した。底面上の壺1点が完形で出土した他は、少量の土器片である。また、植物質の遺物も遺存している。

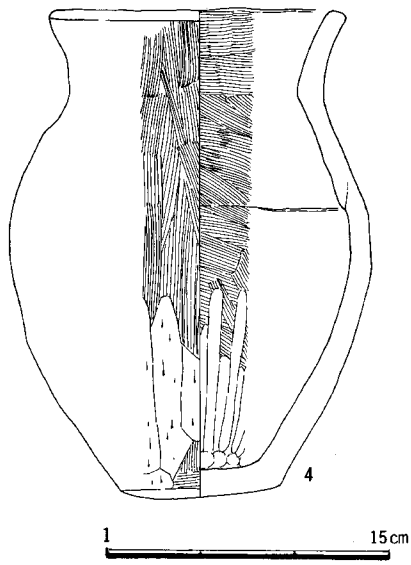


図32　8号井戸出土遺物(1)(1：4)

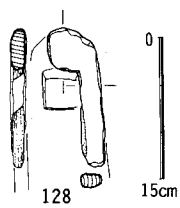


図33　8号井戸出土遺物(2)(1：8)

8号井戸出土遺物（図32・33）

4は、井戸底面から完形で出土した。壺である。長胴で広口、底部の縁辺は丸味がつき、底面もやや丸味をもっている。器壁が厚い。弥生時代後期中葉を考えられようか。

128は、木製鍬の柄孔部を含む頭部破片である。

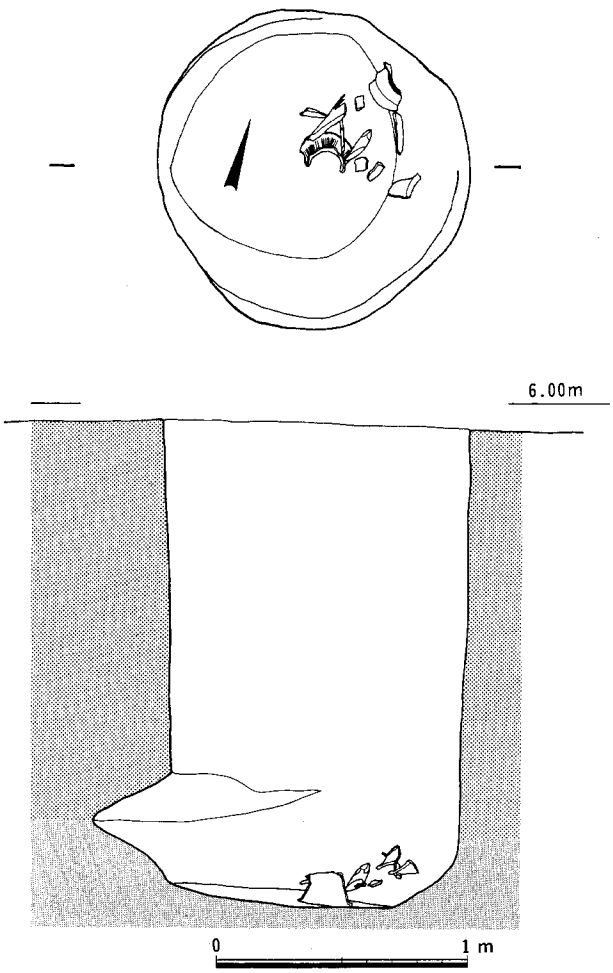


図34　9号井戸(1：30)

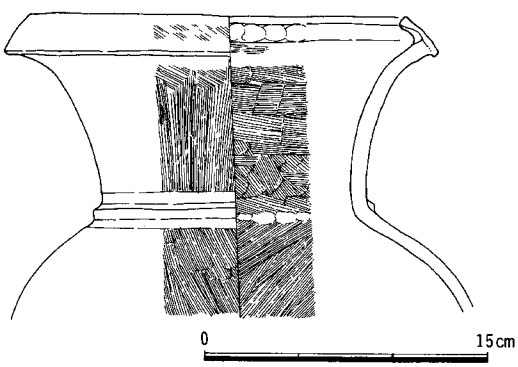


図35　9号井戸出土遺物(1：4)

9号井戸（図30・34）

東区井戸A群の密集部に位置する。

平面形は、不整な円形状を呈し、その径1.2mを測る。下方へその径をあまり変えず続き、確認面下1.9 m、標高4.0mの位置で、不整な円形状の平面を呈する底面となる。

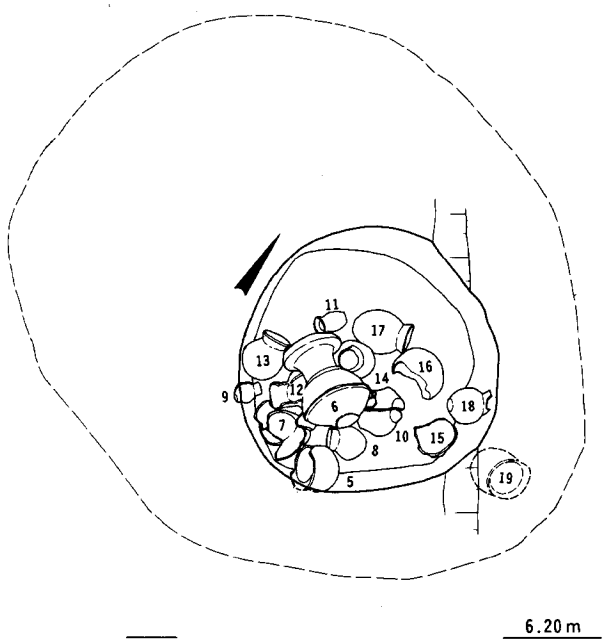
また、確認面下 1.4m、標高 4.5mの位置から、西壁部分が抉れている。抉れの最大となるのは鳥栖ロームと八女粘土の境界部で、その標高 4.2mを測る。

覆土は、確認面では黒褐色粘土であるが、それより下が、鳥栖ロームブロック混りの暗褐色粘土と黒褐色粘土との互層となる。確認面下 1.5m以下は、軟質の黒褐色粘土となり、あるいは水中への推積を考えられよう。

遺物は、覆土中より散慢に出土した他に、底面直上に、壺上半部が破砕された状態で1個体分出土した(1)。また、木質の遺物も遺存し、杭製作時の削片と覚しきもの等、みられる。

9号井戸出土遺物（図35）

図示できるのは、底面直上出土の壺(1)のみである。上半分の全形を知ることの出来る資料で、肩部から屈曲し立ち上った頸部と、稜を成して屈曲、内行内湾する短い口縁部がつくものである。弥生時代後期中葉を考えることができる。



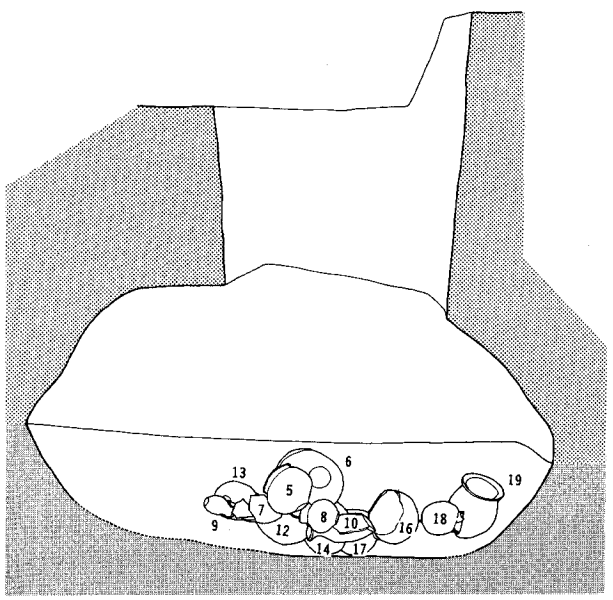


図36　10号井戸(1：30)

10号井戸(図36・37)

東区井戸A群の密集部の中央に位置する。

上部を一部撹乱により削除されている。以て述べる数値は、撹乱のない部分を確認面とした場合のものである。

平面形は、不整な円形状を呈し、その径 1.1mを測る。下方に向かいやや径を減してゆくが、確認面下 1.1m、標高にして48mの位置から大きく抉れている。抉れは、長径 2.5m楕円形状を呈する。抉れ部は、井戸壁が薄く剝落し、その間を黒色粘土が充塡したような状態で埋没している。確認面での覆土は、黒褐色粘土でロームブロックを一部に混じえる。

底面は確認面下 2.2m、標高 3.7mの位置にある。抉れ部の広がりが皿状にすぼまって広い底面となる。底面では、一括投棄されたとみえる土器が、一部抉れ部へ入り込むような格好で出土した（5・19)。このことから、抉れ部が形成されて後も底面が露出した状態で使用された時期があった、言い換えれば、井戸ざらえにより、崩落した土砂を除去しつつ使用された時期があったことが知られる。

遺物は上述した一群の土器の

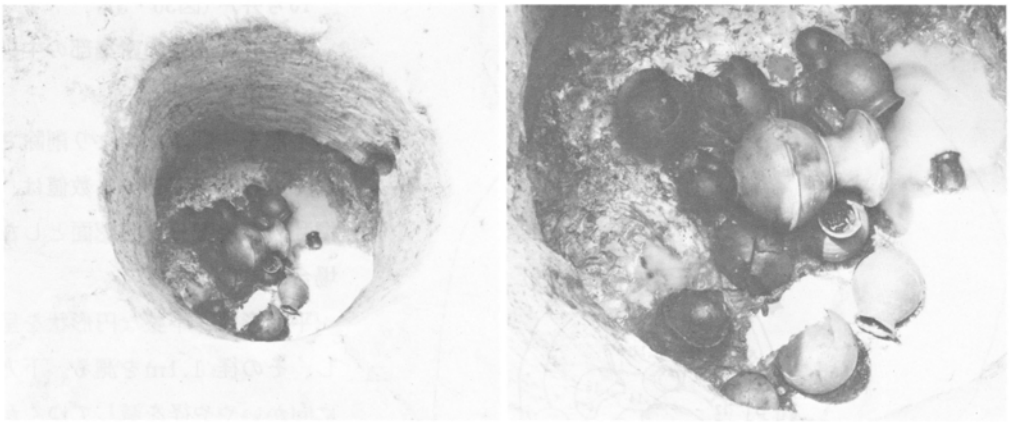


図37　10号井戸　　全景(北から)　　遺物出土状況(北から)

他に、覆土中から散慢に出土した。

10号井戸出土遺物（図38・39・40）

壺には大別して2者ある。一方は外上方に高く延びる頸部と鋭く屈曲内向する口縁をもつもの(6)であり、他方は比較上短く外向外反する口頸部をもつもの(5・18・198・12・7・14・10・13・17・16・15)である。前者は、ほぼ球形の胴部と断面台形状の凸帯、丸味をもった底面と底部縁辺部を持っている。後者は、球形に近いもの（5・18・16・15）と長胴のもの（198・12・7・14・10・13・17）とに分かれる。一部例を除いて頸部は、なだらかな曲線で胴部から連なる。底部は平底のものがあるが安定が良くない。他はやや凸面を成している。

甕とするのは8.1919である。8は胴部が球形に近く、頸部が大きくくびれて、口縁は鋭く屈曲して外向する。19は長胴で、口縁部の屈曲は比較して弱い。

11・199・9・200は小形の土器の一群にある。壺(11)、甕(9)、鉢(199・200)がある。いずれも大きさの割に器厚が大である。

以上全体に底部が不安定になりつつあること、8の存在などから、弥生時代後期中葉を考えることができよう。

木器は3点を示せる。

201・202は、部分材の片側が尖るように全体を削ったもので、いわば箸状を呈する。203は枝部をもった部分材を利用して台と柄とを削り出しているようにみえる。斧柄であろうか。

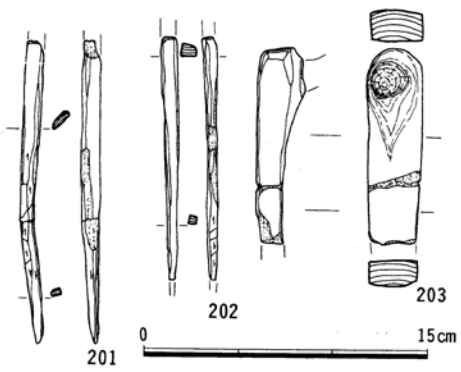


図38　10号井戸出土遺物(1)(1：4)

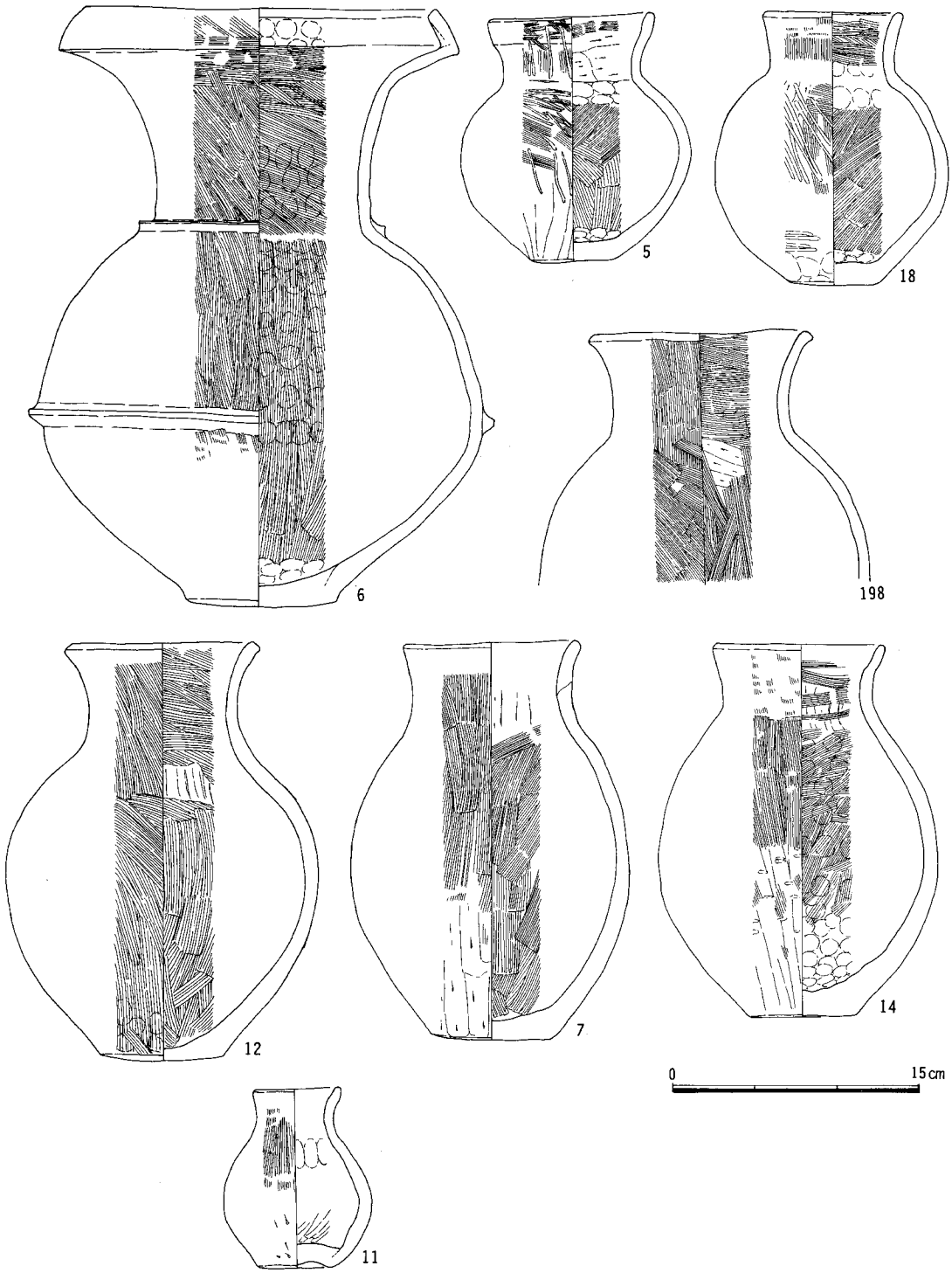


図39　10号井戸出土遺物（1 ： 4）

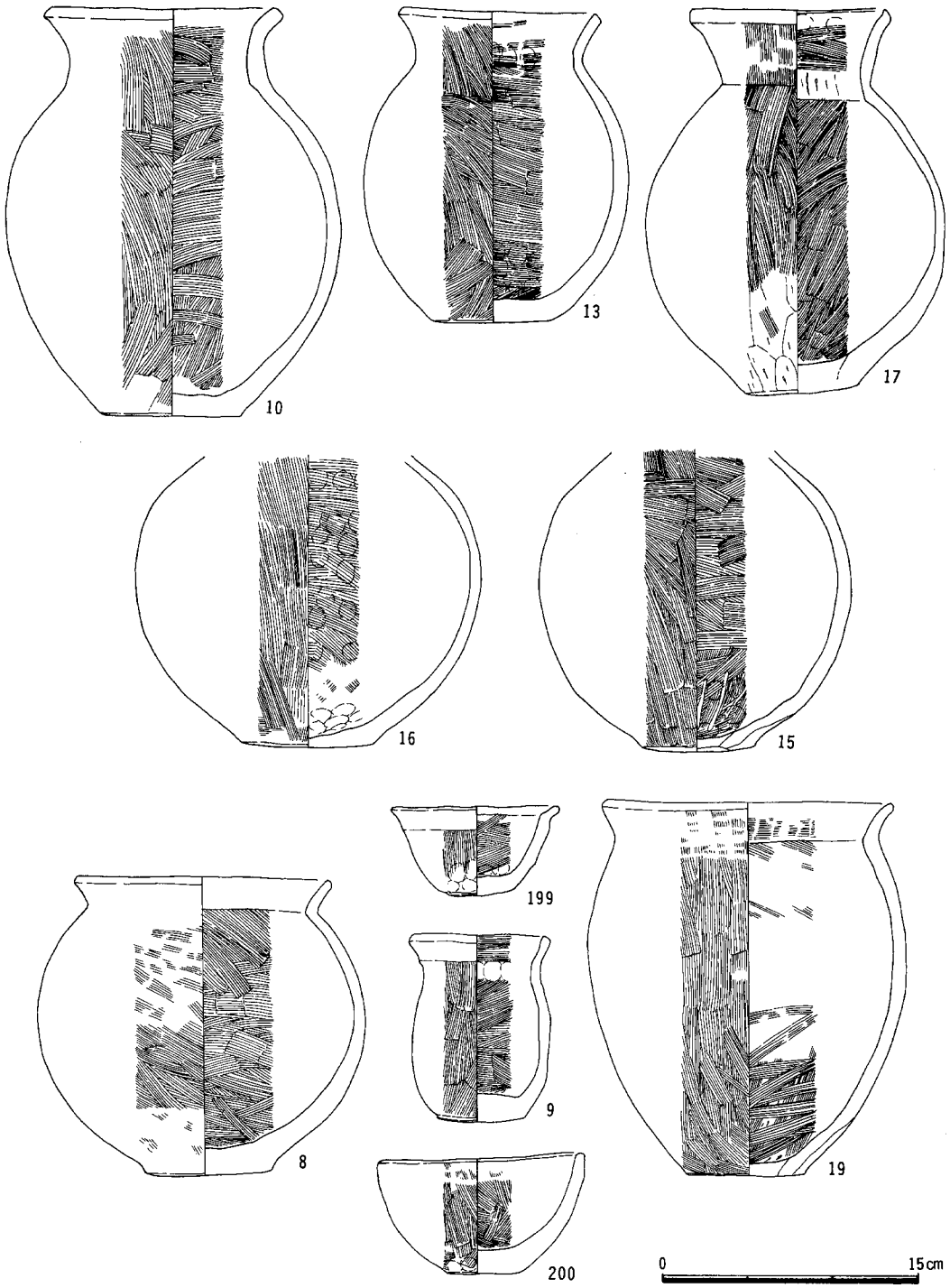


図40　10号井戸出土遺物(1 : 4)

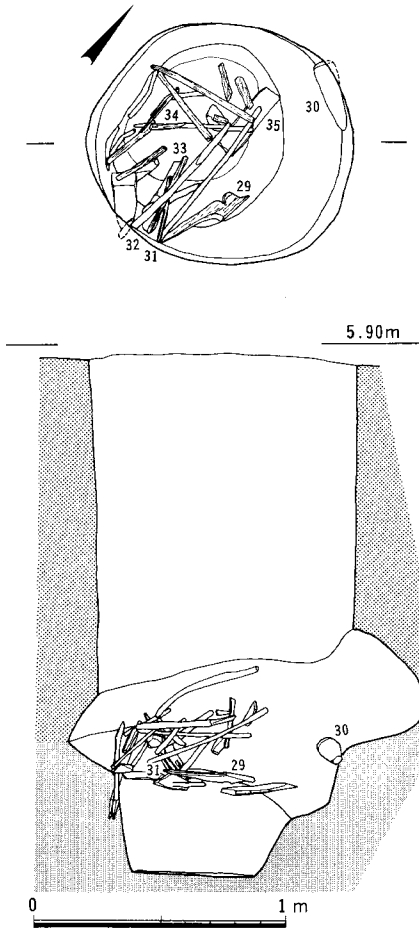


図41　11号井戸(１：30)

11号井戸（図41・44）

東区井戸A群の密集部に位置する。

平面形は不整な円形で、その径 1.0mを測る。下方へはそのままの大きさで続くが、底部近くで急にすぼまる。底面は、不整な楕円形状となっており、確認面からの深さ2.0m、標高3.8mの位置にある。他の多くの例と同様、途中で抉れており、その、確認面からの深さ1.0～1.3m、標高4.7～4.4mを測る。抉れの最も広がる部分は鳥栖ロームと八女粘土の境界部にあり、その標高 2.4mを測る。

覆土は、抉れ部までは、ロームのブロックを層状に挟んだ暗褐色色及至黒褐色土、それ以下は黒色の土となるが、底部近くは、流出した八女粘土で埋まっている。

遺物は、抉れ部で木製品等が集中的に出土した他は、散慢に出土し、土器は、極く少量の後期弥生土器破片があるのみである。

断面図にみられるように、抉れ部の土留めをするかのように、小杭が打ち込まれていた。

11号井戸出土遺物（図42）

木器３点を示す。

木は三又鍬、29はナスビ形木製品の部分、30は杵の一部である。11は、枝部を切り離した丸木材である、樹皮も付着したままで、一部荒削りがなされるのみである。

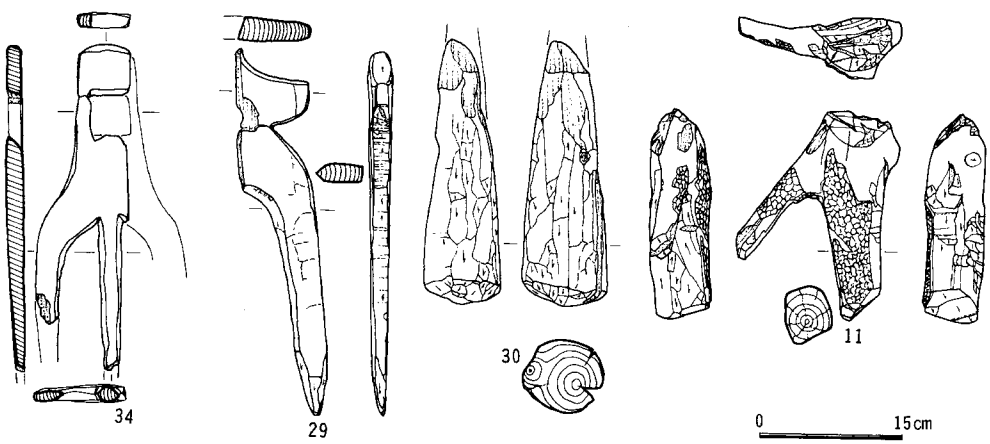


図42　11号井戸出土遺物(１：８)

12号井戸（図43・44）

東区井戸A群の密集部に位置する。

平面形は円形を呈し、径 0.9mを測る。下方に同じ径のまま続き、確認面から1.3m、標高4.5mの位置でわずかに抉れる。鳥栖ロームと八女粘土の境界もほぼそれに一致する。底面は、確認面から2.5m、標高3.5mの位置にある。平面形は、不整な楕円形状を呈す。

覆土は、確認面では、鳥栖ローム、八女粘土ブロック混りの暗褐色粘土だが、確認面下 0.2m以下抉れ部下位までは、黒褐色粘土となる。

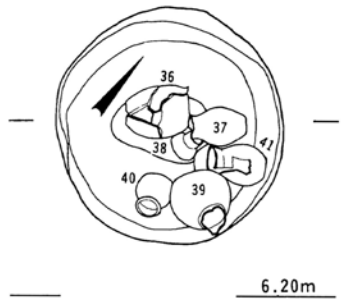
遺物は、土部では覆土中から散慢に出土した他、抉れ部の高さで、一括投棄された様な状態で一群の土器が出土した(36・42)。

12号井戸出土遺物（図45）

壺は、球形の胴部、外面稜を成して屈曲内向する口縁をもつもの(37)、球形に近い胴部と、長く外向する頸部をもつもの(38・39)、長胴で短く外反(40・42)あるいは上方に延びる口頸部をもつもの(41)がある。底部は総じて不安定である。

36は甕とする。頸部がしまり、口縁は内面に稜をなして外方に屈曲する。底径はやや大きめで、不安定な底部である。

以上の遺物のうち、壺37の特徴を捉えるならば、その時期を弥生時代後前葉とすることができよう。



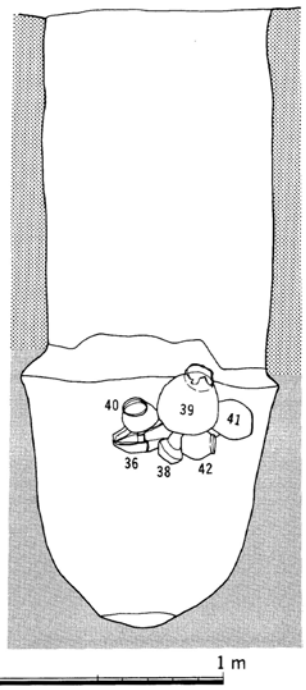


図43　12号井戸(1：30)

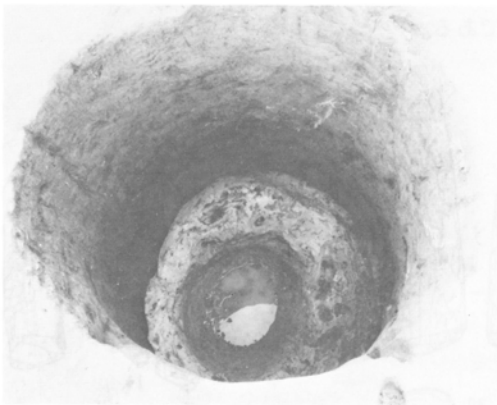
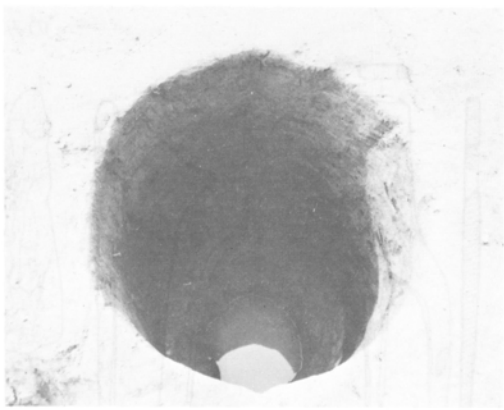


図44　井戸　11号井戸(南から)



12号井戸(南から)

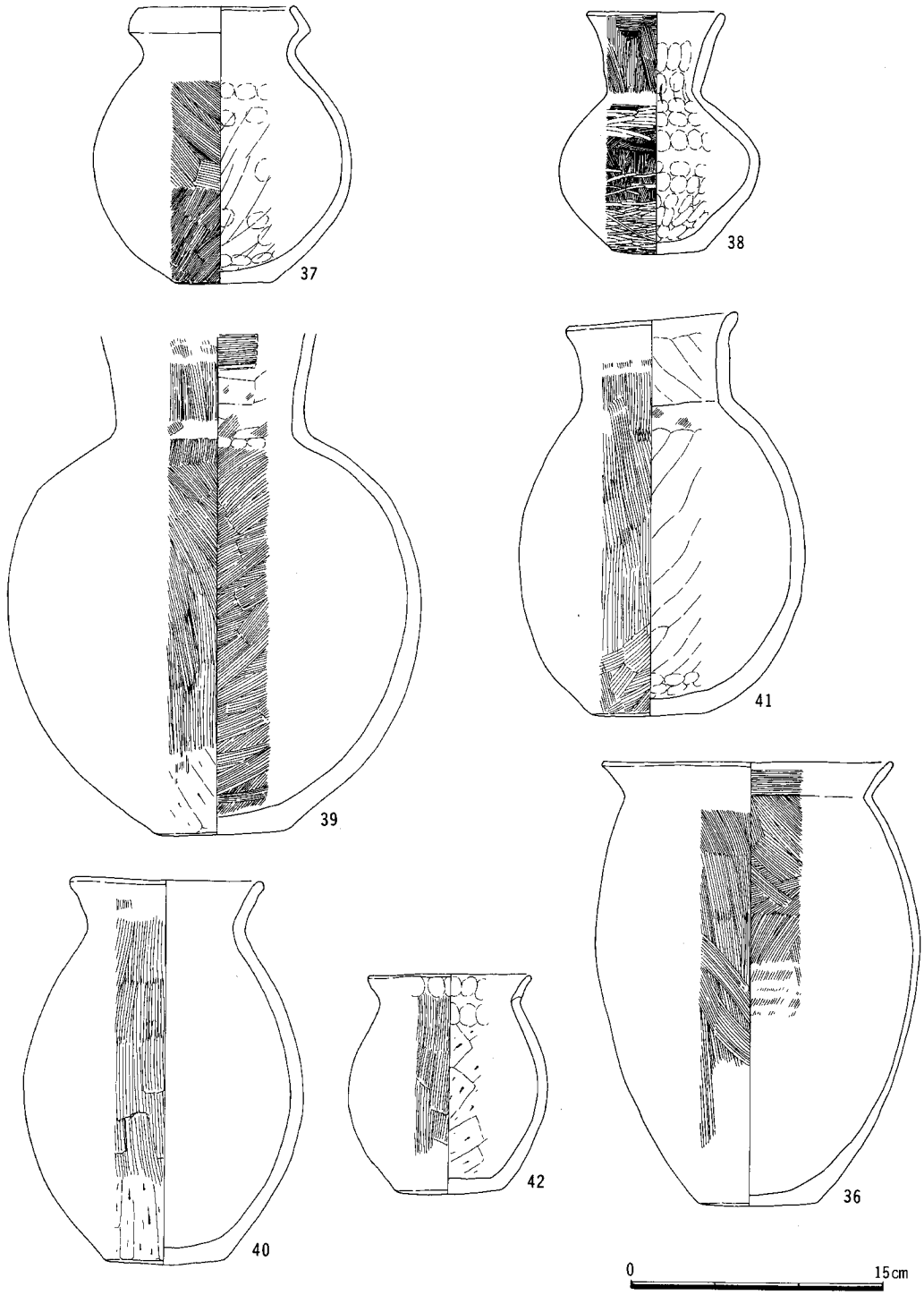


図45　12号井戸出土遺物（1 ： 4）

13号井戸（図46・49）

東区井戸A群の密集部に位置する。

平面形は不整な円形状を呈し、その径 1.1mを測る。下方へはほぼその径のままで続き、底面は不整な円形状を呈する。底面の位置がちょうど鳥栖ロームと八女粘土との境界部になっており、その確認面からの深さ 1.7m、標高4.2mを測る。調査時でもかなりの湧水がみられた。

覆土は、確認面では鳥栖ロームブロックを混じえる暗褐色粘土、下部では黒褐色粘土となり軟質である。覆土中には底部まで鳥栖ローム・八女粘土ブロックの薄層が混じり、さほど埋没しない状態での埋立てが考えられる。

遺物は、土器が覆土中から散慢に出土した他に、底部で完形の壺(74)が出土した。総量は、コンテナ½程である。又、下半部では植物質遺物がよく遺存していた。植物質の遺物には、丸木材、割材、板材の他に図47に示すような木器がある。

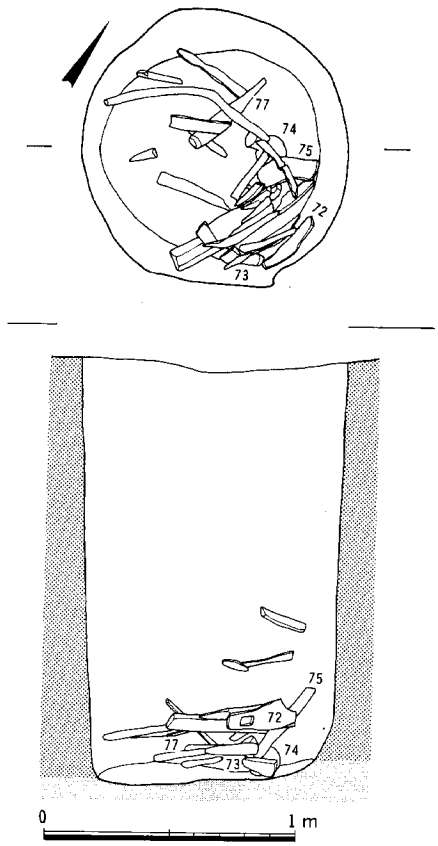


図46　13号井戸(1：30)

13号井戸出土遺物（図47・48）

壺は広口のもの（204）と、直口細頸のもの(74)とがある。前者は短頸で、口縁部は鋭く屈曲、外反気

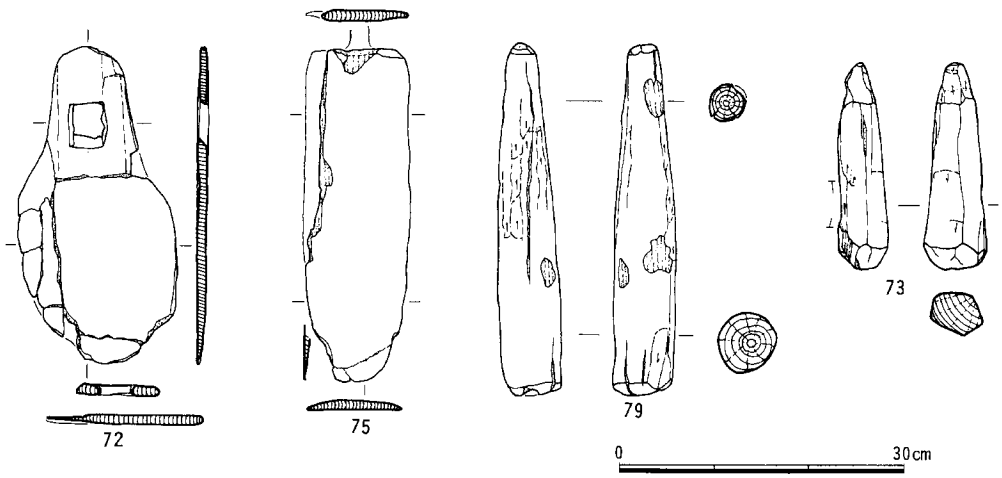


図47　13号井戸出土遺物(1)(1：8)

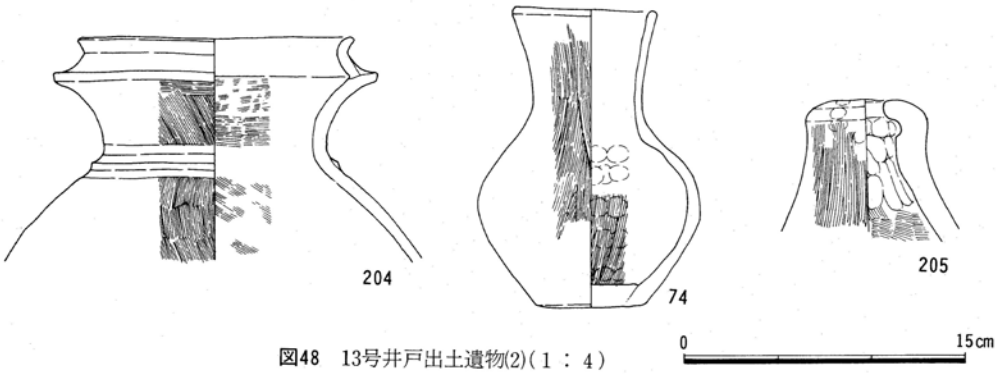


図48　13号井戸出土遺物(2)(1：4)

味に内行する。口縁端部は今度反外方に折り返され、外面に稜線が生じる。後者は、ゆるやかに外上方に広がりそのまま、端面となっている。やや不安定な底部となっている。 205は器台とする。上端部が内屈し、脚部へは、かなり大きく開いてゆく。弥生時代後期中葉とする。

木器には以下のものがある。

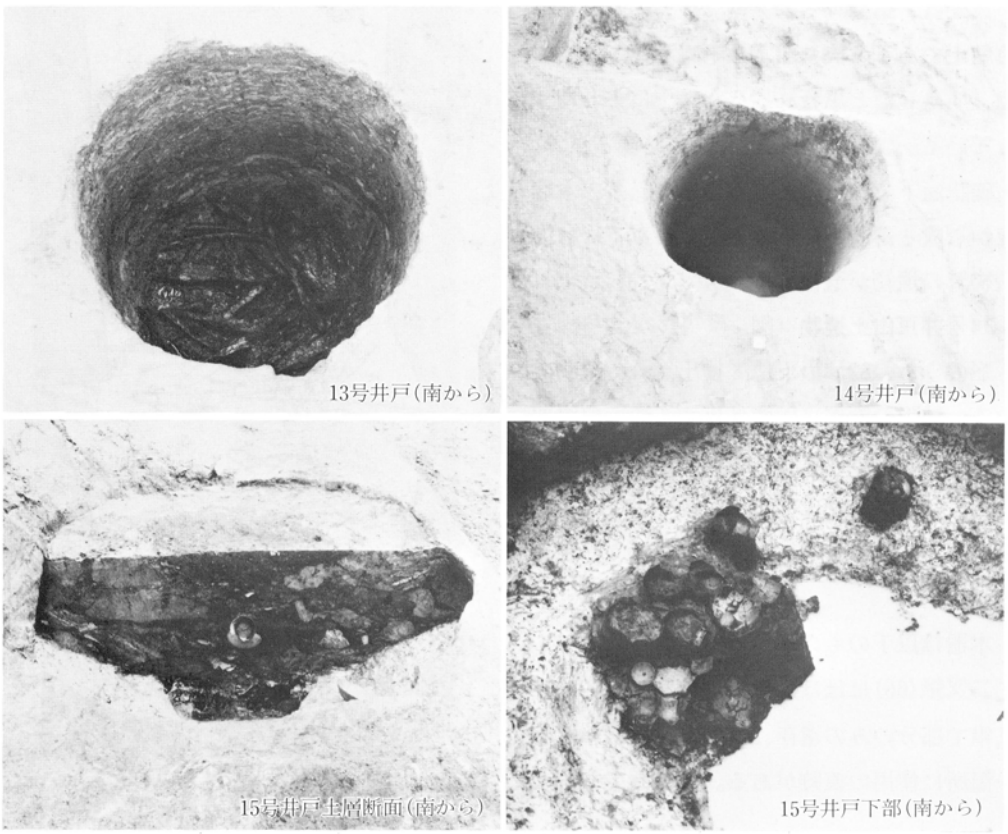


図49　井戸

平鍬(72)は、ほぼ全形が知られる。刃部に金属刃を装着した可能性がある。

鋤(75)は、柄を造り付けるものである。

竪杵(79・73)はいずれも握り部端が削り面で構成されている。

14号井戸（図49・50）

東区井戸A群密集部から離れて南、1号溝外辺と重複している。

平面形は不整な円形状を呈し、その径 1.2mを測る。下方へはその径のまま掘られている。確認面下1.4m、標高4.4mの位置でわずかに抉れている。抉れが最大となるのはやはり、鳥栖ロームと八女粘土との境界部で標高 4.1mを前後する。底面は図上不整な円形状を呈し、やや広い。

覆土は、鳥栖ロームブロックを含んだ黒褐色粘土である。抉れ部より下底面に至るまでは、崩落したと思われる八女粘土により埋まっている。底面の標高は、2.8mを測る。

確認面下 1.0mのところに木葉、茎、木端等から成る薄層がみられる。それ以下には、植物質の遺物が遺存する。

14号井戸出土遺物（図

壺のうち、82は最下位で検出された遺物である。球形の胴部に屈曲外反する短い口縁部がつく。底部は丸味をもつ。48は小形の壺である。45・46は鉢である。

底部の形状により、後期中葉と考えられよう。

木器は以下のものが示せる。

二叉鍬(66)はほぼ全形が知られる。69は三叉鍬で部分のみの遺存、206は火鑽臼で、片面一箇所に使用の痕跡がある。81は砧である。

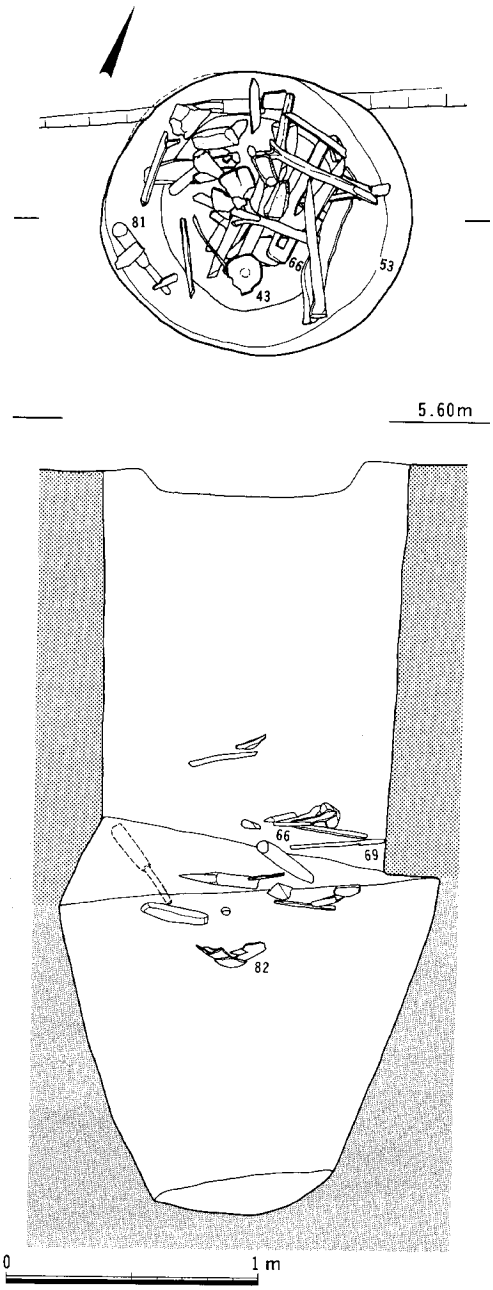


図50 14号井戸(1：30)

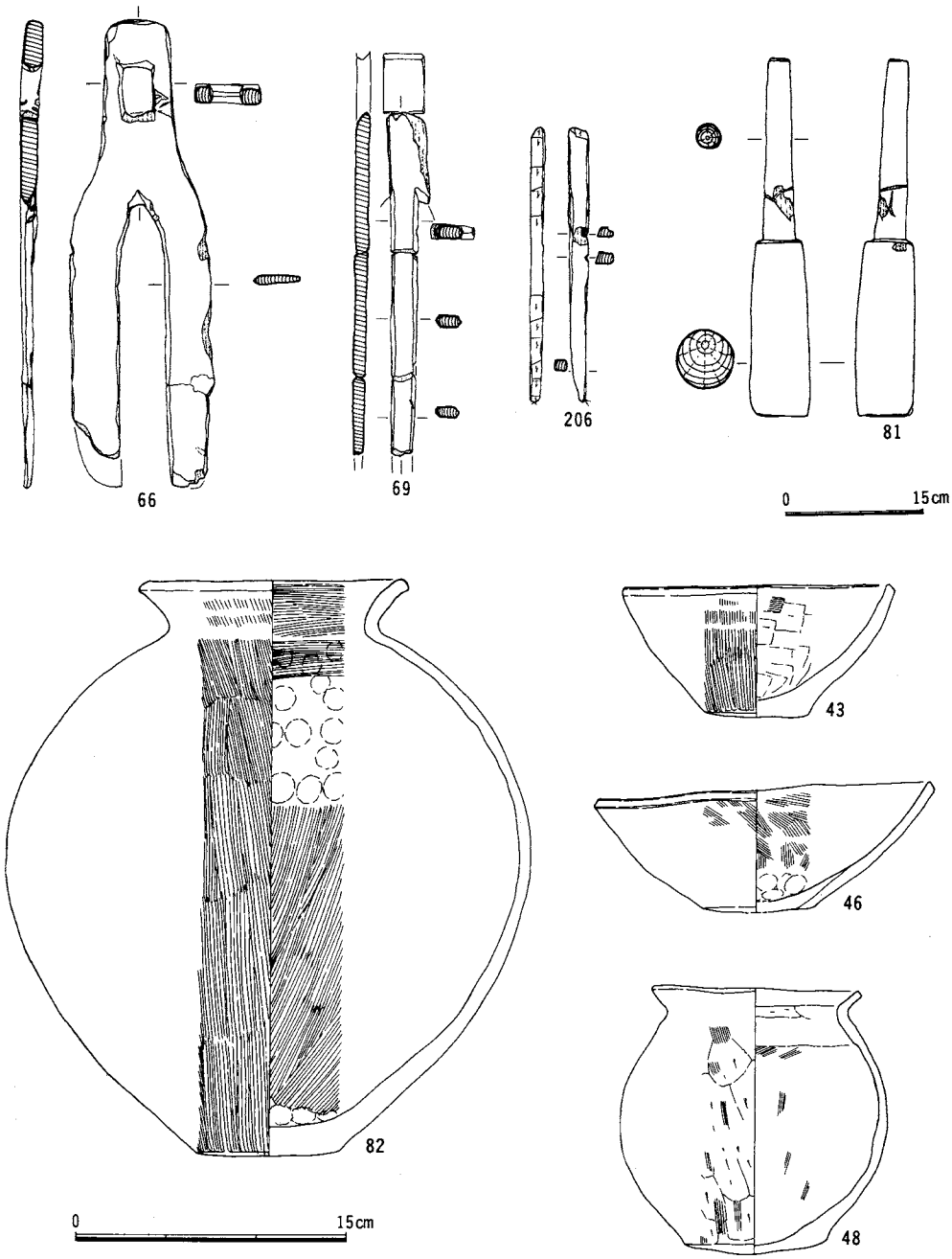


図51　14号井戸出土遺物(1：8・1：4)

15号井戸（図49・52）

本遺構は東区の南西隅部で単独に検出した。検出面は標高5.9～6.1mである。平面形は東西約2.9m、南北約2.6mを測り、比較的大形の略円形を呈する。断面形は円錐台形を呈し、深さ

さは検出面より約1.8mを測る。覆土は下層から灰黒色粘土、黒色有機質粘土、茶褐色粘質土、黒褐色粘質土と堆積し、最上層からは多量の土器が出土した(図49)。なお、各層の壁側には基盤層である鳥栖ローム や八女粘土の土塊が多量に含まれている。この遺構での両層の境界は標高約 5.5m付近にあり、本遺構の最大径の位置に一致している。したがって、本来より小さかった井戸が埋没までの過程に壁の崩壊により、径を拡大したものと考えられる。

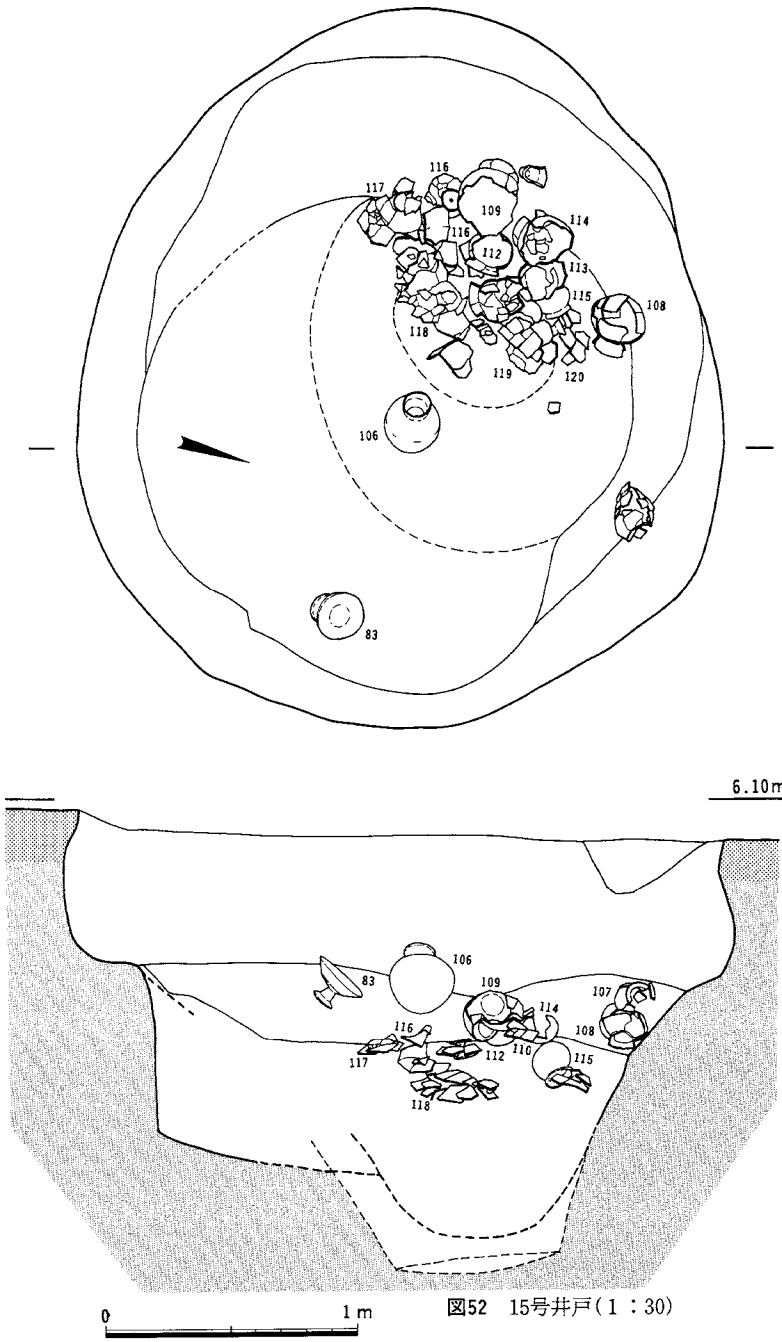


図52　15号井戸(1：30)

遺物は遺構底面より0.7～1.3m上位の覆土中に土器が一括投棄された状態で出土した(図 52)。 その中で壺 (106)、甕 (107)、高坏(83)の3点は中央付近から北東側にほぼ完形のまま出土し、他はほとんど西側に偏って重なり合うように出土した。なお後者には完形のまま投棄されたと考えられるものも多く含まれている。

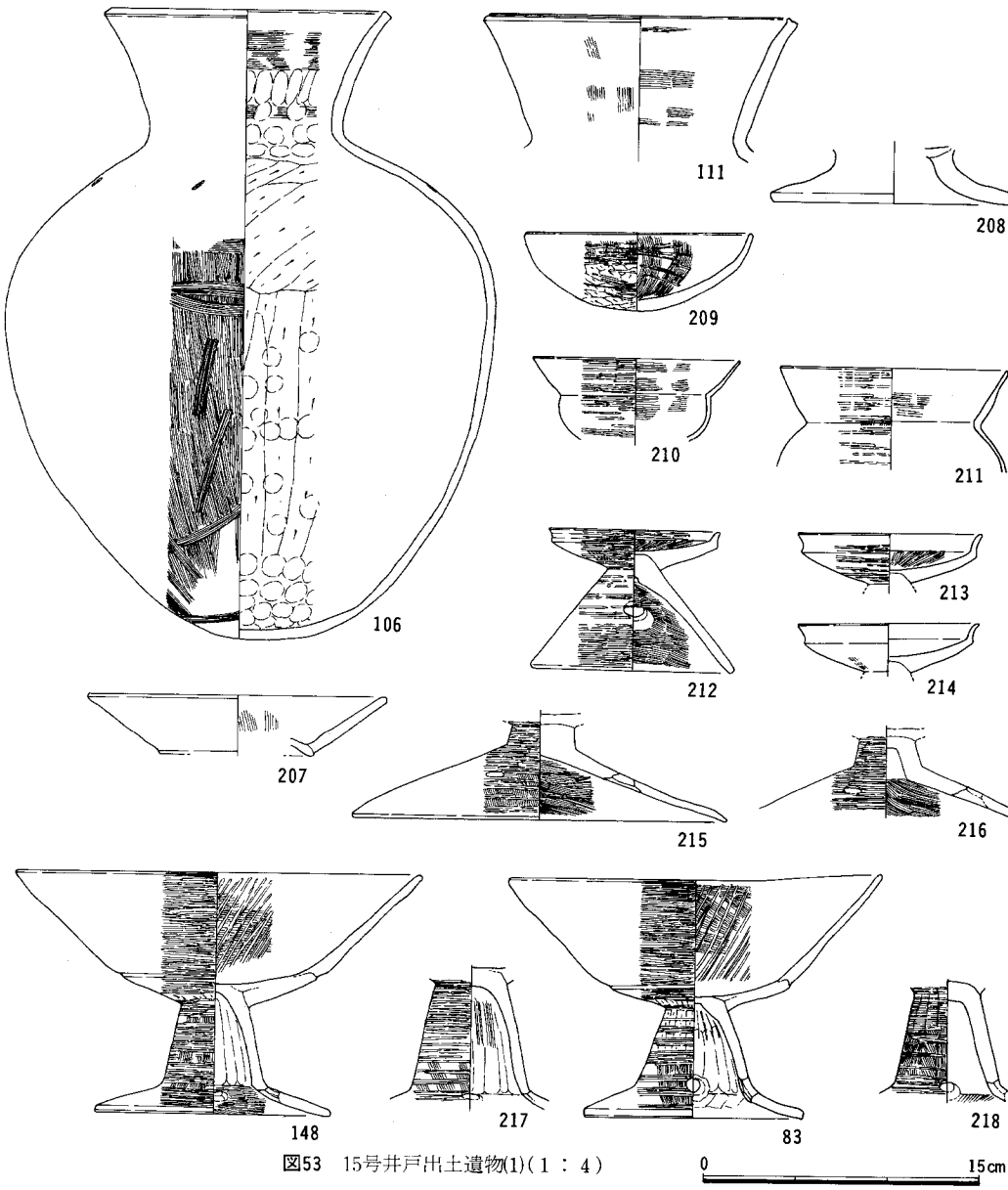


図53　15号井戸出土遺物(1)(1 : 4)

15号井戸出土の遺物（図53・54）

出土した遺物には古墳時代前期のいわゆる古式土師器を主とし、これ以前のものとして弥生時代中期から後期の土器も出土している。総量は整理箱に5箱分である。壺には広口壺)(106・111)、二重口縁壺（207)、小形丸底壺（210・211)、中形壺（108)がある。高坏には軸部の短いもの（215・216)、長いもの（148・217・83・218）がある。甕は全て内面にヘラケズリが施され、器壁を薄く仕上げられたもので、直線内に外反する口縁部がつく。その中には器外面にハケメ

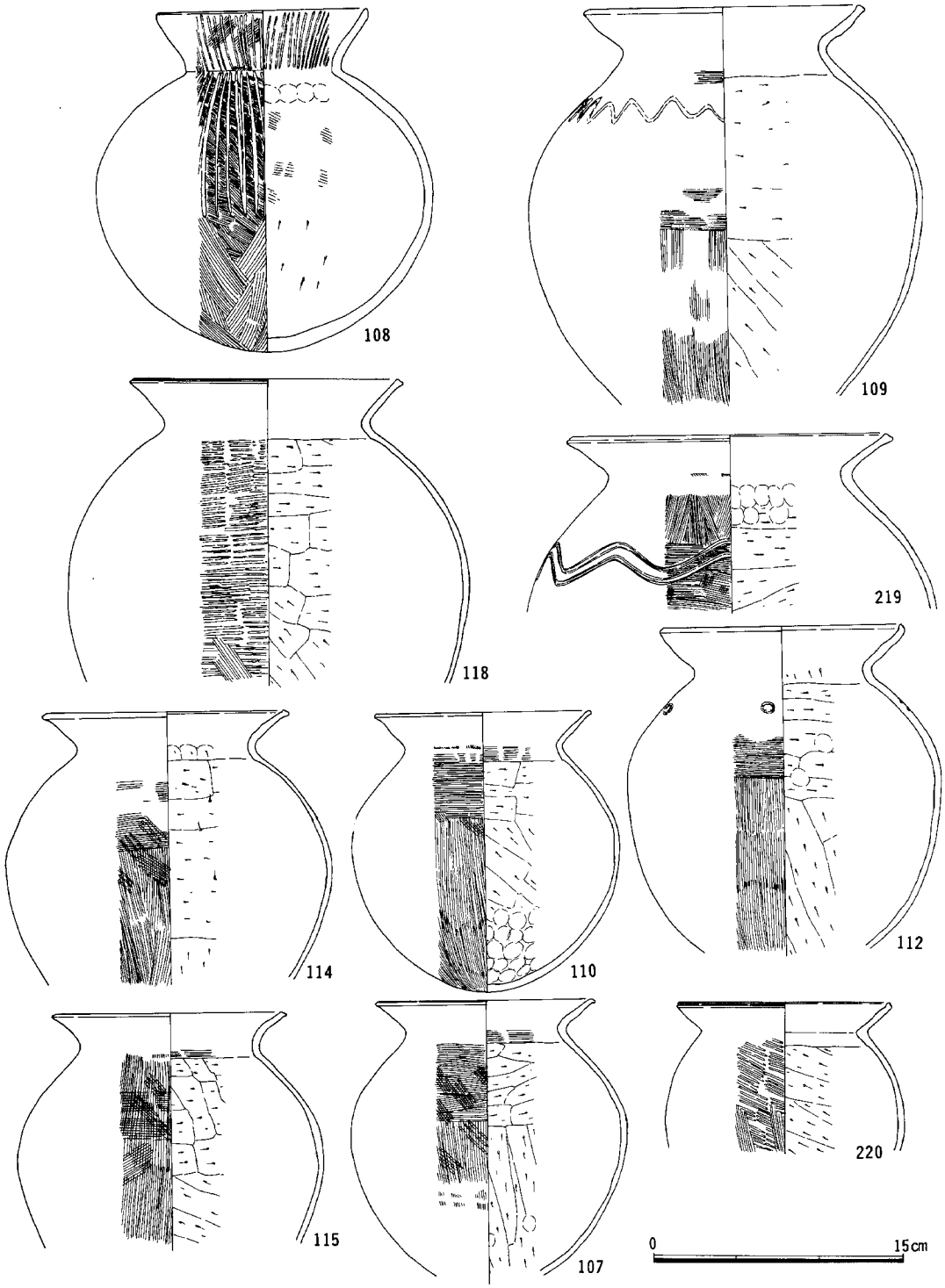
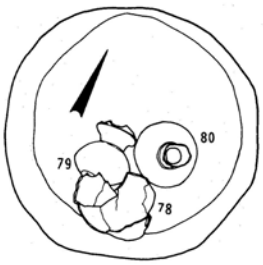


図54　15号井戸出土遺物(2)(1 : 4)

を施し口縁端部をわずかに摘み上げ、上方にやや尖るもの（109・219・112・114）や、端部を外方に摘み出すもの（110・115・107）、　器外面にタタキ痕を残し、口縁端に凹線を一条施文するもの（118・220）などがある。その他に碗（209）、小形器台（212～214）がある。



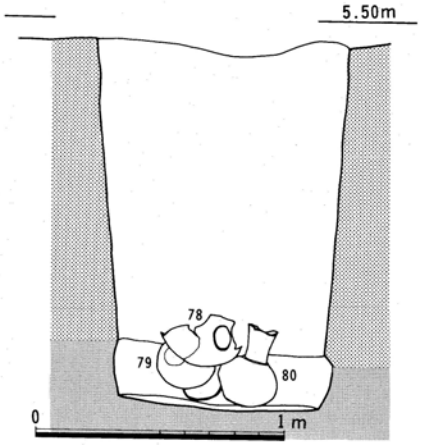


図55　16号井戸（1：30）

16号井戸（図55・56）

東区井戸A群の密集より離れ、1号溝底部にあたる位置にある。調査の所見によれば、1号溝・17号溝よりも16号井戸が古い。

平面形は円形を呈し、その径 1.0mを測る。断面形は、下方に向かった少しすぼまってゆき、確認面下 1.2m、標高 4.2mの位置で鳥栖ロームと八女粘土の境になり、これ以下がわずかに抉れる。底面は確認面下 1.4m、標高 4.0mの位置にあり、広い不整な円形状を呈する。

覆土は、ロームブロックの薄層を挟んだ黒色土である。

遺物は、覆土中から散慢に出した。総量はコンテナ½箱程の破片の他に、底面直上に、投棄されたような状態で一群の土器が出土している（78・79・80）。

図56　16号井戸（東から）

16号井戸出土遺物（図57）

底面直上の一群で図示できる資料である。

3点あるが、いずれも壺であり、かつ相互に形態の全く異なるものである。

79は、鋭く円屈し端部をつまみあげられる口縁部をもった資料である。80は、長頸の壺で口縁部を欠く資料である。78は、極く短かい口頸部をもっている。

以上3点を胴部形状でみるならば、上下に圧縮される形状の79・80と、長胴の傾向にある78とに分けられよう。いずれも最大径部は、中位にある。底部形状でみるならば、不安定ながらも平底の79と緩い凸面を成す80・78とに分けられる。

以上の資料から、弥生時代後期中葉が考えられよう。

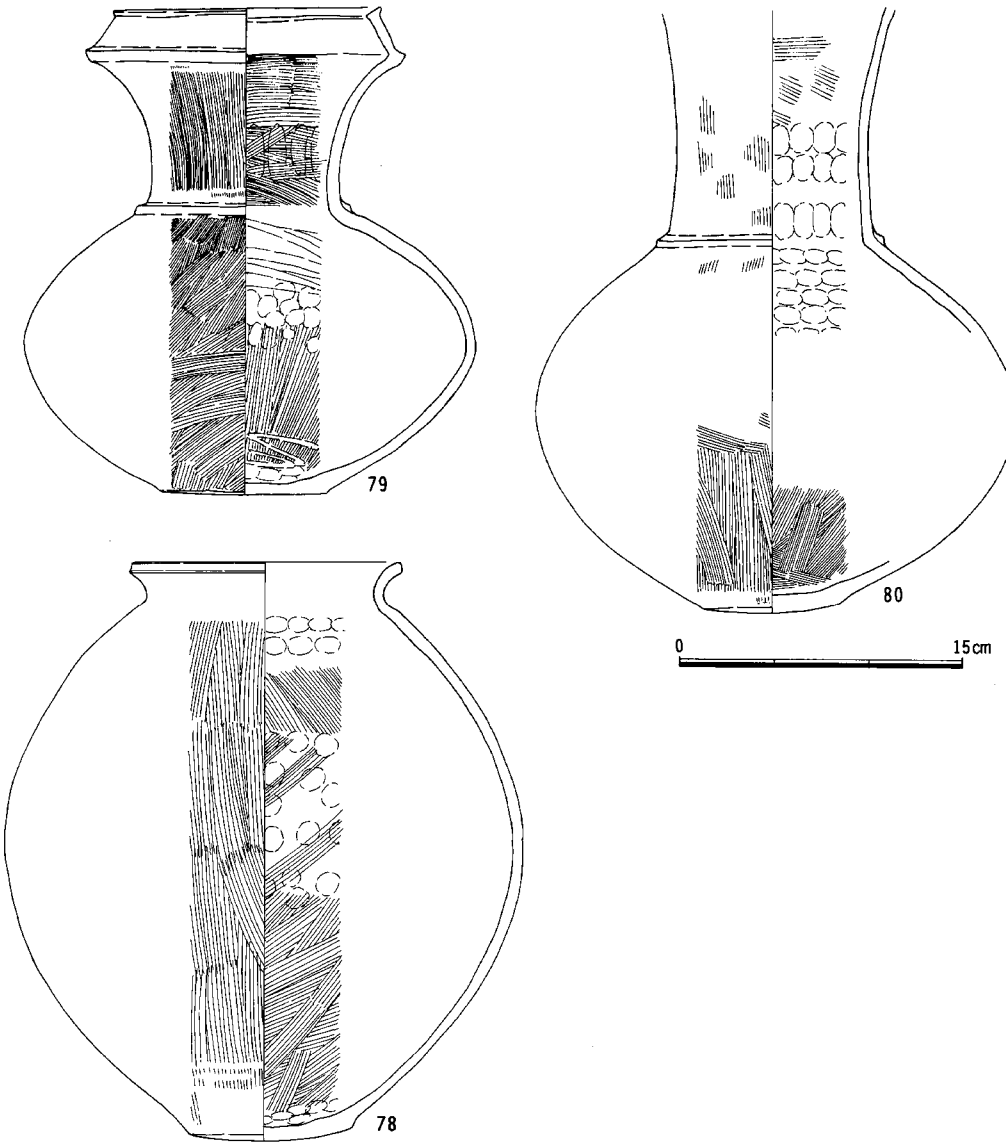


図57　16号井戸出土遺物(1 : 4)

さて、16号井戸は、1号溝・17号溝のいずれからも切られている。これの出土土器と1号溝覆土中の遺物を比べると、1号溝について考えることの出来る年代として弥生時代後期後葉という時期を示すことができよう。

18号土坑(図58・59)

西区南辺部に位置する。

平面形は、長軸線を東西方向にとる、不整な隅丸長方形状を呈す。その長さ2.6m、幅1.6m

を測る。断面形は、皿状を呈しており、深さ 0.2mを測る。

覆土は黒褐色の粘土で、硬い。

遺物は覆土中から散慢に出土した。いずれも小破片であり、図示し得ない。弥生時代中期の壺、甕の破片より新しい時期を示す資料はない。

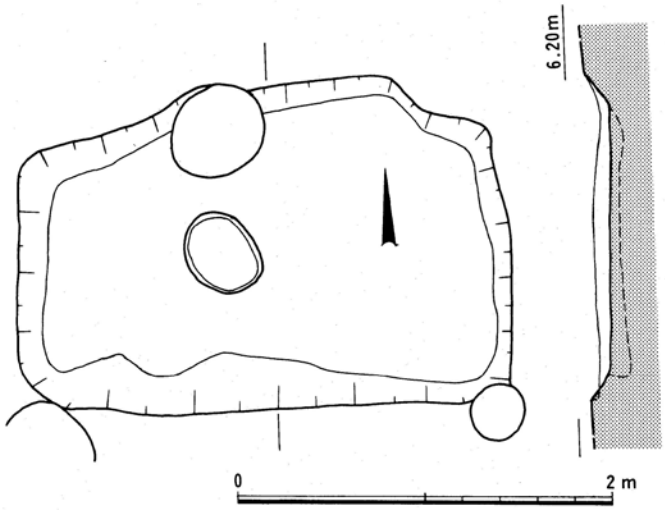


図58　18号土坑(1：40)

19号井戸（図60・62）

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群南西側で検出した。検出面は標高約6.0～6.1mである。平面形は東西約 1.1m、南北約 1.0mの略円形を呈する。深さは約2.7mを測る。形状は検出面より約1.7m付近まで円筒形であり、東側に中心をずらしてさらに約1m先すぼまりの円筒形に掘り下げている。覆土は段掘りより下部は灰褐色粘土、上位は主に黒褐色粘質土である。鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.8mにあり、それより下位の八女粘土からなる壁面が全周にわたって崩壊している。

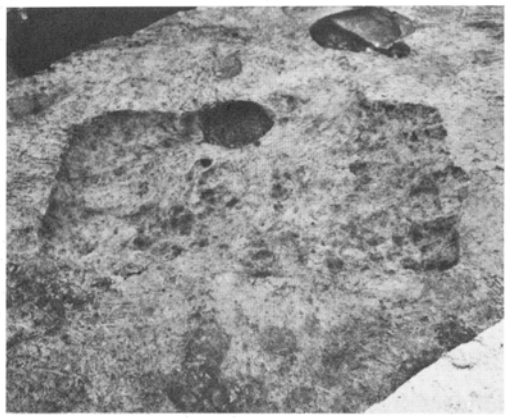


図59　18号土坑(南から)

遺物は段掘りのやや上位の標高4.7～5.0mの覆土中に一括出土した他少量の土器片が出土している。

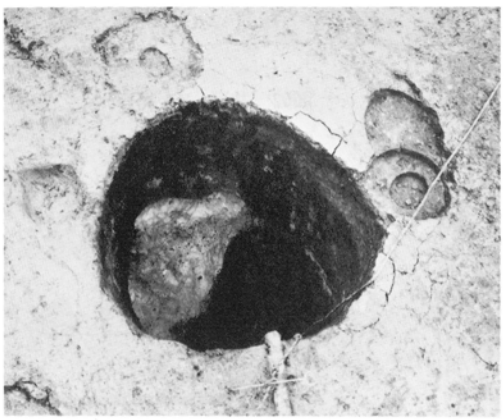


図60　19号井戸(南から)

19号井戸出土の遺物（図61）

出土した遺物には弥生時

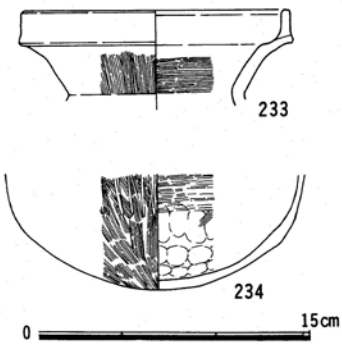


図61　19号井戸出土遺物(1：4)

代後期後葉の土器片と加工木材を含む木片がある。これ以前のものとして弥生時代中期の土器片も少量出土している。遺物の総量は整理箱½箱以下である。土器には二重口縁の壺（233）や底部（234）がある。加工木材は保存状態の悪いものであり、実測等は困難であった。

20号井戸

（図

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群南側で検出した。遺構上部の大半を近年の撹乱により

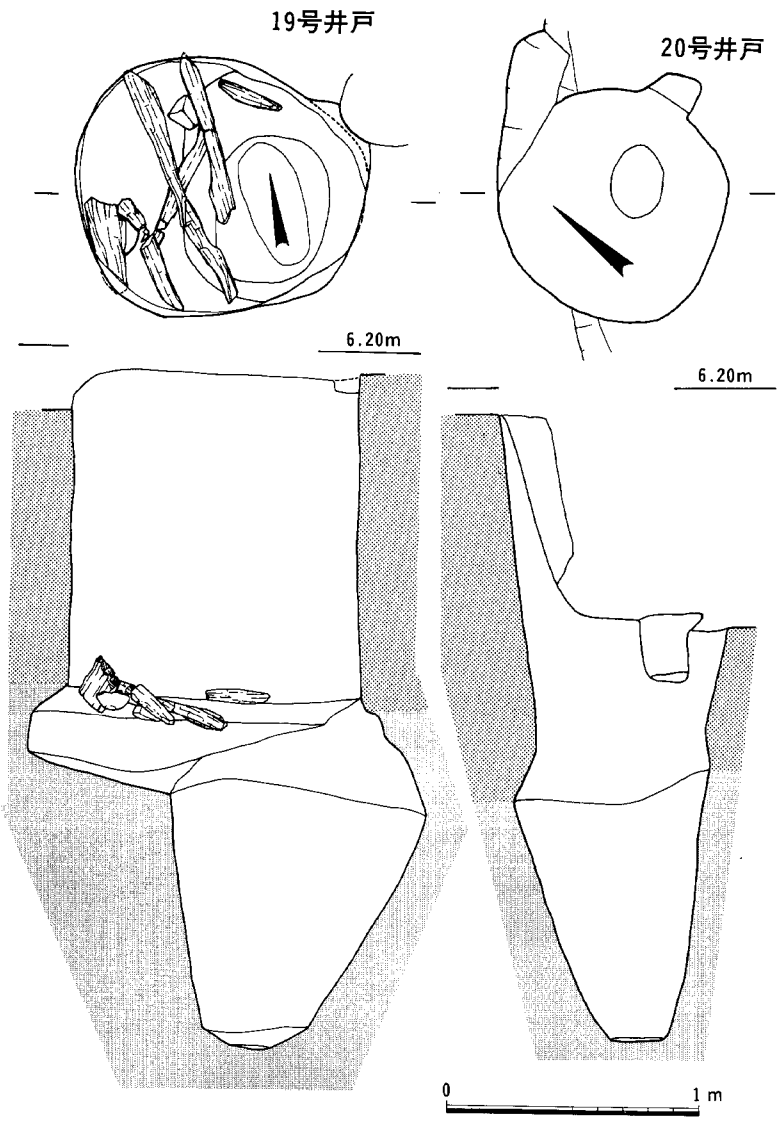


図62　井戸（1：30）

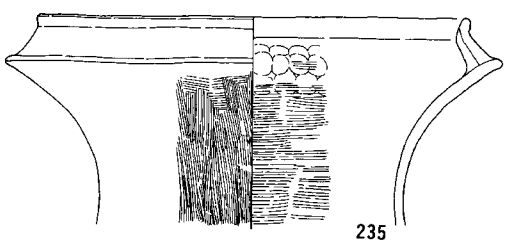
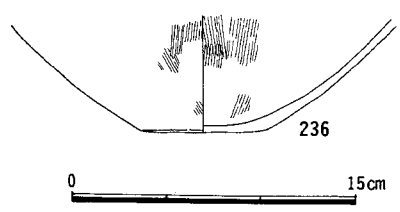


図63　20号井戸出土遺物(1)（1：4）



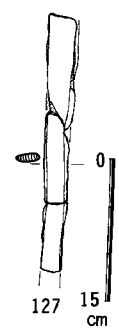


図64　20号井戸出土遺物(2)（1：8）

壊されている。確認できる遺構上端の標高は約 6.1mである。平面形はほぼ円形を呈し、標高5.2m付近で径約0.8mを測る。断面形は先すぼまりの円筒形を呈し、深さは約 2.5mを測る（図62）。基盤の鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.6～4.7m付近にあり、その周辺の壁面が一部崩壊している覆土は黒褐色粘土である。

遺物は全体に少なく、主に土器片が散発的に出土したのみである。

20号井戸出土の遺物（図63・64）

出土した遺物には弥生時代後期中葉の土器片と木器がある。これ以前のものとして弥生時代中期の土器片も出土している。遺物の総量は整理箱1/5箱以下である。土器には二重口縁の壺（235）や底部（236）がある。木器には三又鍬の中央刃が1点ある。127は現存長25cm、刃幅17cm、厚さ0.8cmを測る。

21号溝（図6 ・65・66）

本遺構は西区の南側に位置し、ほぼ東西に走行する溝状の遺構である。調査区内で溝の東端部分がやや湾曲し、向きを幾分南よりに変える傾向が認められる。断面形は逆台形をなしているが、南側の溝壁が傾斜を強く造られている。規模は東端で幅約1.3～1.4m、深さ約 0.5m、中央付近で幅約1,6m、深さ約0.5m、西端で幅約2.0m、深さ約0.8m東から西へしだいに幅と深さが大きくなっている。ちなみに溝底の標高は東端で約5.5m、中央付近で約5.4～5.5m、西端で約 5.3mとわずかに西下りで傾斜している。溝の長さは調査区内で15mを確認したが、さらに調査区外へのびると考えられる。

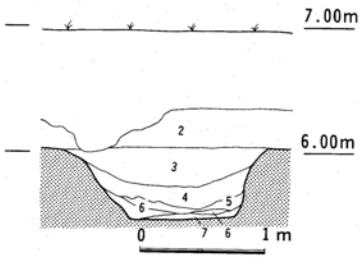


図65 21号溝土層断面（1：60）

溝の覆土は下半部が基盤の崩壊土塊を含む黄褐色の粘質土（5～7層）上半部が黒褐色粘質土（3・4層）であり、何れにも水成作用による堆積状態は確認できなかった。なお上半部の3・4層中には炭化物片、焼土片を含め多くの遺物が出土した。

21号溝出土の遺物（図67）

出土した遺物は古墳時代後期の須恵器、土師器を主体とし、これ以前の弥生時代中期から古墳時代前期の土器片も含まれている。遺物の総量は整理箱1½箱程度である。須恵器には坏蓋（237）、坏身(238)、高坏(239)、甕(240)がある。坏類は口径が14cm強と大きく、坏蓋内面の口縁端に段を持つなど古相を示し、高坏や甕にも比較的古相を示す特徴を持つことから小田富士雄氏によるⅢA期、6世紀中

図66 21号溝・23号溝（南から）

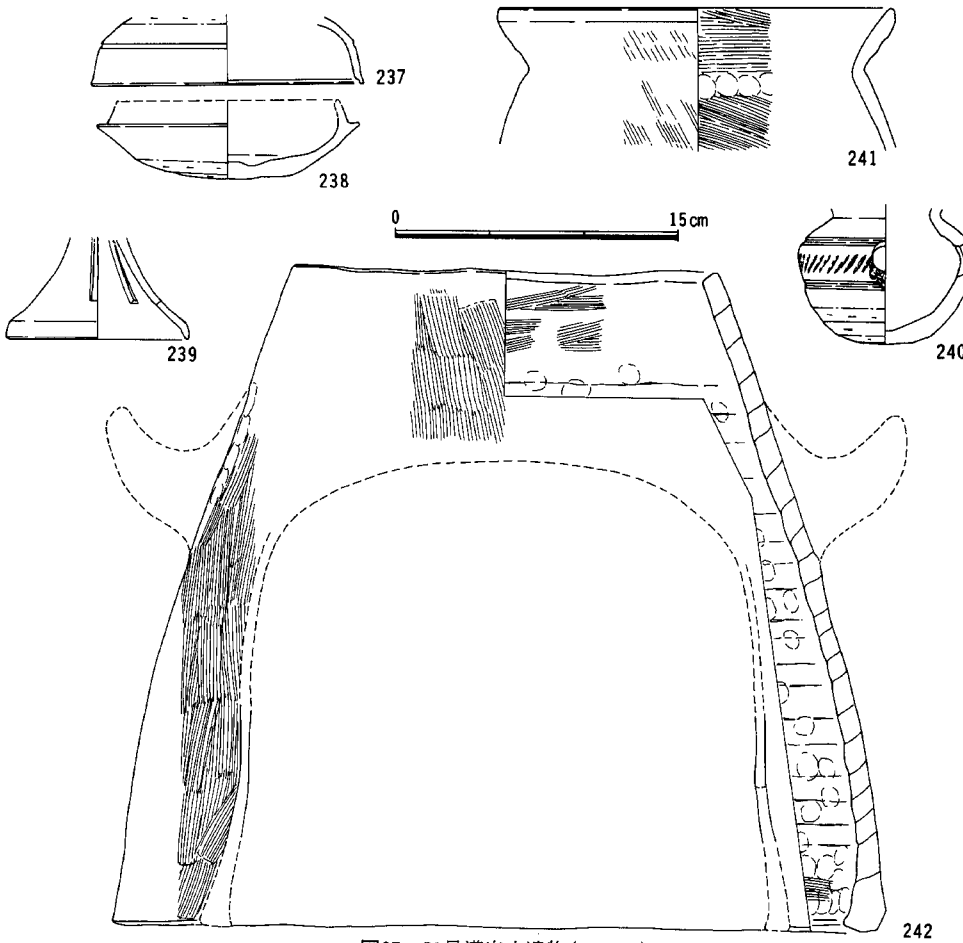


図67　21号溝出土遺物(1：4)

葉の時期と比定される。土師器には甕(241)と竈(242)がある。後者はこの時期に類例が少なく貴重な資料と言えよう。

22号土坑（図68・69）

本遺構は西区の中央付近南側に位置し、井戸B群の北側に接している。検出面の標高は約 6.1mである。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺を北から15°～20°程西に振っている。規模は長辺が調査区外に延びるため 2.5m以上、短辺は約 2.0mである。深さは約 0.3mを測る。床面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。遺構掘上げ後に床面に柱穴を検出したが、本遺構に伴うかは明らかにできなかった。

遺構内の覆土は主に黒褐色土（1～3層）で基盤土のローム土塊を多量に含み人為的な埋土と考えられる。また、床面直上には炭化物片が多く含まれ、部分的に床面に密着して0.3～0.8cmの黒色炭化物層（4層）を形成している。黒褐色土中から土器片を主とする多くの遺物が出土した。

22号土坑出土の遺物（図70）

出土した遺物は弥生時代中期後葉の土器を主体とする。総量は整理箱⅓箱程度である。高坏(243)と壺(244)はヘラミガキを施し、赤色顔料を塗布している。甕(245～247)は器外面を丁寧にハケメ調整している。

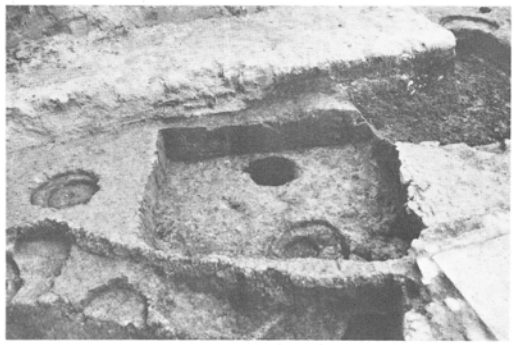


図68　22号土坑（南から）

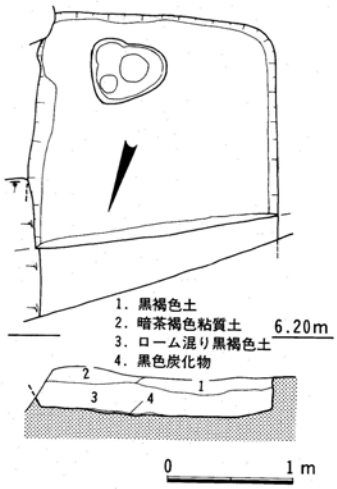


図69　22号土坑（1：60）

23号溝（図61・66）

本遺構は西区の南側に位置し、21号溝の北側に接して併行しつつ東西に走向している。本遺構は21号溝により切られている。

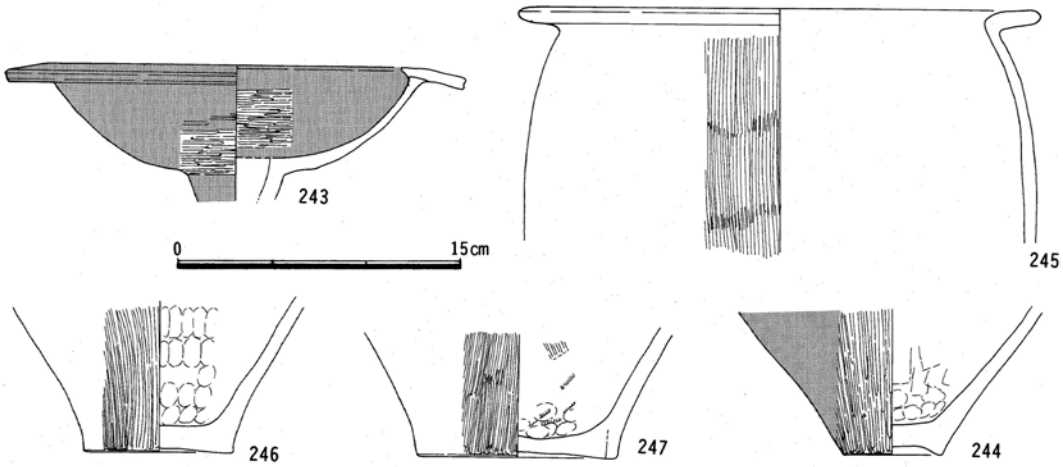


図70　22号土坑出土遺物（1：4）

断面形は浅いU字形となっている。規模は中央付近で幅約0.3m、深さ約0.3mを測り、両端はしだいに縮少し消えている。検出した延長は7.2mである。なお溝底の最深部の標高は約5.8mである。溝内の覆土は黒褐色であり、炭化物片や少量の遺物が出土した。

遺物は主に土器片であるが、時期を決定するに乏しいものである。総量は整理箱に1/10以下である。土器片には弥生時代中期から同後期後葉のものが主体を占め、他に1点の須恵器坏片がある。このうち須恵器坏片は小片で、作図は困難であるが比較的古相を示し、21号溝に近い時期が推定される。本遺構が21号構に切られている点と、同溝に併行して造られていること、出

土遺物に1点ではあるが両者の近い時期を示す資料が見られることから、21号溝口近い時期であろうが、より先行して造られた溝と考えておきたい。

24号井戸（図71）

本遺溝は西区の南側に位置し、井戸B群西側で検出した。上部は21号溝によって削平されている。確認できる遺構上端の標高は約5.7mである。平面形は径約1.0mの円形を呈する。深さは約1.6mを測る。断面形は検出面より約1.0m付近まで円筒形であり、さらに段掘りとして床面中央部を径約0.4m、深さ0.5mの逆円錐形に掘り下げている。覆土は段掘りより下部は灰褐色粘土、上部は黒褐色粘土である。鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.7m付近にあり、それより下位の八女粘土からなる壁面は全周にわたって崩壊している。遺物は段掘り部分からその上位の標高4.3～4.7mの範囲を中心に多く出土した（図　）。その中には完形のまま投棄したと考えられる壺（98）、甕(99)もある。また、それらの0.1～0.2m上位の覆土中には木器、木材等と稲ワラ状の炭化物が出土した。

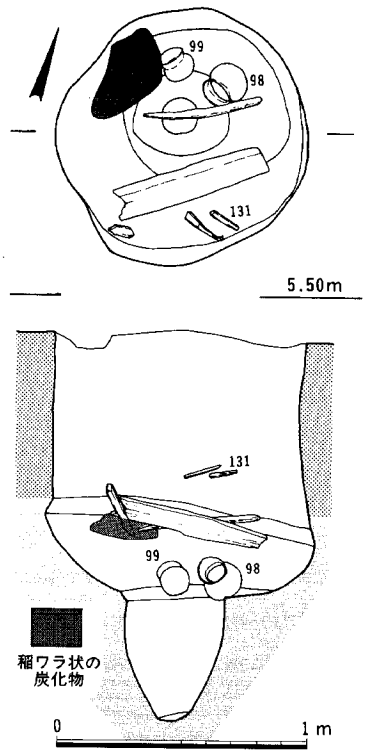


図71　24号井戸(1：30)

24号井戸出土の遺物（図72）

出土した遺物には土器と木器がある。土器は弥生時代後期後葉のものを主体とし、これ以前の同中期から後期中葉のものも含まれている。なお、遺構上部より須恵器片が数点出土しているが、所属時期や出土状況から21号溝からの混入品と考えられた。総量で整理箱½箱程度である。壺(98)は内面にヘラケズリ、器外面に縦方向の丁寧なヘラミガキを施したもので底部は丸

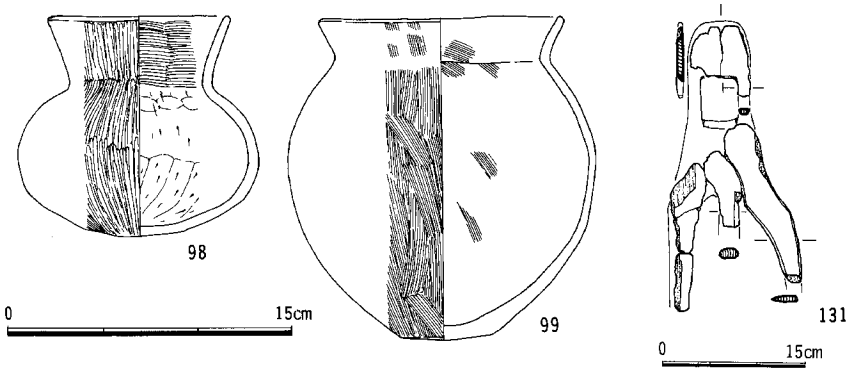


図72　24号井戸出土遺物(1：4・1：8)

底に近づいている。甕(99)は器外面をハケメ調整したもので底部は不安定な平底である。他に高坏片等があるが小片のため図化は困難である。木器は三又鍬が１点ある。これは断片であり保存状況は悪い。131は頭部と基部は未接合であるが同一体体と考えられるものである。推定復原現存長31cm、刃部幅14cm、最大厚１cmを測る。この他に加工の痕跡のある木材が出土したが保存状態が悪く図化していない。

25号井戸(図73)

本遺構は西区の南側に位置し、井戸Ｂ群中央付近に検出された。24号井戸の東に近接している。上部は21号溝によって大半を削平されている。遺構上端の標高は約5.9ｍである。平面形は径約 1.0ｍの円形を呈する。深さは約 1.4ｍを測り、ほぼ円筒状の断面形を呈する。なお、壁面の北東側と南西側の対称する位置に幅 0.2ｍ前後、深さ0.1～0.2ｍ高さ0.6～0.7ｍの凹みが検出された。同様の例は比恵遺跡６次調査地点ＳＥ02に認められ、調査者は足掛けに使用したと推定している[注7]。本遺構における鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.6ｍであり、床面より 0.1ｍ程上位にある。覆土は下部が灰褐色粘土、上部が黒褐色粘土である。上部から土器片が少量出土した。

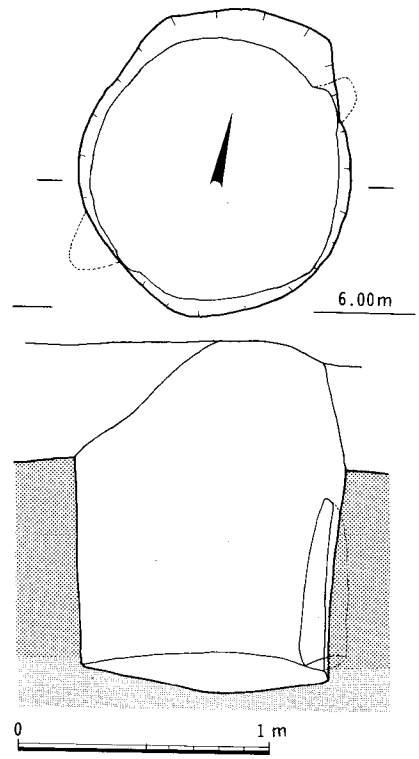


図73　25号井戸(１：30)

25号井戸出土の遺物(図74)

出土した土器は弥生時代後期後葉のものを主体とし、これ以前の同中期から後期中葉のものも含まれている。総量は整理箱1/10箱以下である。高坏は破片よりの復原であるが、坏部の中位付近で大きく屈曲し開く例 (248)や小形のもの(249)がある。

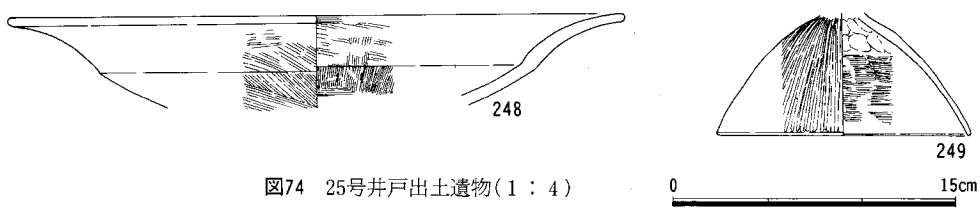


図74　25号井戸出土遺物(１：４)

26号井戸（図75・76）

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群の中央付近に検出された。遺構の上部南側は21号溝によって削平されている。遺構上端の標高は約 6.1mである。平面形は最上面で南北1.2m、東西0.9mの楕円形であるが、中位の標高 4.7m付近では南北0.8m、東西0.7mのいびつな隅丸長方形を呈する。深さは約2.9mを測り、先すぼまりの円筒状の断面形を呈する。本遺構での鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.5mであり、それより下位の八女粘土からなる壁面が全周にわたり崩壊し、大きくえぐれている。覆土は黒褐色粘質土で、下部で八女粘土の崩壊土塊を多く含んでいる。遺物は遺構下半の標高約3.7mから4.5mの間に集中し出土した。そのうち下半部には完形の壺(91)、一部欠損する甕（96・101)、半割状態の壺(94・95)が順に投棄された状態で、それらを覆うように木片、木材等がそれぞれ出土した。

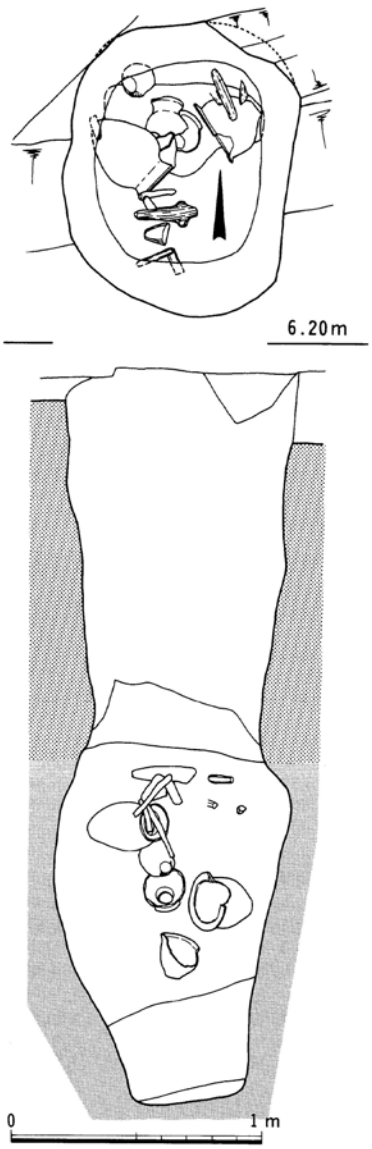


図75　26号井戸(1：30)

26号井戸出土の遺物（図77）

出土した遺物には土器と木材がある。土器は弥生時代後期前葉のものを主体とし、これ以前の同中期のものも少量含まれている。総量は整理箱1箱程度である。壺には二重口縁壺(95)、外反した口縁部をわずかに上方へ摘み上げ、上方にやや尖るもの(91)がある。甕は胴部が張り、長幅比の小さいものである（96・101)。壺・甕共に大きく安定した平底を持ち、外面は縦方向のハケメ調整、内面はヘラナデ指頭圧痕、ナデによる調整を施している。

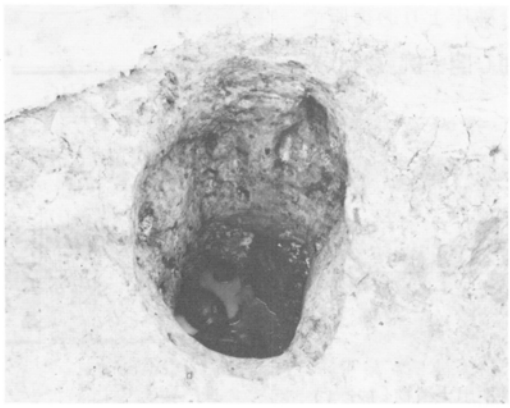


図76　26号井戸(南から)

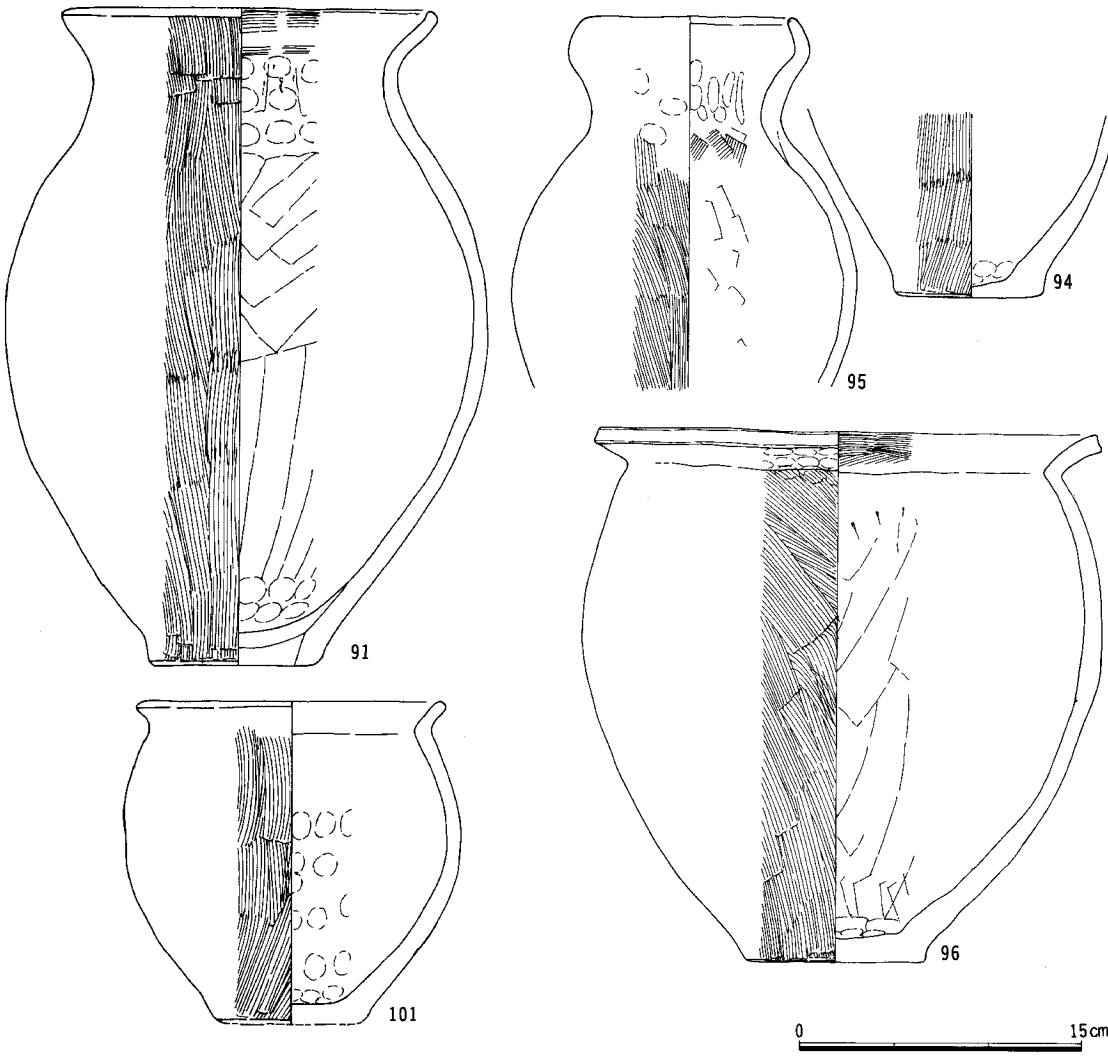


図77　26号井戸出土遺物(1 : 4)

27号井戸（図78・79）

西区井戸B群中の1基である。

平面形は、不整な円形状を呈し、その径 0.8mを測る。断面では、下方に次第に径を減じ、不整な円形状の底面に至る。確認面下 1.1mを前後する位置に鳥栖ロームと八女粘土の境界があるが、抉れ部等は形成されない。

覆土は、黒褐色粘土であり、ロームブロックを多量に含んでいる。

遺物は、覆土中から散慢に極く少量が出土した。

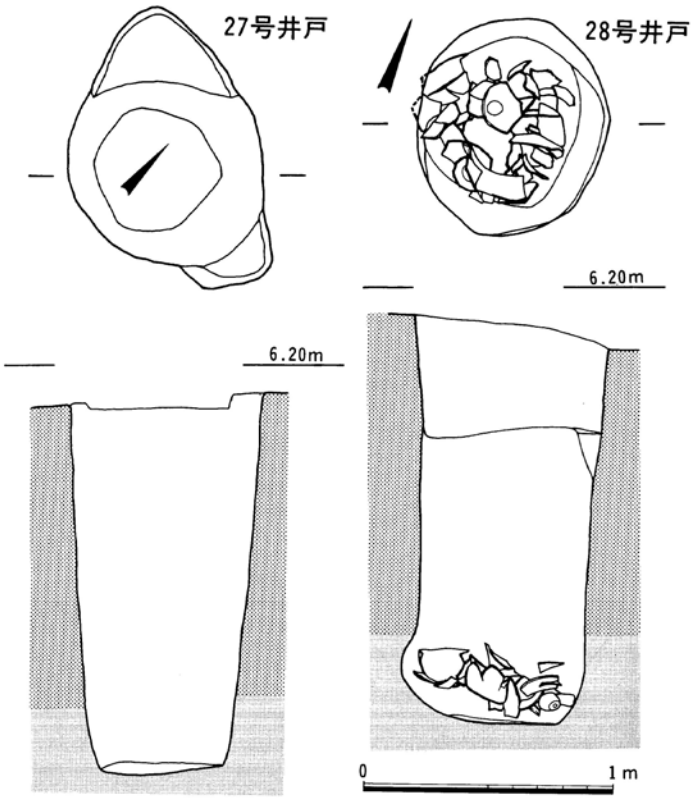


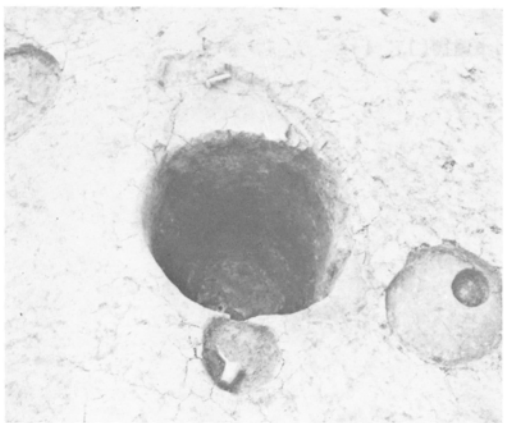
図78　井戸（1：30）

28号井戸（図78・79）

西区B群の井戸である。

平面形は、不整な楕円形状を呈し、その長さ0.9m、幅0.7mを測る。断面はややすぼまる。確認面下1.3mで標高4.8mの位置、鳥栖ロームと八女粘土の境界で片側にわずかに抉れる。抉れ部直下が底面となる。底面は、不整な楕円形状を呈す。深さは 1.6mである。

覆土は、黒褐色粘土である。



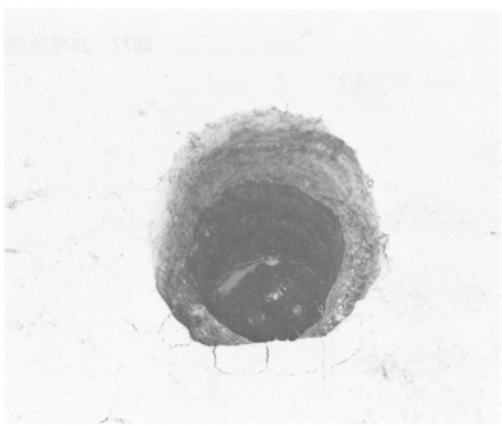


図79　井戸　　27号井戸（南から）　　28号井戸（東から）

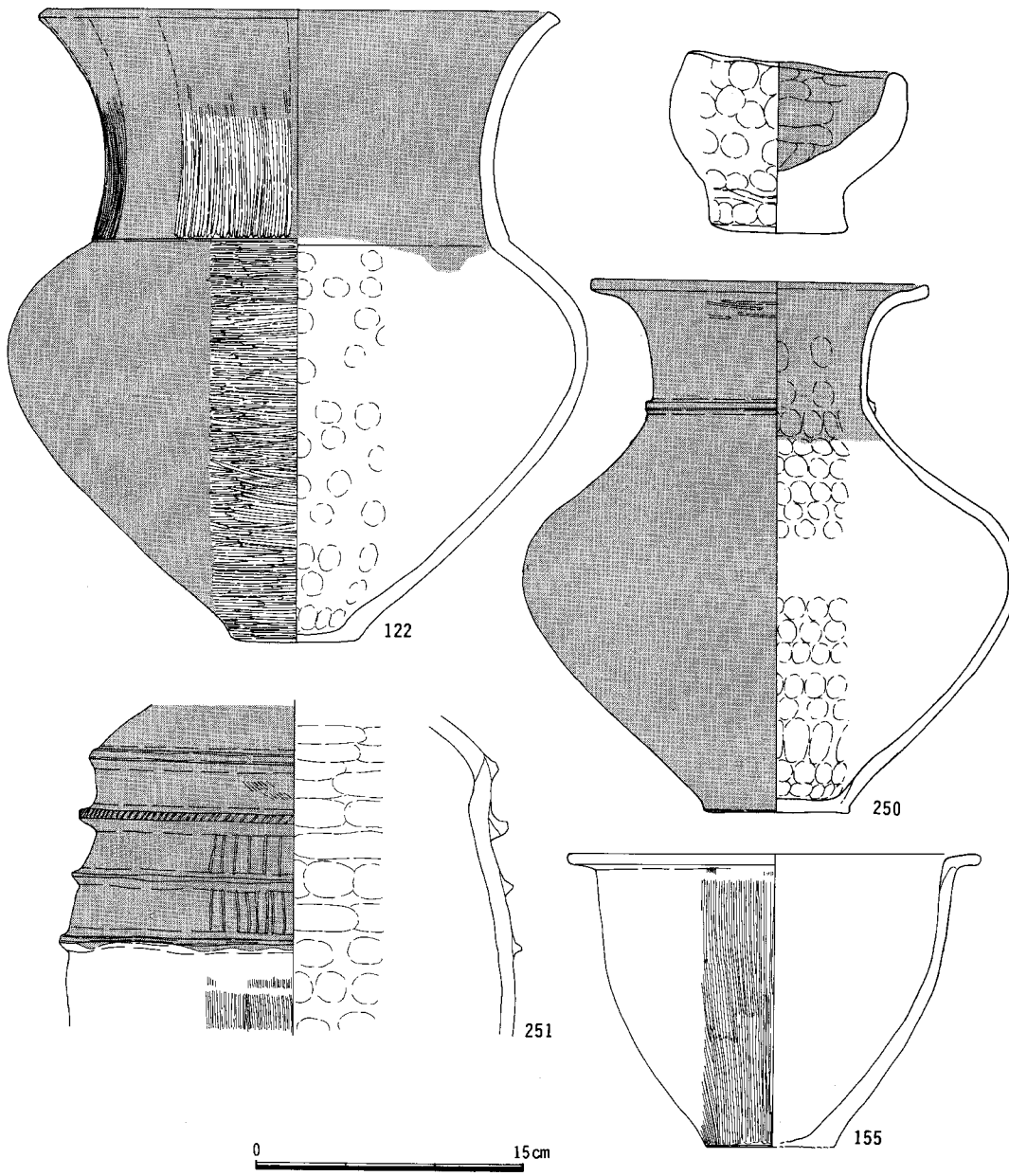


図80　28号井戸出土遺物(1)(１：４)

遺物は、覆土中から散慢に出土した他に、図示するように、底面直上で、一括投棄されたような状態を示す一群の土器が検出された。

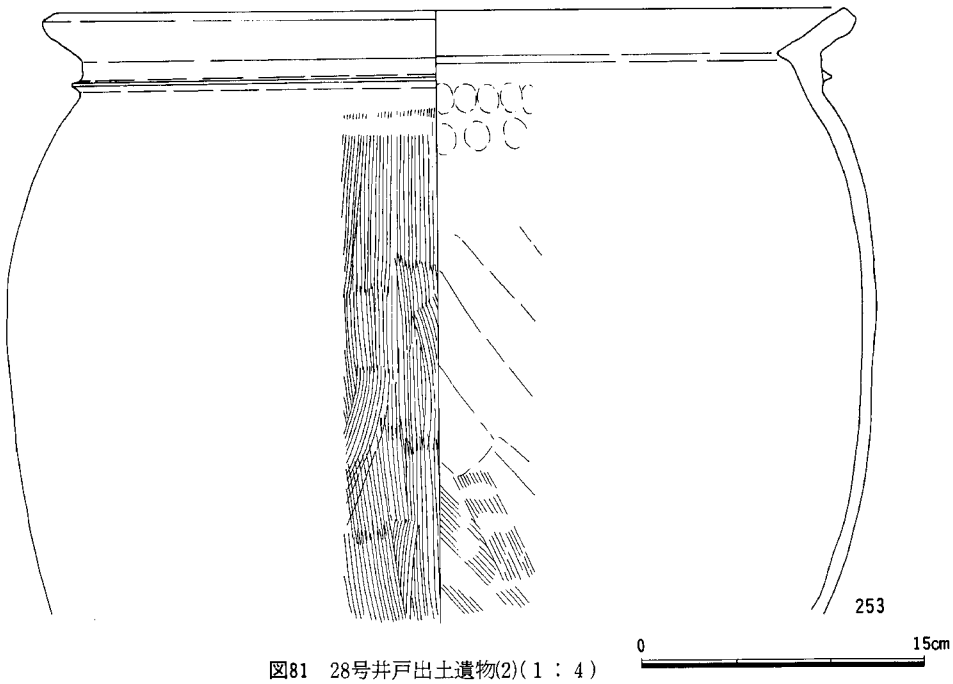


図81　28号井戸出土遺物(2)(1 : 4)

28号井戸出土遺物（図80・81）

壺は2個体を示す。122は広口の壺である。口縁は体部の径近くまで広がる。底部は、やや不安定である。250は頸部がしまり、口縁は大きく外反する。底面は平坦である。両者ともに、体部最大径位置は、胴部上半にあり、かつ全体に丹塗りが行なわれている。

瓢形土器(251)は、体部上半部のみの資料である。最下位の凸帯以上に、丹塗りが行なわれている。

155は口径が大きく、器高小である。鉢とする。体部下半部に、2次的な被熱によるものか剝落がみられる。

252は手捏ねの土器である。全体に部厚い。特に底部は台をつくり出している。内面に赤色粘土が付着している。

253は、大形の甕である。井戸側としての使用例もあるが、ここでは破片で出土した。

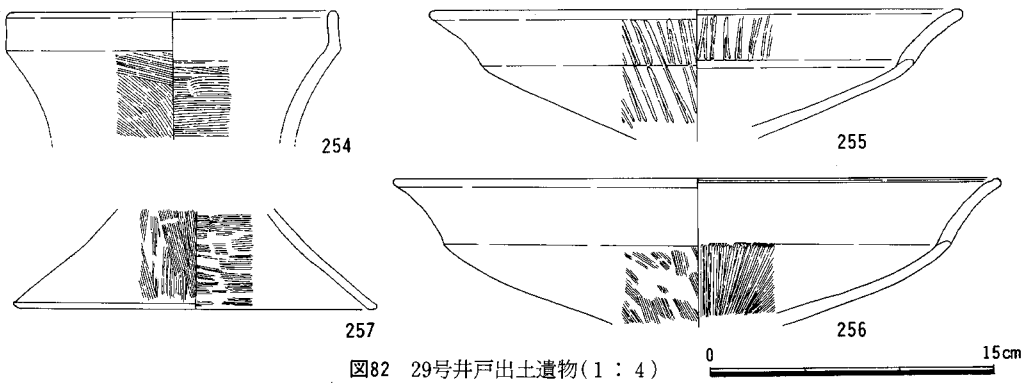


図82　29号井戸出土遺物(1 : 4)

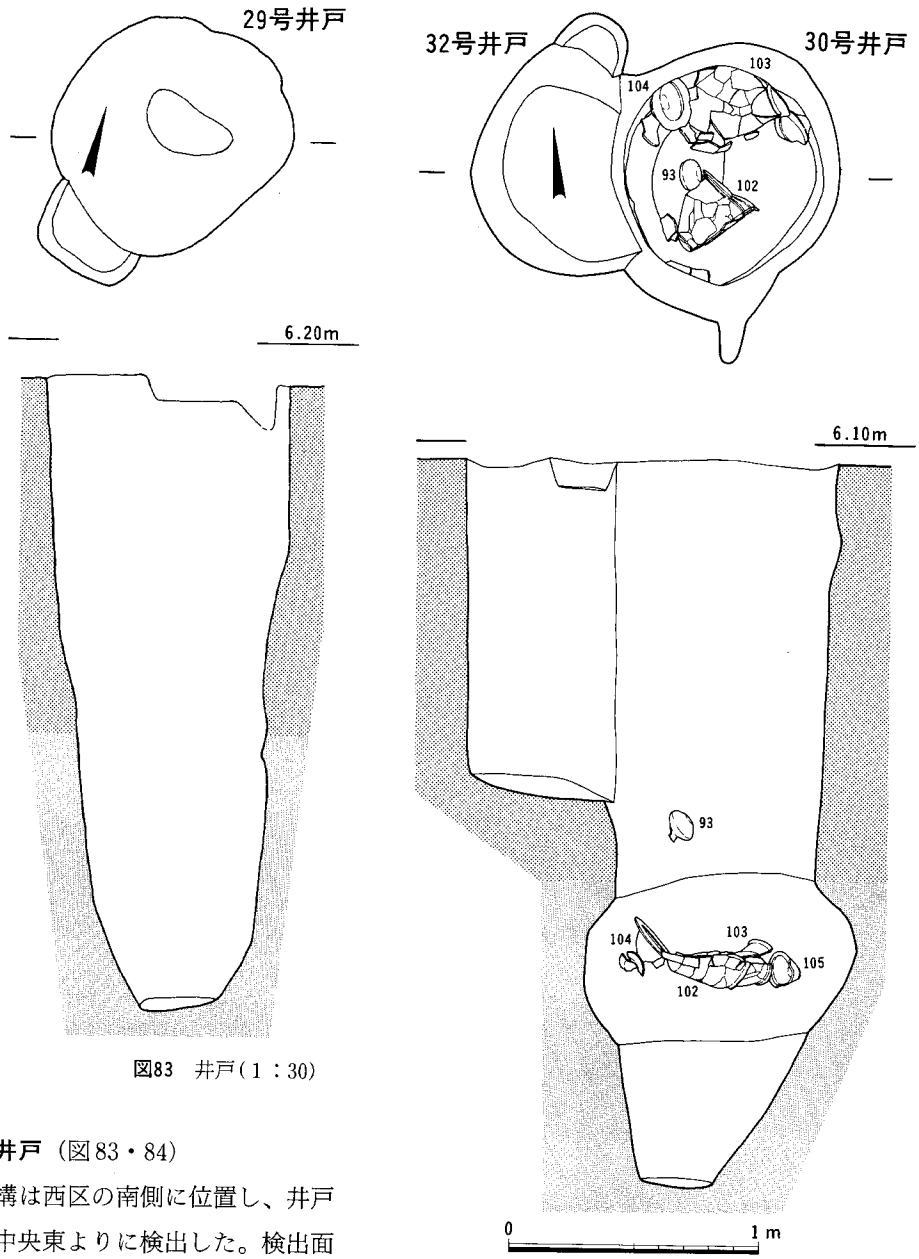


図83　井戸(1：30)

29号井戸（図83・84）

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群の中央東よりに検出した。検出面での標高は約 6.0mである。平面形は円に近い隅丸方形で、径約0.9mである。深さは約2.5mを測る。断面径は先すぼまりの円筒形を呈する。鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.7m付近に位置している。覆土は下位まで黒褐色粘質土が堆積している。遺物はわずかであるが、主に土器片が散発的に出土した。

29号井戸出土の遺物（図82）

出土した遺物は土器が主であり、それは弥生時代後期後葉のものを主体としている。これ以前の同中期から後期中葉の土器片も少量認められた。総量は整理箱1/5箱以下である。二重口縁壺（254）や坏部1/3程で大きく屈曲し開く高坏(255・256)と脚部(257）がある。

図84　29号井戸(南から)

30・32号井戸（図83・85）

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群の東端に検出された。30号と、32号は東西に接し、切り合い関係がある。後者が前者を切った状態で検出された（図　）。遺構検出面は標高約6.0mである。

32号は西側にあり、平面形は南北約0.9m、東西約0.8mの卵形を呈する。深さは1.3～1.4mを測り、ほぼ円筒状の断面形を呈する。遺構底面は鳥栖ローム中で終っており、井戸として機能したかは疑問である。覆土は黒褐色土であり少量の土器片が出土した。

30号は西側にあり上半部西側を32号により削られている。平面形は南北約1.1m、東西約1.0mでわずかに楕円形を呈している。深さは約 2.9mを測り、先すぼまりの円筒状の断面形を呈する。本遺構での鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 4.3mの位置にあり、それより下位の八女粘土からなる壁面は全周にわたって崩壊してえぐれている。覆土は下部が灰褐色粘質土、中～上部が黒褐色粘質土である。遺物は壁面のえぐれた標高約4.0m付近に完形品を含む土器群が一括出土した。出土状態は平面的に揃っており、土器群の投棄時の状況をよく示している（図　）。土器群には高坏（216・104）、鉢(105)、甕(102・262・103)などがある。このうち高坏と甕は投棄時には完形であったものが、埋没過程で押しつぶされたものと考えられる。なお、これらの土器群より 0.5m程上位に 1 点の丸底壺(93)が出土したが、その位置と所属時期が本遺構のそれとは離れていることから、32号井戸からの混入品と考えられる。

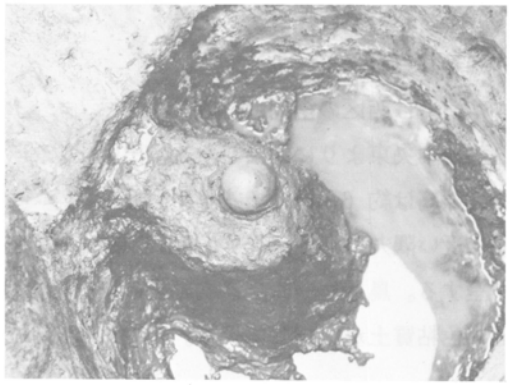


図85　井戸　30号井戸・32号井戸(完掘状況・南から)　　30号井戸(上部遺物出土状況・南から)

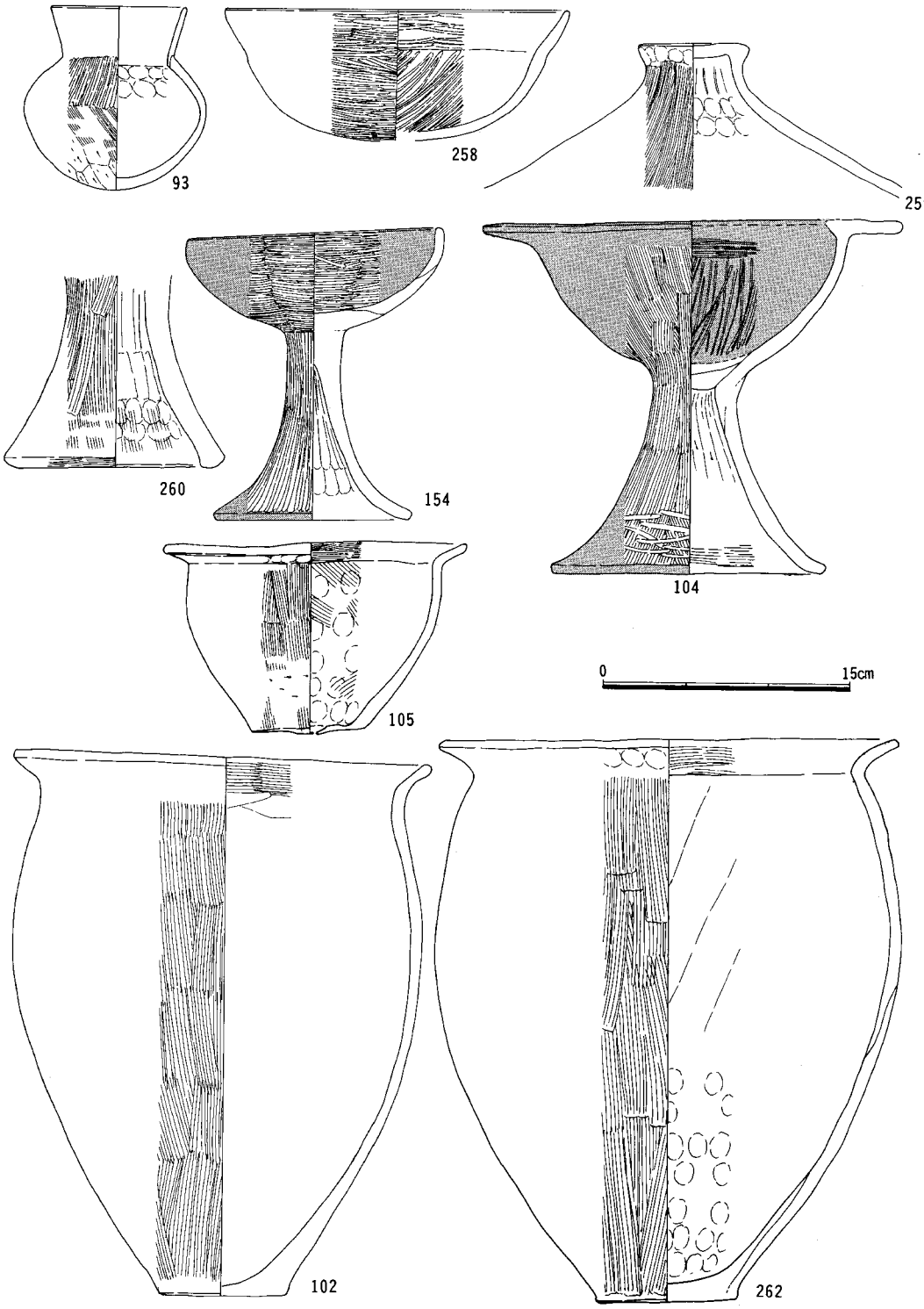


図86　30号井戸出土遺物(1)(１：４)

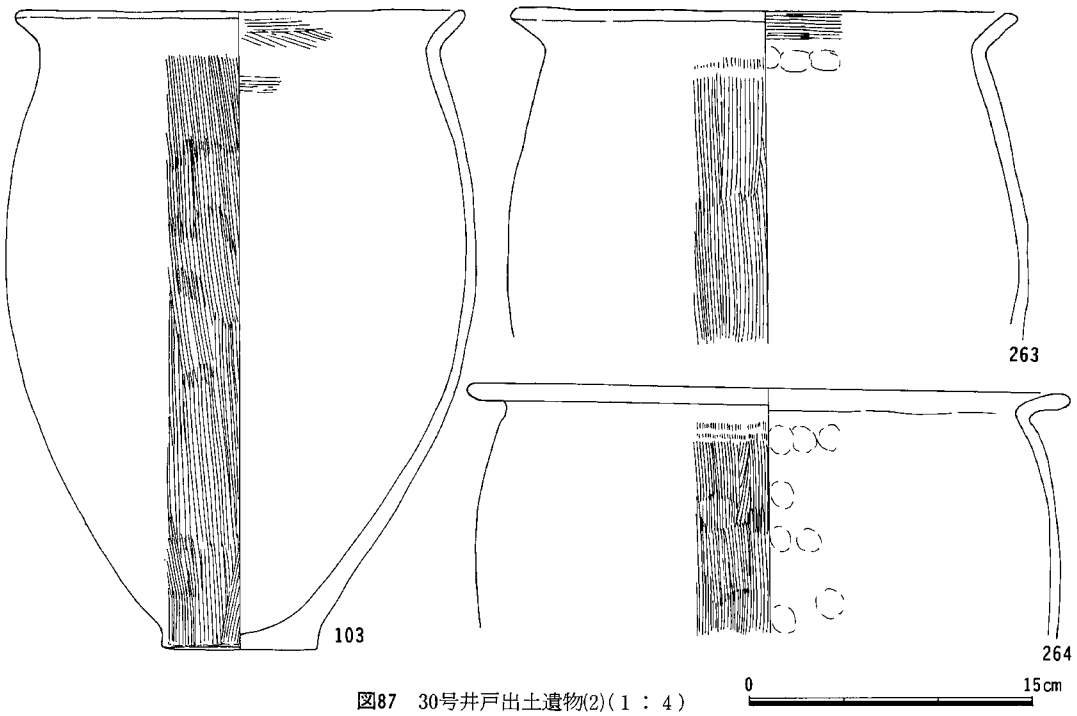


図87　30号井戸出土遺物(2)(1 : 4)

30・32号井戸の出土遺物（図86・87）

32号井戸から出土した遺物には少量の土器片がある。弥生時代中期から同後期に含まれるものであり、図化が可能で本遺構の時期を示すものはない。総量は整理箱1/10以下である。

30号井戸から出土した遺物は土器と木製品がある。後者は断片であり図化していない。土器は弥生時代後期前葉のものを主体とし、これ以前の同中期のものも含まれている。また、遺構上部には32号井戸から混入したと見られる弥生時代後期後葉の遺物が少量出土した。本遺構出土遺物の総量は整理箱4箱程度である。丸底壺(93)は器外面下にヘラケズリ・ハケメ調整、上半に丁寧なヘラミガキを施し、直口気味の口縁を持つものである。鉢（258)は内外面に丁寧なヘラミガキを施したものである。両者共に完全な丸底となり、弥生時代後期後葉の新相を示すものである。高坏には長脚に丸く立上がる坏部を持ち器内外面に丁寧なヘラミガキを施したもの（154)、鋤先口縁と深い坏部を持ち、器外面に荒いハケメ調整を施したもの（104)がある。何れも赤色顔料を塗布している。鉢（105)は底部に焼成前穿孔が見られ甑として使用されている。蓋（259)と器台（260)は外面をハケメ調整したものである。甕は口縁をく字形に開き、安定した平底から一旦直立気味に立上がり胴部に拡がる特徴を持つもの（102・262・103・263)、口縁が逆L字形に開くもの（264)がある。これらの特徴から弥生時代後期前葉でも古相を示す一

群と考えられる。

31号井戸（図88・90）

本遺構は西区の中央南側に位置し、井戸B群の北端に検出された。検出面は標高約6.1mである。平面形は東西約1.0m、南北約0.9mの卵形を呈する。深さは約0.8mであり、鳥栖ローム中に終っている。断面形は逆円錐台形を呈する。覆土は黒色粘質土である。覆土内中位の標高5.6～5.7mに南側から流入した状態で土器群が一括出土した（図　）。

31号井戸出土の遺物（図89）

出土した遺物は全て土器である。古墳時代前葉のいわゆる古式土師器を主体とし、弥生時代中期～後期のものも少量含まれる。高坏は軸部の短いもの(265)と長いもの(266)があり、浅い碗（156）と甕(267)もある。

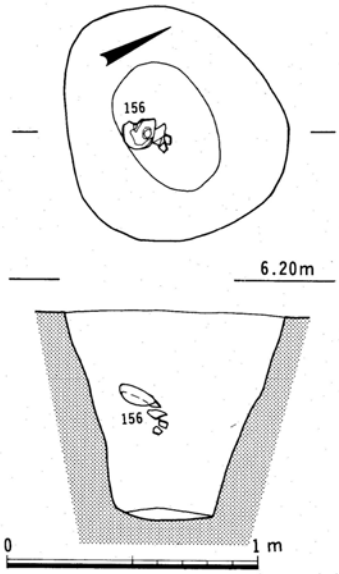


図88　31号井戸（1：30）

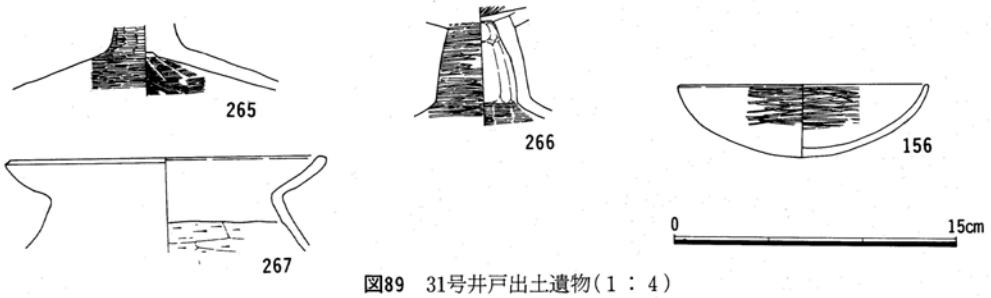


図89　31号井戸出土遺物（1：4）

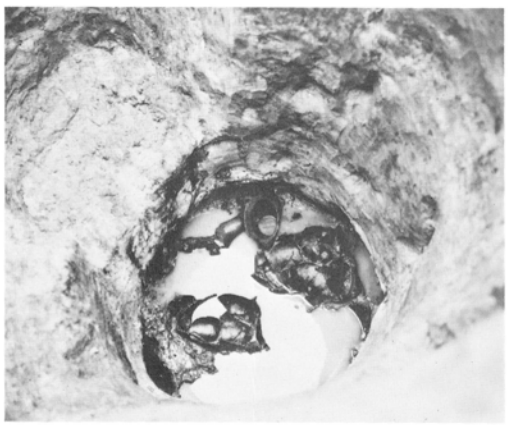


図90　30号井戸（下部遺物出土状況・南から）

31号井戸（南から）

33号掘立柱建物（図91・92）

本遺構は西区中央付近に位置し、井戸B群の南側、30号井戸の南約３ｍを隔てて検出した。検出面の標高は約6.0mである。桁行方位をN14°Wにとる桁行２間、梁行１間の建物である。撹乱により北東隅部の柱穴（Ｐ６）を欠きＰ５も一部を削られている。建物の規模は桁行 4.1m、梁行3.5mである。桁行柱間の寸法は、Ｐ1—Ｐ2、Ｐ４—Ｐ５が 2.0m、Ｐ２—Ｐ３が2.1mを測る。柱穴掘方は全て隅丸方形を呈し、最大のＰ３で約 1.3× 0.8m、最少のＰ１で約 0.4× 0.3mを測る。深さは検出面より0.1～0.2mを測る。全ての柱穴に径11～８cmの円形を呈する柱痕を残している。柱痕の覆土は黒色土である。柱穴内の覆土は黒～暗褐色土と黄～茶褐色土の交互層であり、基盤層である鳥栖ロームの小土塊を多く含んでいる。本遺構から出土した遺物は少ないが、それぞれの柱穴内覆土中から少量の土器片が出土している。それらは全て弥生時代中期後葉を示すものである。

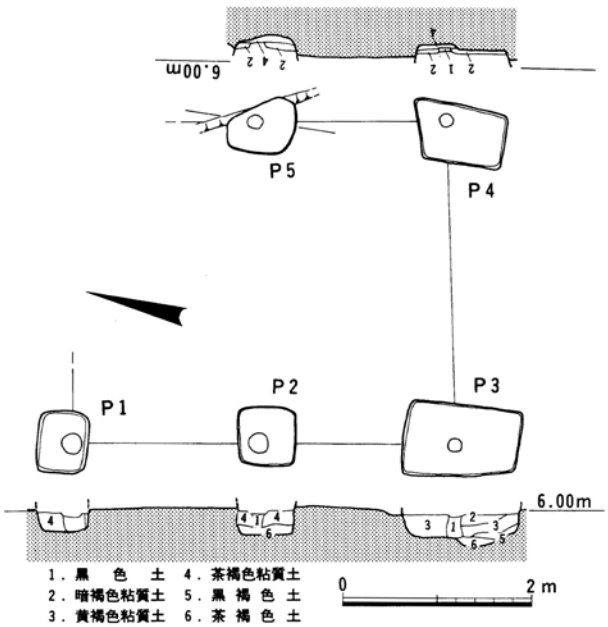


図91　33号掘立柱建物（1：80）

34号井戸（図94・95）

本遺構は西区北側に位置する。検出面である鳥栖ローム上面は本遺構南側から北へ向って緩かに下っている。検出面の標高は6.0～5.8mである。平面形は当初南北3.9m、東西3.6mの不整楕円形を呈していると考えたが、調査

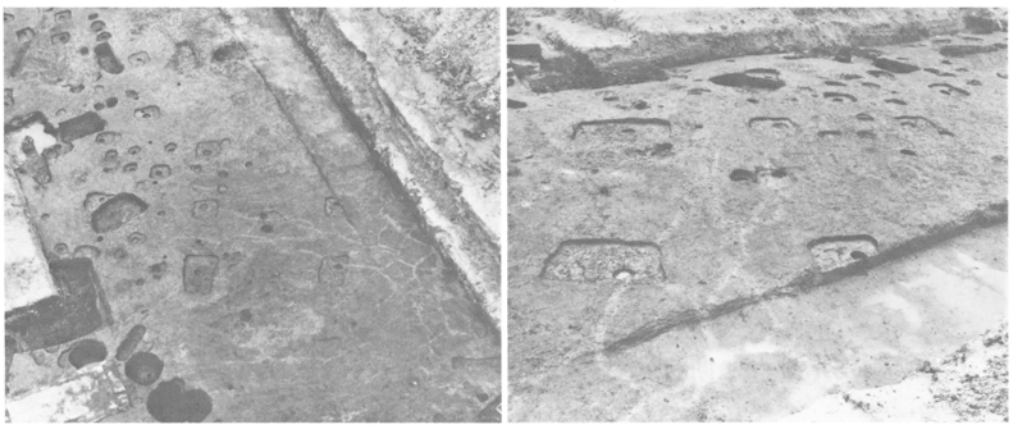


図92　33号掘立柱建物　（南から）　（東から）

の過程で北東―南西に並んだ2基の遺構の切り合いであると判明した（図　）。南西側の遺構が新しい事は堆積状態の観察から明らかとなったが、検出面での平面形は不明である。北東側の遺構は標高約 5.0mの位置で径約 1.9mの不整円形を呈し、深さは標高約 4.4mに達する。覆土は上部が黒色粘質土、下半が桃色粘土と灰色砂のレンズ状堆積である。南西側の遺構は標高約4.7mの位置で南北約2.0m、東西 1.4mの楕円形を呈し、深

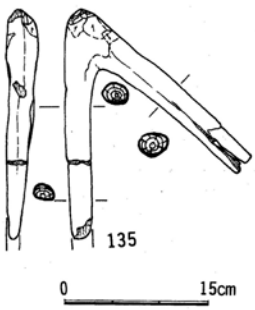


図93　34号井戸出土遺物(1)(1：8)

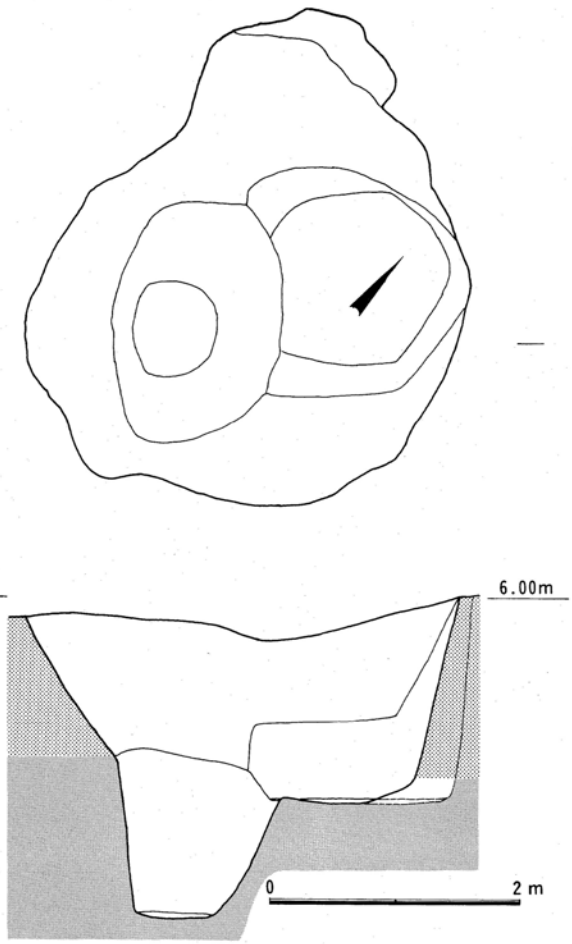


図94　34号井戸(1：60)

図95　34号井戸　遺物出土状況(北から)

完掘状況(北から)

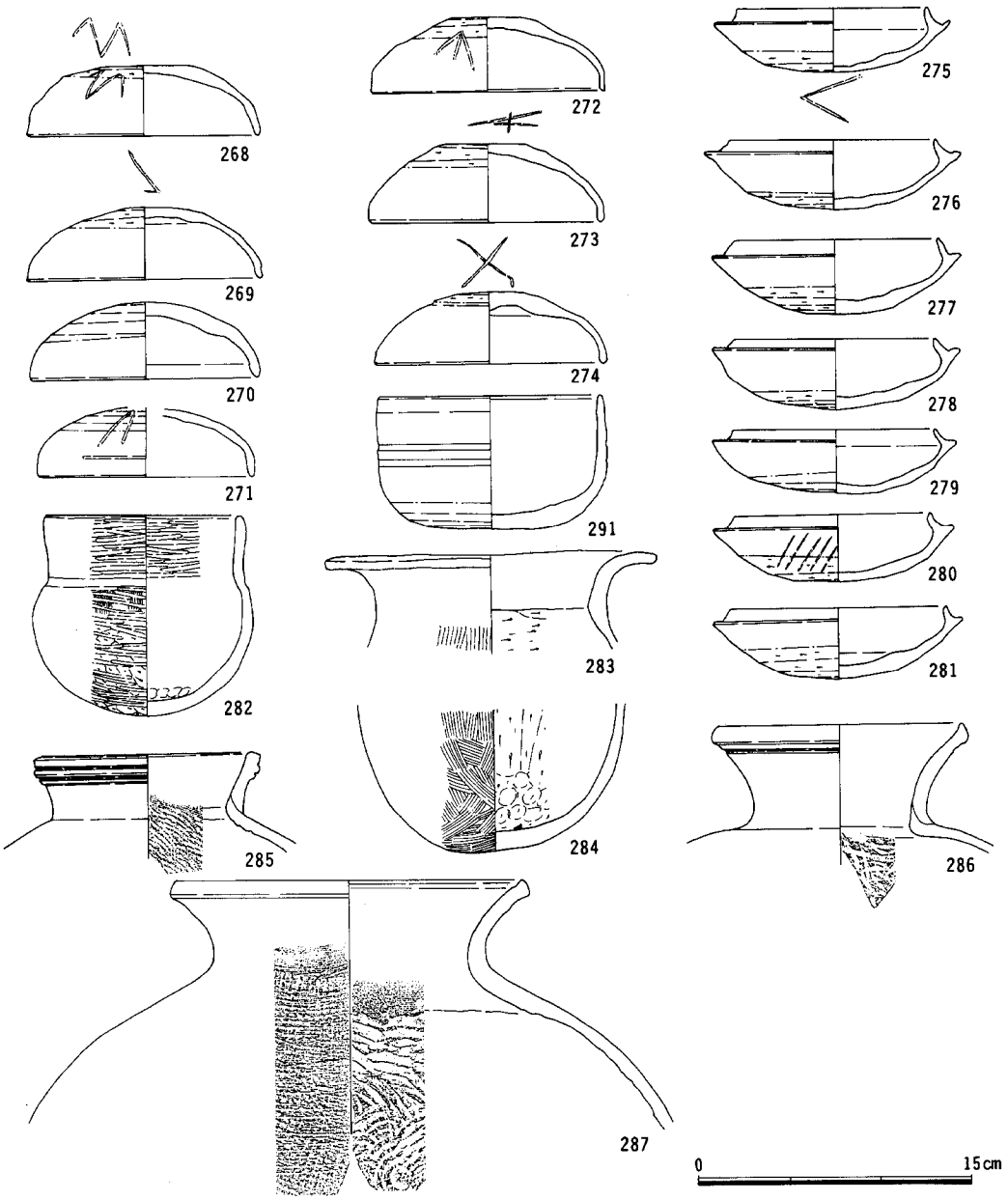


図96　34号井戸出土遺物(2)(1：4)

さは標高約 3.4mに達する。覆土は黒褐色～黒色粘土であり、下部には灰褐色粘土が堆積していた。覆土中からは多くの遺物が出土した。主に南西側の遺構からの出土であるが、北西側の遺構からも出土している。両者に形式上の時期差は認められないことから、短期間のうちに埋

没、再掘削がなされたものと考えられる。遺物のうち直口壺(282)、坏蓋(274)、坏身（277・281・282)は完形のまま投棄された状態で出土した（図95)。

34号井戸出土の遺物（図93・96)

出土した遺物には土器と木器がある。土器は古墳時代後期の須恵器、土師器を主体とし、これ以前の弥生時代中期から古墳時代前期の土器も含んでいる。土器の総量は整理箱3箱程度である。須恵器には坏蓋（268～274)、坏身(275～281)、碗(291)、甕（285～287)がある。坏類は口径13cm前後を測り、底部の回転ヘラケズリの範囲も広く丁寧であることから小田富士雄氏によるⅢB期、6世紀後葉の時期と比定される。土師器には直口壺(282）と甕(283・284)がある。木器には柄がある。現存長は22.7cm、最大厚 3.5cmを測る。装着対象は不明である。

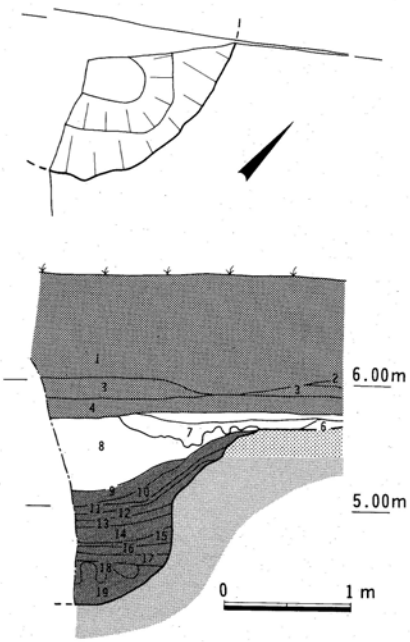


図97　35号井戸(1：60)

35号井戸（図97・99)

本遺構は西区の北西端に位置し、34号井戸の西側3.5mにある。調査区内に約¼が検出された。検出面の標高は約 5.8mを測る。平面形は不明であるが、深さは約 0.7mを測る。本遺構での鳥栖ロームと八女粘土の境界は標高約 5.2mである。覆土は上半に黒褐色粘質土、下半に黒色粘土と灰色粘土のレンズ状堆積の互層を見る。覆土上半より少量の遺物が出土した。

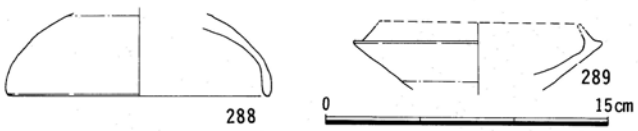


図98　35号井戸出土遺物(1：4)

35号井戸の遺物（図98)

遺物は土器片が少量ある。古墳時代後期の須恵器、土師器を主体とし、それ以前と推定される土器片も含んでいる。総量は整理箱で1/10以下である。須恵器の坏蓋(288)と坏身(289)は破片からの復原である。口径は13～14cmを測るが、底部の回転ヘラケズリの範囲が狭い。34号井戸と同様にⅢB期の範疇に含まれるが、

図99　35号井戸(南から)

より新しく位置付けられる要素を持っている。

37号竪穴住居跡（図100）

本遺構は西区の南側に位置し、井戸B群の南側に検出された。検出面の標高は約 6.1m測る。平面形が隅丸方形を呈する竪穴式住居のコーナー部分のみが検出された。主軸はおおよそN10° Wを示す。壁溝は幅約10cm、深さ約5cmであり、床面の深さは約5～10cmである。北壁は約1.2m、西壁は約1.5m残存している。周辺に多数の柱穴が検出されたが本住居に伴うと推定されるものは確定できなかった。覆土は黒色粘質土と地山の小土塊を含む黒褐色土であるが、遺物はほとんど検出できなかった。本遺構の時期は不明である。

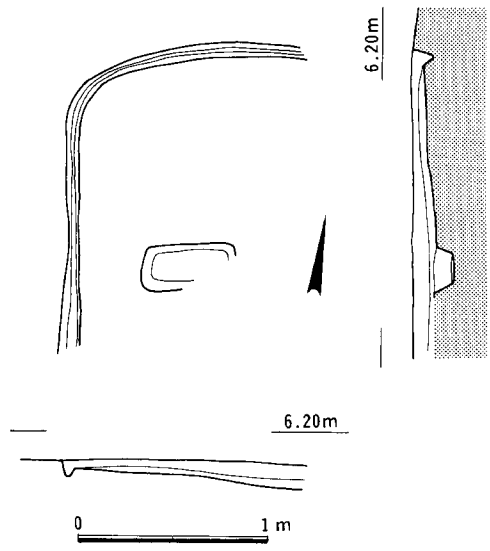


図100　37号竪穴住居跡（1：40）

39号掘立柱建物（図101）

本遺構は西区中央付近にあり、34号井戸の南約6.5mの位置に検出した。検出面の標高は約 6.1～ 6.3mであり、本調査区内で最高所にあたる。N28° Wを示す、2×2間の総柱建物である。柱穴の配置はほぼ正方形に近く、建物の一辺は約 3.4mを測る。柱間寸法はほとんどが約 1.7mを示している。柱穴の掘方は不整楕円形であり、一部に建て替えの痕跡が認められた。柱痕は過半数の柱穴に認められ、径7～9cmの円形を呈している。覆土は黒～黒褐色粘質土である。柱穴内の覆土は基盤土の土塊と茶～黒褐色土と茶褐色粘質土である。遺物は柱穴内から少量の土器片と石器が見られるのみである。土器片は弥生時代中期から古墳時代後期までを含んでいる。古墳時代後期のものとしては少量の須恵器片がある。石器は弥生時代中期～後期のものと考えられる。

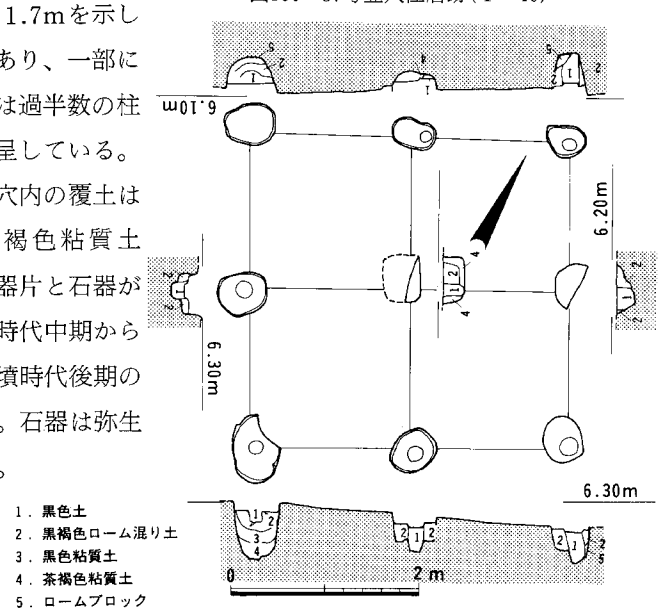
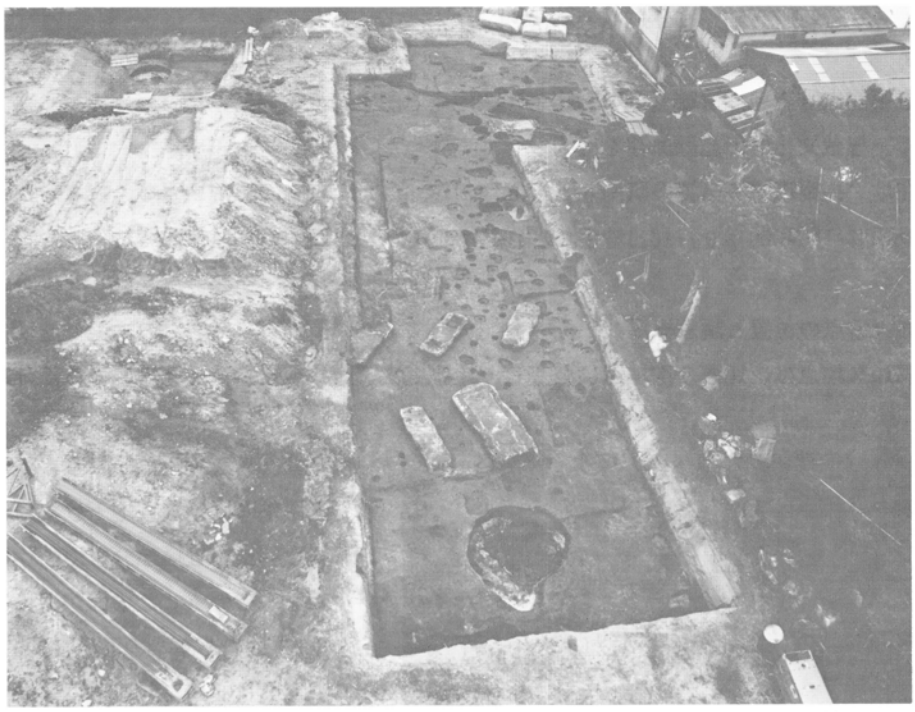
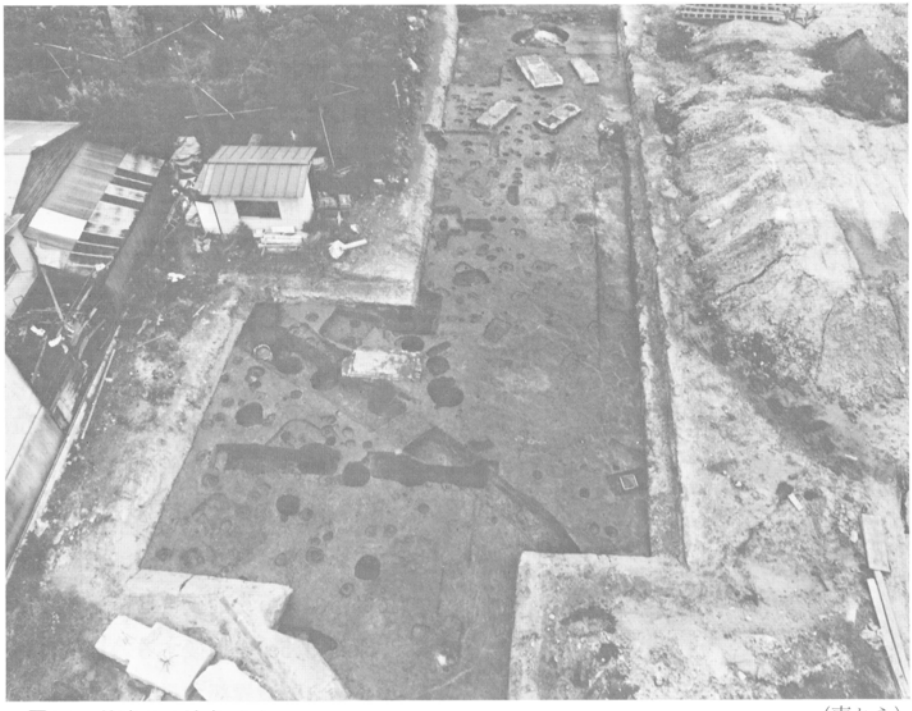


図101　39号掘立柱建物（1：80）



（北から）



（南から）

図102　比恵９次地点西区

Ⅲ．比恵第10次調査

比恵第10次調査地点遺跡（以下、比恵10次地点と記す）の発掘調査は、民間のビル建設に先立って、埋蔵文化財の記録保存を目的として実施した。

所在地　福岡市博多区博多駅南６丁目39地内793㎡のうち、約555㎡について行なった。

調査期間　昭和60年９月16日着手し、10月１日終了した。

比恵10次地点の位置と調査概況

比恵10次地点は、比恵９次地点に東接し、比恵１次調査にいう、３号環溝の通る部分に当たる。

南半部(北から)

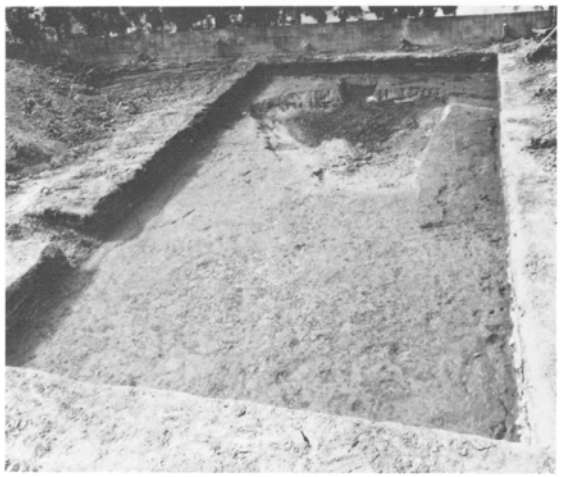


図103　比恵10次地点　　北半部(東から)

現状は、９次地点に同じく、昭和10年代の区画整理に伴なう地下げで鳥栖ロームも八女粘土に近い部分まで削除され、平坦になっている。この面が遺構検出面となり、現地表からこの面まで約0.6mを測り、標高は６mを前後する。表土は、盛土及び畑耕作土から成っている。

調査は排土を調査地内で処理する関係上、南北の２区に分けて、南半区から着手した。

その結果、南半区で井戸２基、北半区で溝１条を検出した。

以下に、各々の遺構について、調査番号順に説明する。

１号井戸（図105・112）

比恵10次地点南半区南東隅に位置する。

平面形は不整な円形状を呈す。その径1.1mを測る。断面は、下方に向かって次第にすぼまって行く、確認面下 0.9m、標高 4.8mを前後する位置から抉れて、標高 3.5mを前後する、鳥栖ロームと八女粘土の境界部で最大のひろがりとなる。以下は、次第にすぼまり、標高 3.5mで

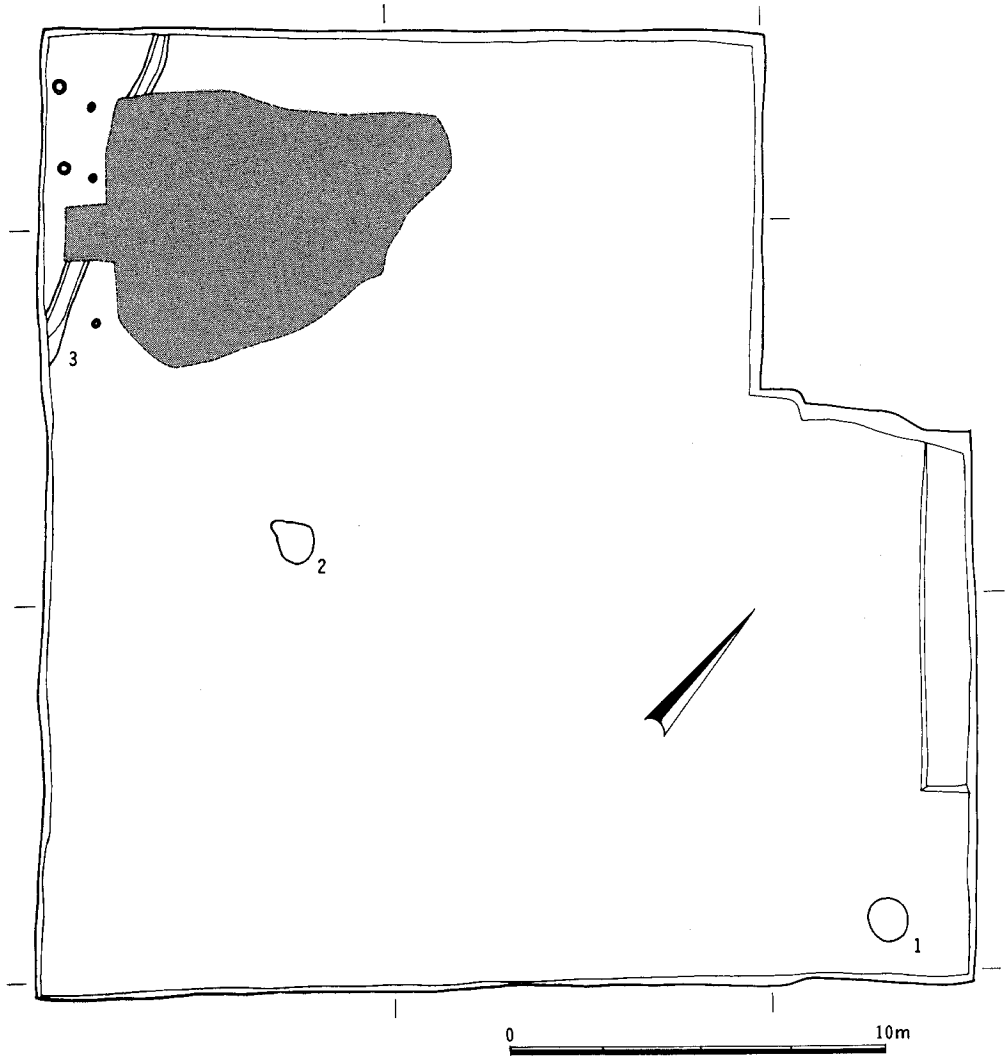


図104　比恵10次地点全体図(1：200)

底面となる。底面は、平面形瓜状を呈する。こういった状況は、他のいくつかの井戸でも見られた。掘削方法を示すものであろうか。標高 4.0m以下、底面までは、埋没が早く、良く原状を留めているものとみえる。

覆土は、黒褐色粘土で、八女粘土ブロックを含んでいる。遺物は、土器及び木器が、一括投棄された状態で、底面上 0.2mの位置から抉れが最大となる高さまでの間に出土したが、それと井戸底面の間は、竪くしまった八女粘土ブロックにより埋まっていた。

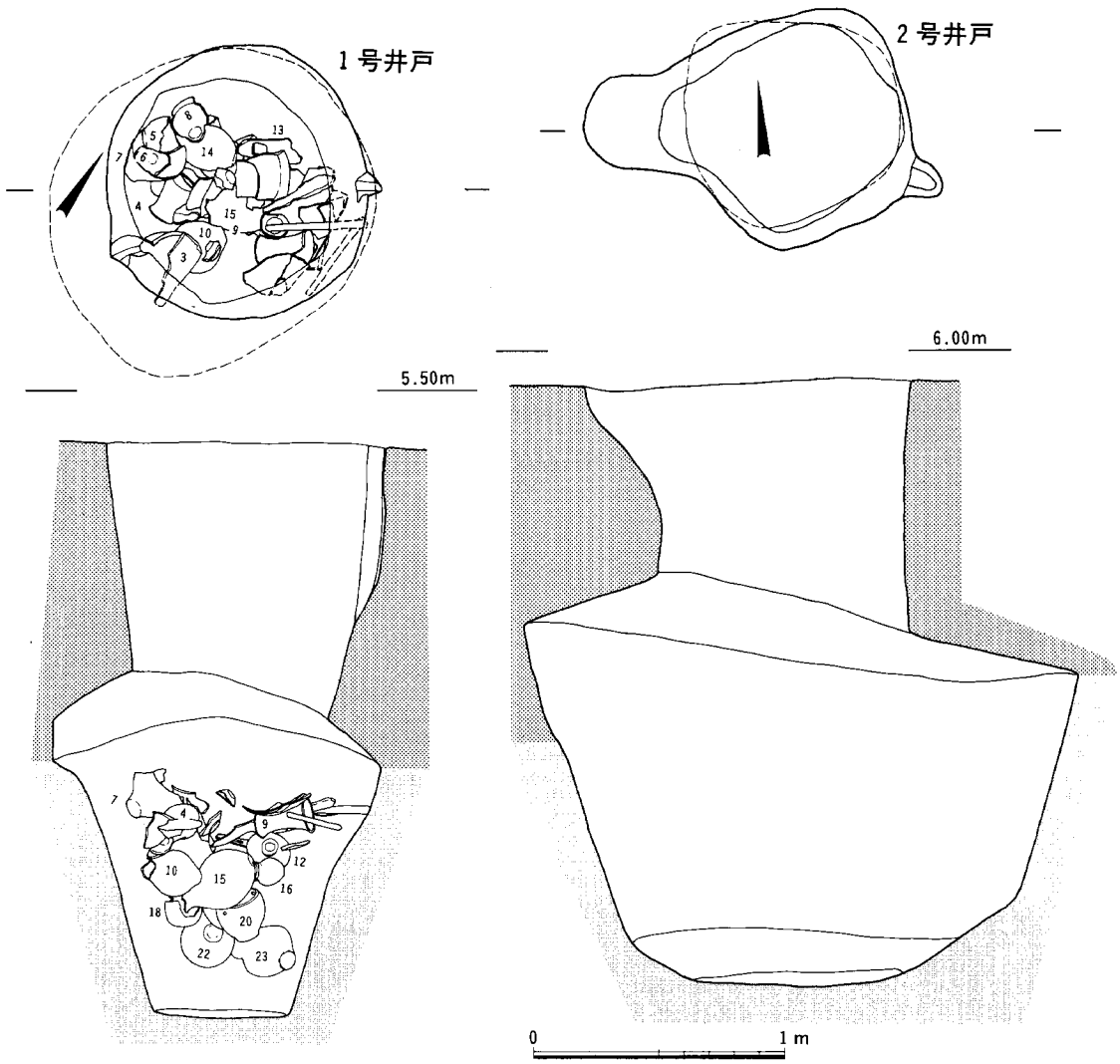


図105　井戸(1：30)

遺物は、いま述べたような出土状況を示すもの（3～26；調査時）の他に、覆土中から散慢に出土した。うち、土器の総量は、図示するものの他に、コンテナ⅓程が出土している。以下に遺物を示す。

1号井戸出土遺物（図106・107・108・109）

壺には2者ある。ひとつは、球形又はそれに近い胴部が強くくびれて屈曲し、そこから上方に高く口頸部がのびるもの(17・21)、胴長の体部でゆるくくびれる頸部から外方に開き、口縁部で内湾するもの(10・23・16・19)、そこで短く開いて端部となるもの(22・14・18)とがある。いずれも底部は、不安定な平底か又は、緩い丸底となっている。胴部に打ち欠きによる穿孔と

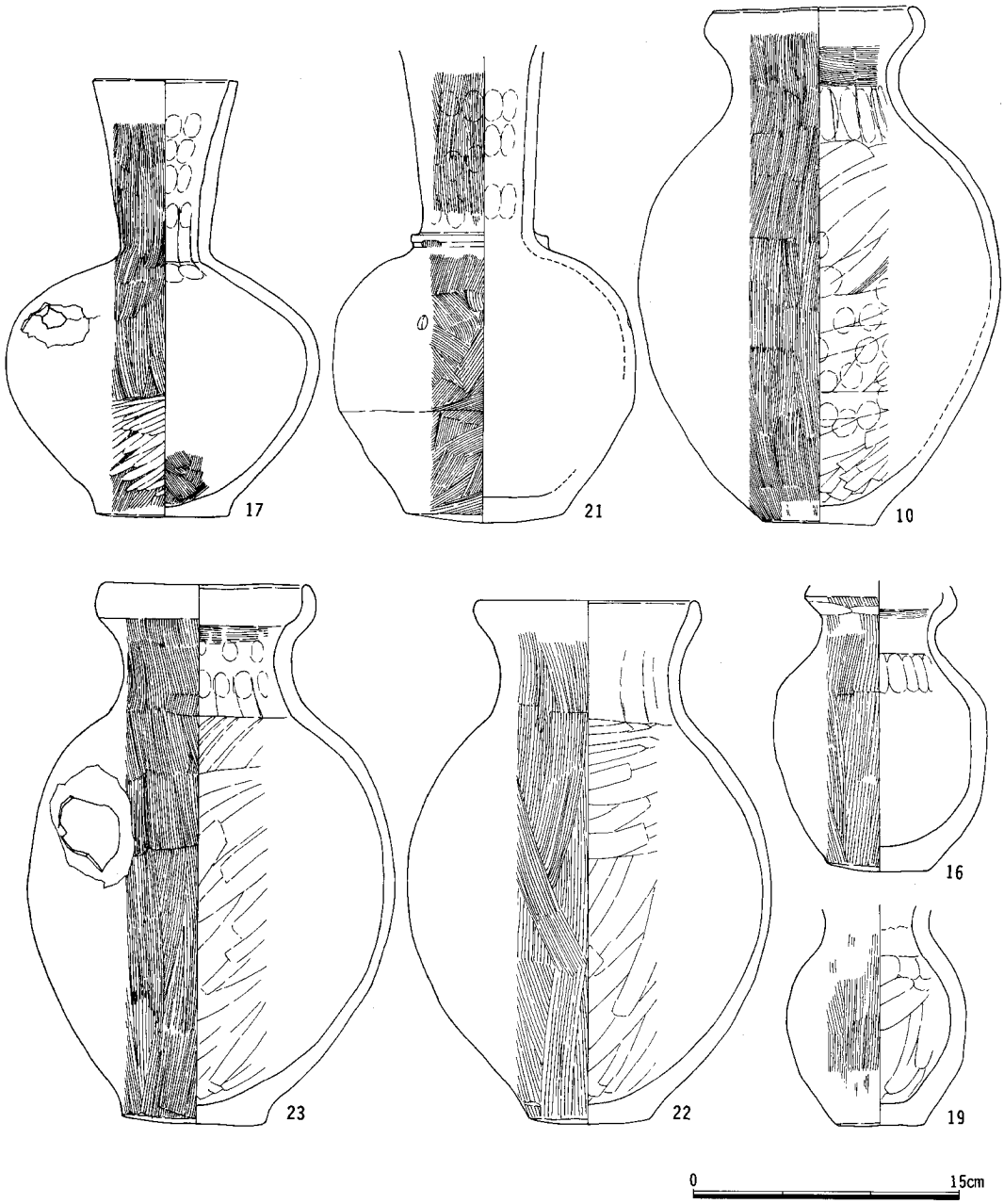


図106　1号井戸出土遺物(1)(1：4)

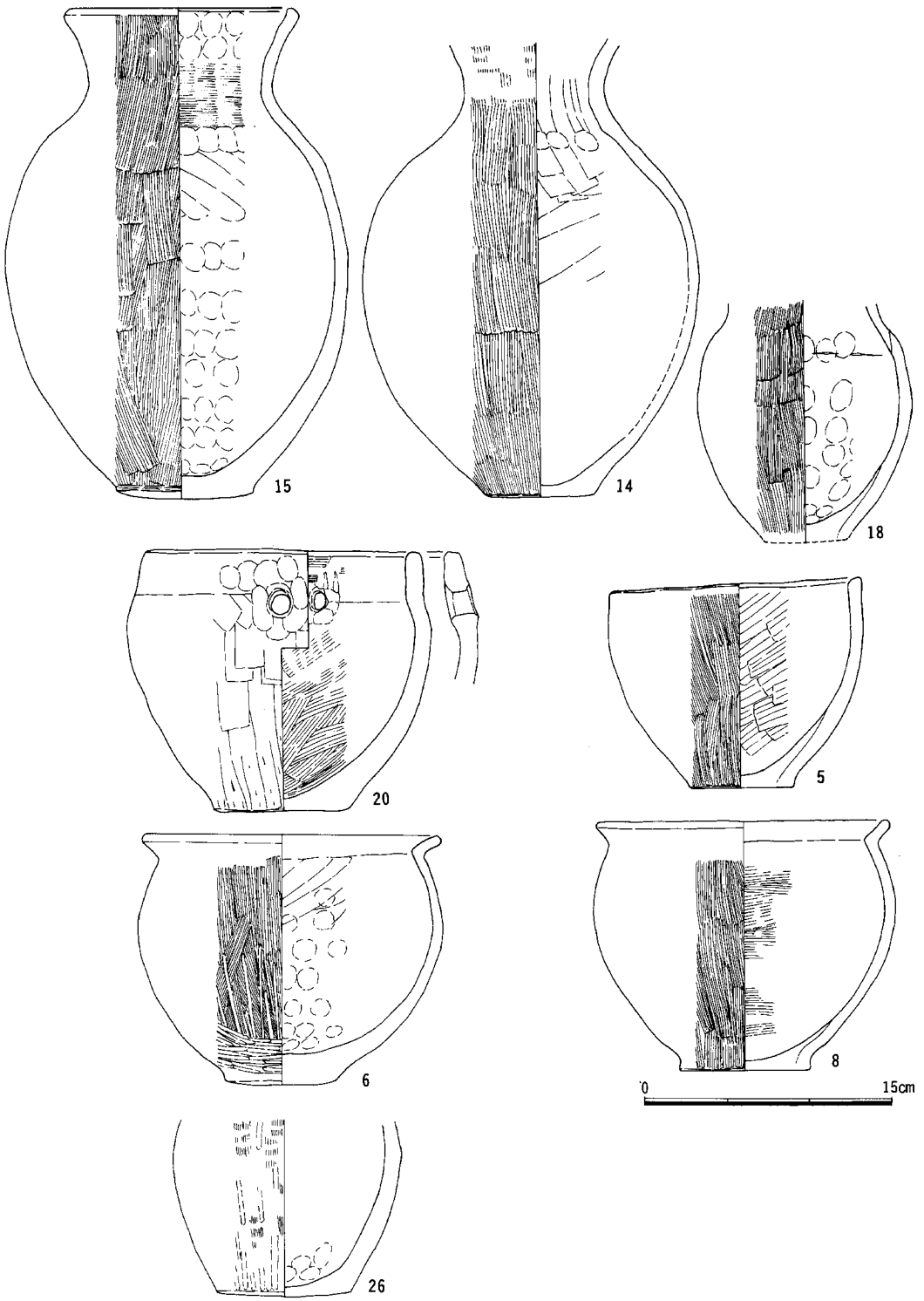


図107　1号井戸出土遺物(2)(1：4)

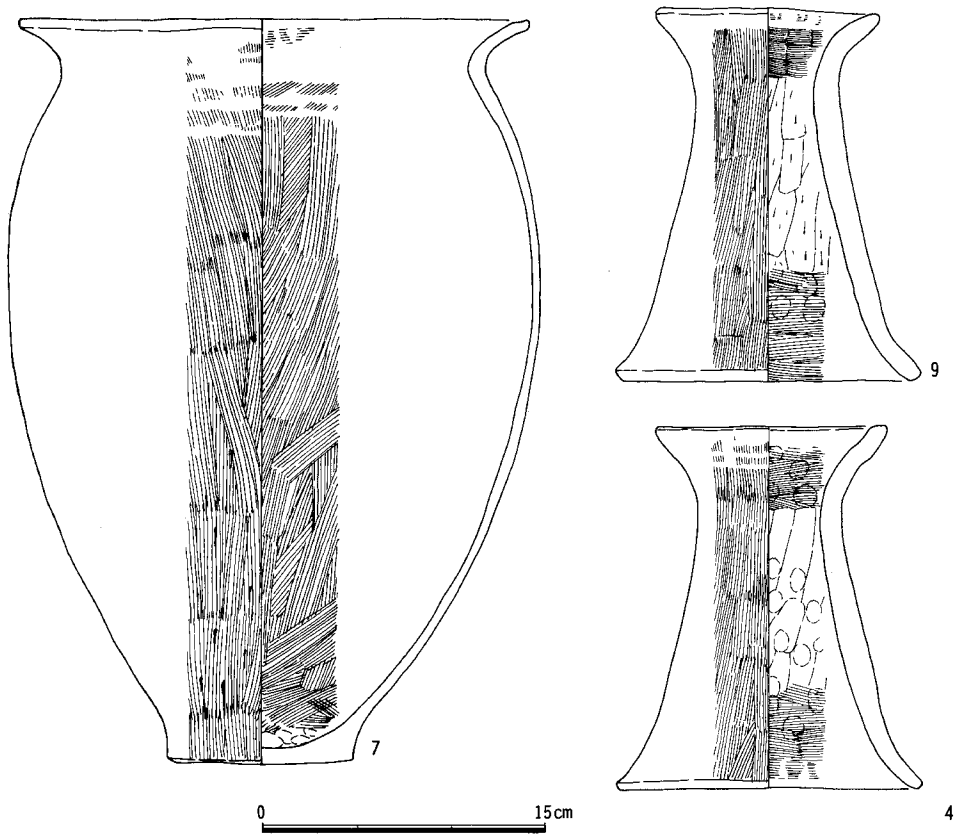


図108　1号井戸出土遺物(3)(1：4)

みられる孔をもつ資料がある(17・23)。

鉢は、20を除けば、体部が立ち上ってそのまま口縁端となる5・25と、外方へ屈曲し内面に稜を成して口縁となる24・8とがある。20は、体部がやや内屈して口縁となる。単孔1対の焼成前の穿孔が行なわれている。

甕(7)強くくびれたのち外反する口縁部と不安定な底部をもっている。

器台(9・4)規模・形状とも酷似する2点がある。

以上の資料については、壺のあり方から弥生時代後期前葉を考えることができよう。

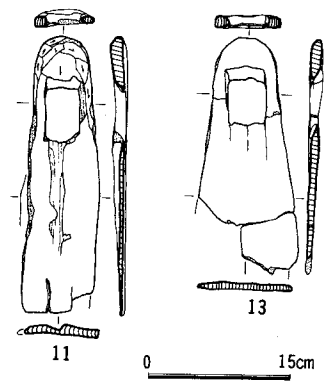


図109　1号井戸出土遺物(4)(1：8)

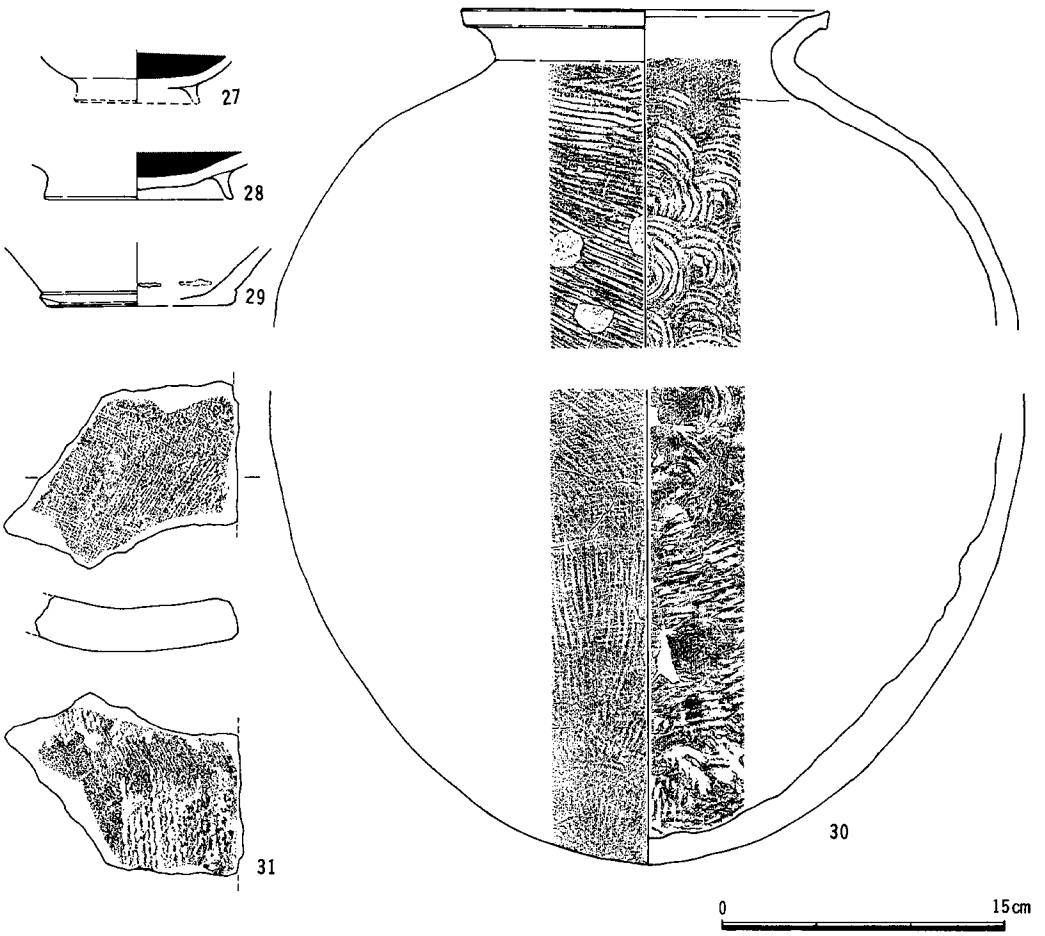


図110　2号井戸出土遺物(1)(1：4)

2号井戸（図105・112）

2号井戸は、比恵10次地点の中央部近くに位置する。

平面形は、片側に大きな凹みがあって洋梨状を呈する。凹み部は、井戸の壁となめらかな曲線でつながっており、使用中の段階でもこの状態であったことが考えられる。その意味については知り得ないが、同様な特徴をもつ遺構が比恵8次地点でも検出されている。凹みのない部分での井戸の径0.9m、確認面下0.8m、標高5.1mのところから大きな抉れがはじまり、標高4.7mを前後する位置で最も広く、径 2.3m程となる。以下は鉢状にすぼまり、底面は、確認面での大きさ程の円形状を呈する。覆土は、確認面では灰褐色、下部は、黒褐色乃至黒色粘土となる。抉れ部より下は、八女粘土の崩落土で埋まっている。

遺物は、覆土中から出土した。コンテナにして1箱程の量である。

2号井戸出土遺物(図110・111)

小形の土器には、内黒の碗(27・28)底部破片、見込部に目跡のある青磁碗(29)がある。30は須恵器甕、31は平瓦破片である。

木器は、曲物(32・33)がある。出土時は、共に側板と底板が組み合わさっていた。

小形の土器から、平安時代末頃が考えられよう。

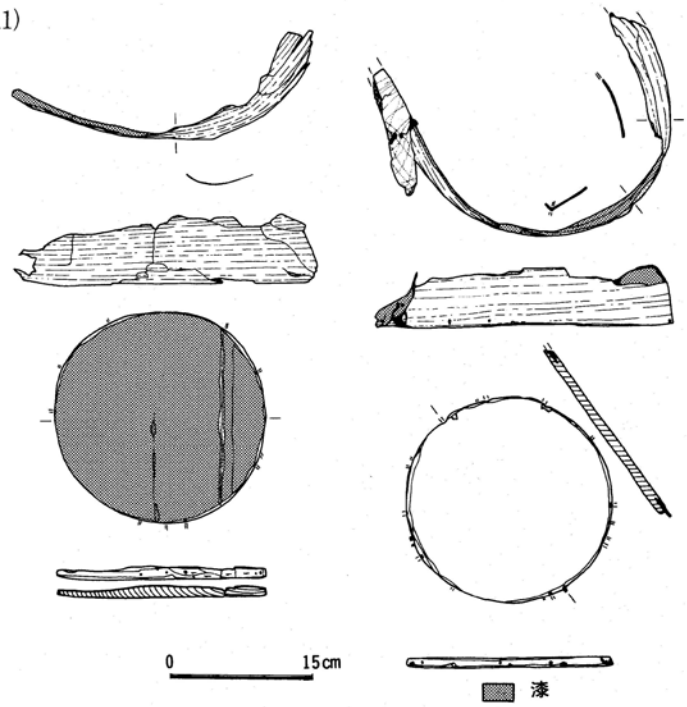


図111　2号井戸出土遺物(2)(1：8)

3号溝（図104）

調査区北西隅部を南北方向に走る。断面形は深い皿状で、深さ 0.2m、幅　m程を測る。覆土はロームブロック、黒褐色粘土より成る部分がある。木炭を含んでいる。全体に粘土味が少なく、しまりがない。

1次調査で言うところの3号環溝の位置が、この3号溝のそれとよく一致する。あるいは3号環溝を示すものなのであろうか。

遺物は、弥生土器細片少量が出土した。

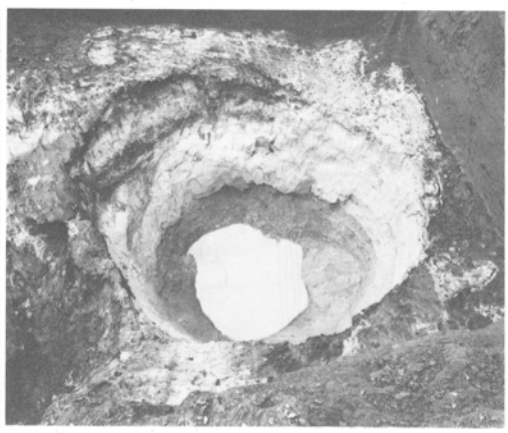


図112　井戸　　1号井戸(南から)　　2号井戸下部(南から)

Ⅳ. おわりに

比恵9・10次地点の変遷について

以上、比恵9次地点・10次地点のそれぞれの遺構について、出土した土器及び木器の説明を行なった。石製品、金属製品については、整理・報告作業の期間の問題で、割愛せざるを得なかった。土器は、弥生時代中期以降のものが、必ずといってよいほど混在する。但し、弥生時代前期以前の資料については、整理の過程では、それと判るものはなかった。

さて、ここでは、今回調査した遺構について、時期毎にそれが示す景観を考えてみたい。

比恵9・10次地点の遺構を4時期に区分するとすれば、次の5時期が考えられよう。

但し、繰り返しになるが、現状、特に比恵10次地点、比恵9次地点東区のそれは、大規模な地下げの結果である。第1次調査の時点では、柱穴群あるいは竪穴が、環溝内のみか否かは別としても、遺存しており、現状の示す景観は、一部を除いては井戸と溝とのつくり出すそれ、ということになる。

以下、各時期について概観する。

弥生時代中期　比恵9次地点の井戸は、東区にA群、西区にB群としてほぼ群在する。中期の井戸は、A群をはずれて2基（3・4）B群に1基(28)ある。西区には土坑2基(18・22)もある。

弥生時代後期前・中葉　井戸が遺存する。比恵9次地点のA群に9基（5・6・7・8・9・10・11・12・13)、B群に3基(26・27・30)、比恵10次地点に1基認められる。33号掘立柱建物もこの時期あるいはこれ以降と考えられる。

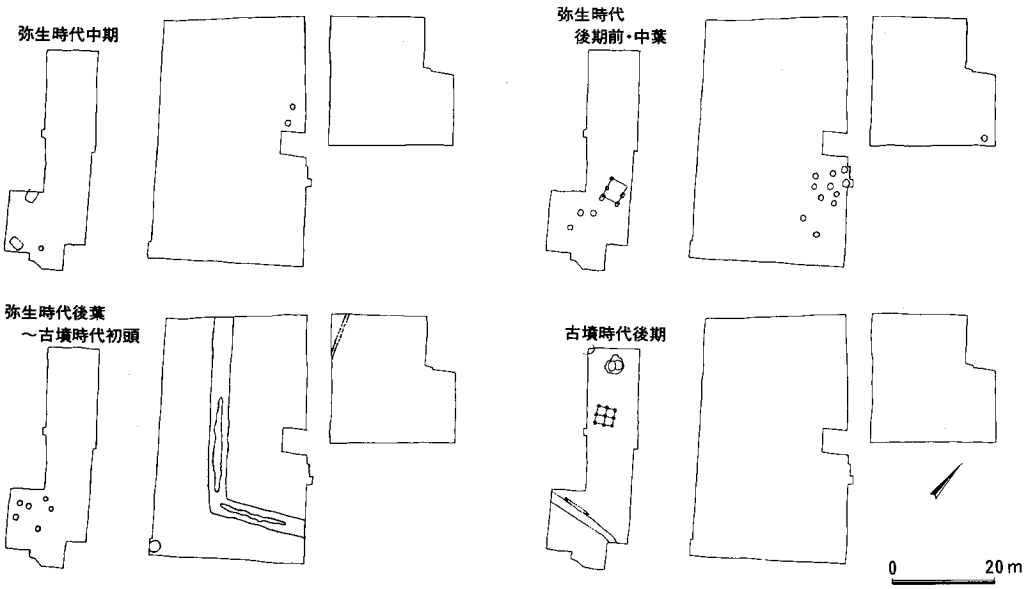


図113　比恵9・10次地点の変遷（1：1500）

弥生時代後期後葉・古墳時代初頭　井戸は、A群には認められず、B群に6基（19・24・25・26・29・32)、比恵9次地点東区南西隅に1基(15)位置するようになる。東区には、1号溝、続いて17号溝が同じ位置に掘削される。比恵10次地点の3号溝は、1次調査にいう3号環溝に相当するかも知れない。

古墳時代後期　比恵9次地点西区に溝(22・23)、掘立柱建物(39)、井戸(34・39)が分布する。

平安時代　比恵10次地点に井戸(2)がみられる。

各遺構のうち確実に遺存しているのは、井戸であろう。B群においては、北部から掘削されはじめて次第に南へと場所を変え、ついには、溝にその場を明け渡したとでもいうような状況が観てとれる。ところで、A群の井戸が立地する部分は、井戸断面図に示すように、八女粘土の上面が北と西から次第に低くなって谷状になっている部分に一致する。地下水脈の状況は、知り得ないが、井戸の群在の要因としては、そういった自然的環境による規制を大とできよう。

いわゆる環溝について（1号溝・17号溝）

これまで得た成果をまとめると、以下のようになろう。

比恵9次地点1号(17号)溝は、1次調査にいう2号環溝に当たり、その南西部を調査した。比恵10次地点3号は、1次調査にいう3号環溝と位置が一致するが、規模、覆土の点で疑問が残る。

1号溝の掘削時期は16号井戸（弥生時代後期中葉）の埋め立て後であり、埋没の上限は、弥生時代後期末を上限とする。1号溝は埋没後、ふたたび掘削される(17号溝)。17号溝の埋没時期は、古墳時代初頭を上限とする。横断面からみると、1号溝は逆台形状、17号溝は、U字形又は緩いV字形という相違がある。溝底高は、部分的に高低があるが、標高5.3～5.4mで、全体としては水平といえる状態である。但し底面に非常に小凹凸が多い。生痕化石といったものが考えられるのだろうか。

さて、弥生時代後期において、1(17)号溝のような大規模な溝を掘削する例は、北部九州地域だけで10例を越えている。[注8] このうち、福岡市内例をとってみても、比恵・野方中原[注9]・今宿五郎江[注10]の各遺跡が挙げられる。又、周辺地域に、春日市大南遺跡[注11]・前原町浦志遺跡A地点[注12]がある。

それとは別に、多く類似点をもち、比恵遺跡での状況を考える資料となるものに、佐賀県千塔山遺跡における例がある。[注13] 千塔山遺跡では環溝は丘陵上の一辺を崖線として、他を不整なコの字状に廻っている。溝には2時期あり、後期後半と考えられる古い溝は、U字溝（断面逆台形状）で南北75m、東西67m以上を測り、多量の土器、鉄器、青銅製鋤先などを出土する。新しいそれは終末期と考えられており、断面V字状を呈し、南北95m、東西75m以上を測る。少量の遺物を出土している。

後者は、前者の埋没が大きく進んだ段階で、その上から掘削され、北では古い溝の範囲を明

らかに越えて広がっている。V字溝の平面形が不整なことは、比恵9次地点の17号溝の状況に似ている。ただ、千塔山遺跡の環溝は陸橋を持っている。

今、U字溝の時期の住居址位置を見てみると17棟のうち、U字溝内に7棟、他は外側になる。外側の10棟は3群に分かれると観察されている。終末期の住居址は、V字溝内に11棟（1棟はV字溝に切られる)、溝外に4棟が位置する。環溝内の高い部分に掘立柱建物8棟が位置している。柱穴からは後期の土器が出土している。

上記の状況から比恵9・10次地点を考えてみると、溝の形状、掘り替えの順序、青銅製の鋤先の出土というような事実については、よく一致する。ただ、それぞれ考えられる時期にずれがある。今のところ、比恵9・10次地点の集落について考えるための資料は、井戸のみである。井戸は全て環溝の外に離れて在る。

こういったことからすると、削平されて今はない住居址が、環溝内外に広がっていたことは、十分可能性をもっている。つまり、一般的に言われるように「環溝集落」が防御、それを必要とさせる戦闘のある状況を反映したものであるにしても、井戸に象徴されるように日常的な生活は、その施設に規制されることなく営まれていたのである。

以上、気づいた2、3点について記した。

注

1）鏡山猛1972「環溝住居址論攷」『九州考古学論攷』吉川弘文館
2）福岡市教育委員会1983『比恵遺跡—第6次調査・遺構編』福岡市埋蔵文化財調査報告第94集
3）筑紫野古代史研究会1972『見捨てられた春住遺跡—縄文晩期終末へのアプローチー』筑紫古代史研究会々報第2集
4）瑞穂遺跡調査団1980『瑞穂　福岡市比恵台地遺跡』日本住宅公団
5）2）に同じ
6）福岡市教育委員会1985『比恵遺跡　第8次調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告第116集
7）2）に同じ
8）基山町遺跡発掘調査団1978『千塔山遺跡』
9）福岡市教育委員会1974『野方中原遺跡調査概報』
10）本年度報告の予定
11）春日市教育委員会1976『大南遺跡調査概報』春日市文化財調査報告第4集
12）前原町教育委員会1984『浦志遺跡A地点』
13）8）に同じ

比恵遺跡

第9・10次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集
昭和61年3月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7番23号
印刷　株式会社チューエツ
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号